子A79

百家說林

卷九

兎園小說

国立国会図書館
25.3.31
112618

兎園小說目錄

○第五集 乙酉夏五月朔於好問堂集會各披講了 (承前)

○家相の談　小野小町の辨　間違草の事　乾齋　一頁

○定吉稲荷　輪池堂　三頁

○稲荷の正一位　仝　九頁

○神童石川爲藏詠歌の事　文寶堂　十頁

○茸屋町歌舞伎座の梁折れし事　仝　十四頁

○町火消人足和睦の話　海棠庵　十七頁

○佐倉の浮田　安永以來のこやり風　著作堂　廿七頁

○兩國河の奇異　庚辰の猛風　美日の斷木　仝　廿二頁

○賀茂甲斐筆法の辨　著作堂客篇　京青李庵　廿六頁

○花　仝　廿七頁

○松五郎が遺愛馬考異　琴嶺舍　廿九頁

○奥州平泉毛越寺路舞歌唐拍子　仝　四十六頁

○第六集 乙酉夏六月十三日於輪池堂集會席上各披講了

○土定の行者不死　土中出現の觀音　著作堂　四十八頁

○蛇化爲蛸　琴嶺舍　五十四頁
○雙頭蛇　仝　五十七頁
○奥州南部癸卯の荒饑　好問堂　五十九頁
○身代り觀音補遺　仝　六十六頁
○狐孫右衛門が事　海棠庵　六十九頁
○なら背　乞兒の賢　羅城門の札　乾齋　七十一頁
○新吉原若松屋の掟　文寶堂　七十五頁
○突といふ沙汰　仝　七十八頁
○松前の賢女　輪池堂　八十一頁
○北里の烈女　仝　八十二頁
○第七集　乙酉秋七月朔於文寶堂集會各披講了
○古墳女鬼　文寶堂　八十四頁
○金靈并ゴ鰹舟の事　仝　八十六頁
○由利郡神靈　海棠庵　八十七頁
○土中出現黄金佛　仝　八十九頁
○蛇祟　仝　九十二頁
○勝敗不由多少之談　乾齋　九十四頁

○腐儒唐様を好みし事　仝　九十五頁
○養和帝遺事　附雨蛤竹筒　好問堂　九十七頁
○自然齋の歌　仝　百一頁
○野狐魅人　輪池堂　百三頁
○上野國山田郡吉澤村掘地所見石棺圖　仝　百五頁
○石棺圖別錄　仝　百七頁
○靈救水尼金像觀音　再考　附　文寶堂　百八頁
○松前大福米　著作堂　百十一頁
○平豐小說辨　琴嶺舍　百十九頁
○第八集　乙酉秋八月朔於海棠庵集會各披講了　著作堂
○鑿井出火　海棠庵　百三十四頁
○婦女産石像　貞享四年官令　仝　百三十七頁
○變生男子　文寶堂　百四十頁
○狐屬の幸　仝　百四十三頁
○九姑課　好問堂　百四十四頁
○夷言粉挽歌　輪池堂　百四十六頁
○物怪の濡衣　仝　百四十八頁

○隅田河櫻餅　輪池堂　百五十頁
○本所石原の石像　龍珠館　百五十一頁
○小右衛門火　仝　百五十一頁
○天照皇太神を呉の太伯といふ辨　乾齋　百五十二頁
○彌猴與巨蛇鬪　客篇　百五十六頁
○ほりこてふ　京青李庵　百五十七頁
○奇遇　仝　百五十八頁
○根分の後の母子草　琴嶺舍　百六十二頁
○第九集（乙酉秋九月朔於乾齋集會各披講了）　著作堂
○蓮葉虛空より翻るの異　乾齋　百七十頁
○藪入香の物の俗諺　仝　百七十二頁
○慶雲　彗星　好問堂　百七十三頁
○鐘馗　輪池堂　百七十六頁
○遊女高尾　仝　百七十八頁
○奇夢　海棠庵　百八十頁
○鼠の怪異　文寶堂　百八十一頁
○佛像腹籠の古書　仝　百八十三頁

○窮鬼　琴嶺舍　百八十四頁
○雙生合體　著作堂　百九十頁
○一足の雞　仝　百九十一頁
○雙生會體追記　文寶堂　百九十二頁
○ひなるべし作者自序の辨　客篇　青李庵　百九十四頁
○第十集（乙酉冬十月朔於輪池堂集會各披講了）
○庫法門　好問堂　百九十五頁
○立石村の立石　海棠庵　二百二頁
○堀地得城壘（石地藏圖附）　仝　二百三頁
○人の天降りしといふ話　文寶堂　二百六頁
○素磬花　輪池堂　二百八頁
○濃州の仙女　仝　二百九頁
○鶴の稻（附供大人米考）　仝　二百十頁
○阿比乃麻村の痙錢　琴嶺舍　二百十一頁
○中川喜雲京童の序の辨　客篇　青李庵　二百十五頁
○謠曲中の小釋　仝　二百十六頁
○真葛の老女　著作堂　二百十六頁

○第十一集（乙酉冬十月廿三日於海堂庵集會席上各披講了）
○孫七天竺物語抄　好問堂　二百卅七頁
○蝦夷靈龜　海棠庵　二百五十頁
　蝦夷靈龜考異　著作堂　二百五十七頁
○佐久山自然石　海棠庵　二百五十八頁
○狐の祐天　文寶堂　二百六十頁
○白猿賊をなす事　仝　二百六十一頁
○越後烈女　輪池堂　二百六十三頁
○高須射猫　仝　二百六十五頁
○明善堂討論記　乾齋　二百六十九頁
○其角が發句を辨ず　馥園　二百七十頁
○虛舟の蠻女　琴嶺舍　二百七十四頁
○品河の巨女　仝　二百七十六頁
○天台靈空是湛靈空　客篇　青李庵　二百七十六頁

兎園小說第十一集目錄終

兎園小說

瀧澤馬琴等編

○家相談

近年我邦も亦家相の學行はれて。病難を救ひ。火難を免かれ。其術に心服する者少からず。衆人の歸する所。其功驗なきにしも非ず。余是をある人に聞けるに。曰。嘗て松永宗因樂研堀にて。家宅を買ひ求めて移らんとす。其日濱町會田七郎宅にて。金蘭に邂逅して。家相の談に及び。其言に服し。其判斷を請ふ。金蘭一見して。家に死骨有り。此に住む者必ず病死之由申す。宗因畏慎て其家に移らず。直に人に讓りけり。女隱居の其家を買ひて移りたる者。一月餘にして病死せり。其後醫生有り。其家を買ひて此に住みけり。程なく是も亦病死せり。金蘭又久松町河岸へ行きて。其長屋の病氣長屋之由を申し。聞直すべき由申す。然處其言にも從はずして。後果して如之

遠州屋久三郎家内死絶して奉公人を養子とす。今の久三郎是也。妻勞咳にて。老母中風に相成腰拔なり。手代兩人有り。一人は病死し。一人は脚氣病に苦しむ

大黒屋彌右衛門老母手足之指拘屈して不伸。二十年来腰拔なり。俗呼達摩婆々と云ふ。五年来之内妻二人不幸す

大黒屋次郎右衛門祖父二三年前病死。其孫二人偏疾なり。其父亦春むしなり

松坂屋某。其妻向島にて變死し。手代一人かたり刑囚と爲りて死にけり。其餘略之

余亦米山の遺書を受け。數々其術を試みたるに。數々ある事あり。近き頃。池之端仲町へ行き。南側書物屋某の家相を見。其家の子なきを辨じ。日々試に家並子なきを相す。書物家某曰く。誠に御教の如く俗呼此長屋を子なし長屋と申傳由是亦奇中奇。暫く論じて後の君子を待つといふ

或云。小野小町の事。牛馬問に委しく辨じ置けり。却て小町を一人と思ふより紛れたる說多し。實方朝臣陸奥へ下向之時。髑髏の眼穴より薄の生ひ出でゝ。秋風の吹くにつきてもあなめ〳〵小野といいとじをゝき生ひけりと有りし歌の。小町は小野の正澄の娘の小野の小町なり。康秀の三河掾と成りて下向の時。詫びぬれば身一代浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふと詠みしは高雄國分の娘の小町なり。思ひつゝぬれば人の見えつらん夢としりせばさめざらましをの歌。又出羽郡司小野良實が娘の小野の小町なり。高野大師の逢ひ給ふ小町は。常陸國玉造義景が娘の小町なり。かく一人ならざる異說ある而已中にも良實が娘の小町は美人にて。和歌も勝れたれば。ひとり名高く。凡て一人の樣。傳へ來るのみ。かゝる類。萬事に多し。暫く記して疑を存し。亦以て博雅君子に問ふ

中井乾齋誌

與州吉野の邊にまちかひ草とて草有り。深き山谷に生じて。誤りて食べれば。當時死を免るとも。一年の内必ず死す。此草本草等にも不見。其味甘して根はかなのよの字に似て和草なり。根も實も甚似たり。□□□□なり。葉の形定まらず。種々にして四角も有り。丸きも有り。尖りたるもあり。三角もあり。細き。廣き花々。今年は殊の外美事に咲くといへども。來春はみにくし。年々歳々不定草なり。可謂異性草

乙酉五月朔

○定吉稲荷

ことし文政八四月四日。神田明神境内隨身門の外。東の方に小祠を建て。定吉稲荷大明神と題せし幟あまたゝてたり。其緣起をとへば。いと不思議なる事ども也。神主柴崎の家事を講中の者より合へて經濟せんとて。境内の伊勢嘉といふ茶屋に集まる事有りしに。永富町釘屋清左衛門方に會せり。其つれ來りし年季もの。定吉年十四歳なるに。供待の内に居

眠りしける間に。狐付きて座敷に出で。主人に向ひ。清左衛門とよびかく。こは何ことぞといへば。これは明神の門を守る野狐なり。其方共に云ひきかせべき事ありて。定吉につきたり。その故は。其方共神主の家事を親切に。世話いたす段。奇特なり。然るに。その筋の還合某には不正なるものなれば。事行ふまじ。某は正しきものなれば。向後とその人に應對をべし。此事とくより云ひきかさんとおもひしかども。折を得ず。今日に至れり。講中にとりても清左衛門は。わけて正直なるゆゑ。かく告ぐる所なりといふ。事てて〻。家につれ歸りても。狐放れぞ。さま〳〵の事をいひける。就中。尤奇なりしは。野島屋敷の某は十年をかりさきつころ。水に溺れし事あり。いと危かりしが。明神の仰にて。我行きて助けたり。その者不動尊をも信ぜるにより。不動の加護にて助かりしと覺えをるなり。さおぼえ居たりとて。御咎もなし。神さまはおほやうなるものなりといひしとぞ。この水に溺れしことは當人深く秘して。家族にも語らざりし事なり。この類のことあまた有りし故。人信ぜることたぐひなし。さて明神の境内に祠を建てくれよ。さあれば是れ位を得るなりと云ふ。さらば門内に建つべしといへば。いな我は外を守る故なり。門外に建てくれよといふによりて。今の地を占めしといへり。七日の夜。これはこよひ歸るべしと云ふ。その比。稻

葉丹後守醫者河原林春塘來りて。己が思ひたつ事有り。此事心の如く成就すべしや。問ひ決せんといふ。諸人尊敬する事。神佛のごとし。然るに春塘は禽獸のあひしらひゆゑ。それをあかぬ事に思ひしにや。答にも及ばぜ。春塘云。其方は神通を得たりときけば。己が心中のことといはずともあるべし。さつして成否をことごとれ。いないふまじ。その方は我身のことにもあらぬ人のことに勞する馬鹿者なりといふ。曰く。人の道に義といふこと有り。そ人の爲に身をわをるゝ事も有り。しかるにその一の否をことごとることも得せざるはさをがは禽獸なりとなじる。狐いふ。わがしる人にもあらぜ。いかでか教ふる事の有るべき。塘曰。いかさま犬や猫にてしりたるもあれど。狐には見しりたるもなし。たとひ神通を得たりとも。祠をたつるも人にたのまねばならぜ。正一位をさづかればとても。人がねがはねば給はらぜ。されば人ほど尊きものはなきに。いかて人のとふことをひとことだにもこたへざるやなど。あらかふほどに。講中きのとくに思ひて。てやかへり給へ。こよひは稻荷もかへらせ給ふ約あり。夜の更にふけゆくはとて。稻荷にもさま〳〵わぶれば。さらば春塘は木村定次郎が方へ行くべし。跡より告やるべしといふにぞ。定次郎が家に至りてまつに。時うつれども何の音信もなし。定次郎に問ひてたべといふ。下男を遣して問

ふる。定次郎自身来りて。願もせよ。下男を遣すこと無禮なりとて。ます〳〵いかる。講中とかくこしらへつゝ。やう〳〵なだめて。さらば此書を春塘につかはせとて。判紙をさきて五言四句を書き。是を見ば自ら會得をべしと云ふ

盤中黒白子　一著要先機
天龍降井澤　洗出舊根碁

をなじき講中とりて傳へたり。さらば歸るなりといへば。定吉は臥して得もしらぬ寢たり。翌日夕七時頃出でゝ例のごとくみせに出釣を直しをるを見れば。何とやらん疲れたる體なり。いかゞせしかとゝへば。かゝることもなしとこたふ。ひもじくはあらぬやといへば。ひもじくさふらふといふ。さらばとて食事させれば。殊の外にねふたしといふ。こゝに心のまゝにねよとてねさせしに。夜中おき出でゝ。我は一たん歸りたれども。又来りたり。野島屋敷の某をよべといふ。むかへきたれば。さきに言ひもらしゝ事有りとて。何ことならんさゝやきて。のち又かへるなりといひけるにぞ。定吉は常の樣になりぬ。このこと十五日の夜。春塘にまたしく聞きて。その書をも摸せしなり。さらにうきたる事にあらぬ。かの詩は。觀音籤の第四十四籤なり

美成曰。予が抱屋敷小舩町に在り。その所の家守勘七来りていひけらく。町内にて崇奉する天王の寶物に。去年戸帳を納めしに。日あらぬをしてぬをまれたりとて告げ来る。ふたゝび調はをべしなといひあへるほどに。失せぬる戸帳出でたりといふ。いかゞしたるさまにかとゝへば。紛失せし後。深夜に本社のほとりを見めくりければ。隨身門の内に白き物をまとひて。臥し居る人有り。あやしさに立ちよりたれば。その人おどろきて逃げ出でたり。かのおろさものは戸帳をうらがへして在りしなり。そのかたはらにかな網もあり。是もともにぬすみしものなりとこたへき。さてこの比。定吉につきし狐の。これは明神の社地に来りて。七十年をへたり。子八疋有り。もとは末廣稲荷の社の下に住みけり。正一位になられしより。そこを出でゝ小舩町の天王のみこし藏の下にうつりたり。されば小の戸帳。かなあみもわがてだてにて。もどせしなりといふ。又曰。天王のみこしにおほひをしてうをくらさ内に置く。よからぬことなり。みこしは人の乘物のゝごとし。常に鎮座有るべきやうなし。それゆゑ常にこゝにておはせぬ。されど町々をゝたらせ給ふ時は。御出あるなり。よりて。常に鎮座ある樣に社を建てよかし。又曰。御膳講といひて。年中とり集むる物

に。社家の徳分のみ。さらに本社のためにならねば。今より後。止めよといふにより。この月より廢せしとぞ。或人十四日に。かの稲荷に詣でければ。あまたたてならべしのぼり數もくなくなりぬ。こはいかにとかたへの人にとひければ。社家のいとく。きのふ或人来りて。白刃にてきりさきたり。富の願をかけしにあたらざりければなり。恨をそらをなりと言ひける。さての夜。俄に心ちそこなひてくるしむことたとへんかたなし。これいなりの罰ならん。ゐびして給へとて今日たのみ来りたりとぞ

乙酉五朔

輪池

○定吉稲荷尾

神田明神の神に。柴崎大隅寺社奉行松平伯耆守へ呼び出だされ（乙酉五月三日の事とぞ）新規勧請の稲荷祠。すみやかにこぼち候へと申し渡されたり。柴崎大隅かしこまり申して。さてかのいなりをじめに。町家にて家の内に祭りおきしを。俗家にては崇敬もとぶかざれば。境内に移したき志願にまかせ。建てし所の祠なれば。新規勧請被申にもあらぜ。されば許容を仰く所なりとこふ。いなその陳狀うけがたし。をみやかにこぼつべしとなり。大隅又申さく。私の建立にあらぜ。願主有之。建てし所なれば。せめて境内に元よりあがめつるいなりにあ

てゝせまつらんとにいかゞ候にんとこふ。それも許されがたし。大社の神主に似合にざる申事とて。いよ〳〵ゑからせられしうへに。今日の内に毀つべし。あをの四時にに。檢使をつかにをと有りければ。五月四日に。俄にこぼちけるとぞ。その日黄昏に。その跡を見しに。社の所を土をほりて。こぼちし材を燒きをてけるさまなり

○稲荷正一位

定吉稲荷正一位を願ひ吉田家の許狀。五月中にに下るべしといへり。それにつきて思ひ出でしと有り。京師梅宮神主橘本肥後守橘經亮曰。いなりに正一位といふ事。更に跡なき事なり。櫻町院御守。吉田家へ御尋ね有りけるに。稲荷山にだに正一位授け給ひし事にあらず。いかなればその他の小社に。正一位をゆるすやと。この御こたへにつまりて。其ゆゑよし俄にゑれがたし。搜索の間。日延をねがふ所なりと申して。今に御こたへ申さぜといへり。安永。天明の頃にて有りし。吉田家參向ありて。傳奏屋敷にあられし時。傳奏留守居羽田氏の人。夜毎に昵近せしが。ある時問申しゝに。稲荷の正一位本社になき事を人の言にまかせて。こゝら授け給ふに。いかなるとにやと申しゝかば。左やうのことをとにれていに。迷惑せしむる事なり。何事もてゝのたねじやによつて。平田大角曰。稲荷山に正一位

を授けさせ給ふ事なしといふに。こゝろえぬとなり。その故に。いまし〳〵三位を授け給ひし後。日本國中の神社おしなべて。一階を昇せ給ひし事。宇多天皇御時より。をべて四ケ度有り。されば とくゝ正一位ゝておにすとなり。さるゆゑをばいかで御答申されざりけん

文政八年五月四日。定吉稲荷の禿倉を破却せらる。此日。寺社奉行より役人来て。云々ゝにからにせしといふ。つまびらかなる事に。猶よく聞きたらん日ゝまるすべし。但しこの事。前條ゝ追書せられたれど。なほ具にらぢ。風聞にさま〳〵なれども。みなたしかならぬ事のみゝこそ

輪池

○神童石河爲藏詠歌の事

著作堂識

遠江國佐野郡山口莊伊達方村郷士。石河惣太夫忰爲藏寛政三亥年の出生ゝて。六歳ゝなりける。とらの九月比。同所掛川連雀町温飽屋金八方へ。父惣太夫同道して行きける時。あるじ金八かねて聞き及びたる事故。爲藏ゝ歌を望みけるゝ。折しも庭の菊さかりなりければ「秋ふかき庭のまがきゝ色そへて咲きそむるゝらん露の白菊」かく詠じけるを。遠近の人々聞き傳へ。六才の童子の詠歌なりとて。扇などゝまるしもてあそびける。掛川城内へきこえて。其冬父惣太夫ゝ。忰爲藏召し連れ罷り出つべしと仰せ下されければ。即刻兩人共罷り出でける時。御城代太田外記殿。河野十郎左衛門殿。その外家老衆列座ゝて。子細御聞糺しの後。題を出だされける。其題

霜夜月

やまのゐの楢あらゐゝおく霜の影もさえゆく冬の夜の月

浦千鳥

ゆきかへりしゐ島つれて友ちとり聲も高けれをまのうら波

野雪

空さむみふりまさるらんしら雪のつもりうつれる冬の夕くれ

友千鳥

風さそふ音ぞさみしき夕くれゝ友よびつれて千鳥なくなり

右の四首を即詠しければ。則書寫して。太田備中守資愛殿へ差し上げたるよし。其比家老衆より。戀の歌を望み申されければ。戀の歌ゐよめ申さぢと。爲藏申し上げたるよし。その夜父ゝ負ゐれて歸るさ。月の出づるを見て

玉ぼこの道のひかりをさしそへて霜にさえゆく冬の夜の月

右田舎にいめづらしく存候間。寫御目にかけ申候と。遠州掛川宿。匂坂屋彦兵衛といふ者よりの文通にいひこしたるをこゝにしるせ

書名をわすれたり。何やらの中に。南殿の庭中に夜のまにまひ草の生ひ出でければ。公卿達いつれも詠歌有るべしとありし時。紫式部六歳の時

けふむかりまけてもくれよすまひ草とる手もしらぬむつ子なりけり

かく詠じければ。速に消滅したりとなん

これに雲の上にそたちて。後にかの物語をもつくれる程の才女といひ。ことに和歌などに常に耳ざさみがちなれば。かくもあらん。爲藏に鄙に生れて。誰教ふる者もあるまじく。實に天才奇童といふべし

著作堂云。この爲藏が事に。予もてやく聞きしなり。この兒人となりては石川方救と名のりて。和學をせるものながら。其幼かりし時に比ぶれば。才のやうやく劣りやしけん。其よめる歌にさらなり。その名も都下にも聞えぞなりぬ。清水濱臣が旅の打聞にいはく。小時了々大未必佳といひおきけんやふに。をさなき程のかしこさに。おとなになりてさばかりならぬものにて。大かた幼なき程のかしこさに。病症のまさなりと。あるてかせのいはれしにさる事なるべし。おのれがしれる人にも荻野某に。八つになりけるとし。つごもりの夜に。月のかたちの空に見えけるを。人々あやしがりしに。是に水氣なりといひしが。げに雨となりしより。人々奇童とたゝへて。おひさき世のもくれ人となりなましとかたりあひしも。今猶かいなでの物しりなり。こたひ東路をのぼるとて。遠江國新坂のすくつぐき伊達方村なる石川方救にてじめてたいめんしたるに。是にいつゝのよにひより。冷泉中納言爲泰卿の御弟子となりて歌よむとて。東路の奇童といへりしも。物がたりしてこゝろむれば。粟田土滿にまなび。今に夏目甕滿にとひきゝて。なべての古書まなびする人なり云々といへり。これらみな經驗の言ぞかし。又奇童もあまりにほめ過ぐれば。後にかたてらいたき事多かり。この條にあるされし紫式部に。小式部内侍を覺えひがめたるにはあらぬか。小式部のいとてやくより。奇才ありしよしに。ふるくものにも見えたり。それとまれかくまれ。をまひ草の歌などに。當時の歌のくちさきをよくもしらぬものゝ。つくりまうけし小說なるべし

○茸屋町なる歌舞伎座の梁の折れし事

文化十三丙子年五月三日。茸屋町桐長桐座梁折候ゝ付。御役所言上帳之内書抜

一去る酉年。茸屋町類焼之砌。元羽左衛門芝居普請之節。東海道程ヶ谷宿裏通り古町と申所日蓮宗寺院（馬馬云。星川村法性寺といふ）杉山大明神と申社有之際ゝて。松伐り出だし芝居梁ゝ致置候處。神木のよし。右たゝり故不繁昌之趣風説ゝ付。町家別ゝ百文宛取集。當時桐長芝居より下谷龍泉寺地中本浄院へ祈禱を頼。出家五六人舞臺ゝて祈禱致かゝり候處。梁表方三側内ゝ有之中が折候。怪我者無之候

同日七時過頃。新吉原町京町壹丁目より出火。遊女屋共不殘焼失。龍泉寺町まで焼け抜けて鎮まる。此龍泉寺ゝ右ふきや町芝居祈禱ゝ来たりし龍泉寺なり。その龍泉寺町まで焼け出でゝ。火のとづまりしも奇といふべし

この日所々ゝさま〳〵の珍事あり

永代橋邊ゝて。伊豆船帆柱折れし事

赤坂ゝて。鷲のもの登天せしといふ事

兩國廣小路のかるゝざ綱より落ちて怪我ありし事

有馬殿の火の見櫓の屋根紛失の事

新し橋ゝて。車力釜を落とし釜數四つ割れし事

四谷ゝて。堀りぬき井戸を堀りかゝり。錐のぬけざりし事

この外ゝも種々聞きたれど忘れたりけるゝ。あやしき惡日なるべし

芝居の梁をれより三四年前。（文化百年比）をるが臺。伊藤金之丞殿（御両番）のやしきゝ。十四五歳の比よりつとめ居りしこし元。（名ゝきゝ）俄ゝ發熱し狂亂狐のつきたるごとくゝて。口むしりける中ゝ。我住居した宮を損じさせ。跡ゝて修覆せんと偽りて。今ゝ其沙汰もなく。打ち捨て置きたる事。甚腹たゝしく。芝居繁昌を守ることゝ扨おき。このうらみゝ不繁昌させ。永く芝居ゝ祟るべしといひつゝ狂ひまゝりける故。やしきゝて請人方へ引き渡し。宿ゝて能く療治をべしとて遣しける。五日目ゝ此女ゝ身まがりしとぞ

傳ゝ云。此女の父母ともゝてやうなくなりけるゆゑ。祖父方へ引き取りて。親類方へ頼み。右伊藤氏へ奉公ゝ出だしけるよし。此祖父といふ者ゝ。ふきや町羽左衛門の座がゝりの者ゝて。その三四年以前。程ヶ谷の法性寺ゝて。芝居の梁の木を買ひ出だしゝゆきたるものなり。當時宮居大破ゝ及びたれば。住僧修覆の事を頼みけ

る故。芝居戯りの者。茶や一同にて。一日に一錢づゝの日掛をして。其積金を以て。宮破損の修復致をべし。貴僧にハ猶も芝居繁昌の祈禱を願み入ると約諾いたしたるまゝにて。其後修復の事にも及ばず。打ち捨て置きたるよし。さるゆゑに此度神のたゝりにて。梁もをれたることなるべし。三四年以前女の死したるころハ。親類がたへ任せ置きたる故。さのみ氣もつくまじけれど。今かゝる變事の出来たるにより。さハおもひあたるべしと。かの屋敷にても語られしと。牧村氏御両番五百石隱居一甫君のかたり給ひしなり

此梁の落ちたる後。取りかへたる梁ハ。出所上州新田郡岩松村鎮守八幡宮の境内にありし松を伐り出だしたり。此代金拾六兩。岩松村より堀口村といふ川岸迄八町の間。此入用金廿五兩なり。子五月五日の朝。右之川岸を出だして同七月にふき屋町へ引き付けたりといへり。此時の金主ハ。上州太田宿ふぢや新五兵衛といふ者なり

此上州の一條ハ。太田宿佐衛門といふ人よりの文通をもるし出だを

文政乙酉中夏朔　　文寶堂しるを

○町火消人足和睦の話

いぬる文政元年の秋八月。町火消人足。を組。ち組喧嘩の和談のありさまを書けるものを見しに。いとおどろかなる事にて。いまし戰國の講和もかくやありけんと。自笑してあるを事左の如し

文政元寅八月廿二日。向兩國三河屋喜右衛門貸座敷において

一膳部相濟候後。座敷を掃除

壹番　進物の札を張り
貳番　總中座に着き
三番　座敷の禊をとづし
四番　座敷の真中に花莚筵を敷き
五番　慰斗三方を持出づ
六番　瓶子を持出づ
七番　三方肴摘を持出づ
八番　三方土器を持出づ

九番　銚子を持出づ

十番　平次郎 清吉　己之助　座に着く

十一番　長藏 長次郎　己之助上座に進み。和睦之口上を述ぶる。その節一統一禮畢りて。己之助元の座に直る

十二番　慰斗三方上座に進み

十三番　瓶子喰摘土器上座に進み

十四番　己之助上座に進み。一禮有之。懷中より書付を出だし。を組の頭取平次郎。清吉方へ持ち出づる

十五番　の藤兵衛様と呼び出だし座に着く。一禮有之。己之助座に直る

十六番　三方役の者。土器を持ち出だし。を組の頭取長次郎。長藏方へ持ち出づる。

三方役之者土器を持ち出だし。ち組の頭取長次郎。長藏方へ持ち出づる。

何れも一所なり

銚子を持ち出だし。を組の平次郎方へ參り。同人一獻給。ち組の纏持藤兵

衛へ持ち出づる。同人一獻給候節。肴役の者。喰摘を持ち出で肴を遣す

十七番　又ち組の長次郎給候盃ハ。を組の纏持千松へ遣す。同人給候節。肴役の者

喰摘を持ち出だし。肴を遣す。三獻給候て。銚子土器喰摘。何れも元の座に

直る。夫より藤兵衛。千松元の座へ直る

十八番　己之助上座に出で。懷中より書付を出だし。を組の吉五郎様。ち組の幸次

様と呼び出だし。兩人圖の如く座に着き。一禮畢りて。己之助元の座に

直る

三方役之者。土器を持ち出だし。を組の平次方へ持ち參る。同人一獻給候

盃ハ。ち組の幸次方へ遣す。同人一獻給候節。肴役之者喰摘を持ち出だし。

肴を遣す

十九番　又ち組の長次郎給候盃ハ。を組の吉五郎へ遣す。同人一獻給候節。肴役之

者喰摘を持ち出だし。肴を遣す。三獻給候て。銚子土器喰摘何れも元の座

に直る。夫より兩人一禮畢りて元座に着く

己之助上座に罷出で。懷中より書付を出だし。を組の榮五郎様。ち組の

長藏様と呼び出だし。兩人圖の如く座に着き。一禮畢りて己之助元座に

直る

二十番　三方役之者。土器を持ち出だし。を組の平次郎方へ持ち參る。同人一獻給候盃に。ち組の長藏方へ遣を。同人一獻給候節。肴役之者喰摘を持ち出だし肴遣を

廿一番　又ち組の長次郎一獻給候盃に。を組の榮五郎へ遣を。同人一獻給候節。喰摘致候者喰摘を持ち出だし。肴を遣を。右三獻相濟とて。銚子土器喰摘引き取り。夫より兩人一禮畢りて。元座ゝ直る

已之助上座ゝ進み。懷中より書付を出だし。口上ゝて。御銘々御盃事仕候箸ゝ御座候得共。御大勢之事故。時刻も移り候間。餘にいかゞ可仕哉と挨拶ゝ及候處。一統思召ゝ隨ひ候と返答ゝ及び。夫より一禮畢りて。已之助元座ゝ直り。長次郎。平次郎と申談候て。又候上座ゝ進み。何れも様吉日ゝ付。御和談も盃も首尾能相濟候ゝ付。御總中様へ御手打を願候と及挨拶候所。一統承知ゝて。一禮致し。夫より已之助元座ゝ直り候而。三々九之手打目出度相濟申候

廿二番　已之助上座ゝ罷出。何れも様。遠路之所御來駕被成下。御苦勞千萬ゝ奉存候。依之御座を和き。ゆる〳〵御酒宴可被下と及挨拶。已之助元座ゝ直る

廿三番　熨斗三方瓶子土器。銚子喰摘兩方一所ゝ引き取る

廿四番　花莞筵を引き取り。を組。ち組と書候張札を取り。夫より已之助。清吉。平次郎。長次郎。長藏何れも下座へ引き取り候

廿五番　是より又候座敷を掃除致し。肴。銚子。盃出でゝ。酒宴初まる。此節已之助。清吉。長藏。長次郎。平次郎其外仲人ゝ罷出候人々の内より。四五人も座敷へ罷出。何れも様今日ゝ吉日ゝ付。御和談手打も無滯相濟。依之ゆる〳〵御酒宴可被下候と及挨拶候而。何れも下座敷へ引取候

此節阿部川町文吉といふ者。和談手打ゝも首尾能相濟候ゝ付。私共拾人計南御番所へ罷出候間。此跡ゝ酒宴計ゝて。別ゝ相替儀無之ゝ付。拙者共歸り可申旨及挨拶候

一其節。を組世話人與三郎。十番組頭取萬五郎。仙之助。清五郎。八番組頭取孫市。九番組頭取吉五郎。右六人之者咄申候ゝ。此度之和談ゝ。近年覺無之大場所ゝて。江戸中ゝもれ候所ゝ。深川八幡前。芝。麻布堺ぢかり相殘り。其外江戸中千住。品川。渋井。巣鴨邊之組合ゝ

て。誠に心遣成る和談に御座候。其譯は。今日三獻盃之内に。盃之取樣。肴の請樣。亦は肴役。銚子役之者。酌み取樣。肴之摘樣不限何事。前後有之歟。又は世話人。中人。已之助抔之口上に少しも前後間違等有之候節は。其場所にて和睦破談に相成大變之基故。銘々迄三獻之盃事相濟不申内者。誠にひや汗を流し。心配此上もなき事に御坐候。先年も和談之節。盃取遣りに少々麁略有之に付。其和談之場にて。直樣破談喧嘩に相成事も有之。其節は組合も不足之事故。格別之事も無之候へ共。此度は和談近年覺無之大場所にて。誠に仲人初頭取之銘々迄。心配之段申盡しがたく候。三獻盃之内は。敵味方列坐の面々目を皿の如く致し。麁略間違等計氣を付居候事に候。誠に恐しき事に御坐候。今日の人數も。帳場に祝儀を差出し。帳面へ相記候人數。千六百四十八人程有之。然共兩天に付。遠方之者は。禮儀一通りにて。仲間へ相頼罷歸候者も五六百人有之。手打相濟候迄。相詰居候者は。二階座敷に六百人餘。下座敷に貳百人餘。與の間に老人共七八十人詰居候。都合九百人餘之人數に御座候。誠に近年不承和談に御座候。駕も四五十挺も三河屋之前に有之。右之趣具に十番組頭取萬五郎に。六人之者となし御座候

一先達右喧嘩の節。手負之者有之に付。根津音羽兩所之遊所より。金拾三兩弁堂前より金七兩貳分。あたけより金五兩。右見舞として進上致度趣。内々聞合申入候に付。此方頭取世話人共より存つき之處。至極尤之段忝趣を申遣候之處。早速樽肴に金子差添。世話人方迄致持參候に付。受取申候。都て火消組之内に。喧嘩に不限。混雜之事有之候節は。江戸中之遊所より見舞として。樽肴金子等差越事。今日之和談とても右同樣。此方より頭取世話人方へ内々申入。江戸中之遊所より樽肴金子等。祝儀差越候へ共。是等之事は。今日張札に不相成候事に候。右之趣八番組頭取孫市。九番同吉五郎。十番組同仙之助。阿部川町同與三郎。右四人のとなしに御座候

一今日和談に打寄候年寄。仲人。世話人。頭取共之衣裳は。八丈之せいひつ縞などの袷。或は單物。又は龍紋袷。羽織は紹の紋付など。なゝこ龍紋抔にて。帶は縞とかた。薩摩琥珀。厚板類に御座候。纏持は紫縮緬。黄ちりめんの單物。せなかに纏と云ふ字をぬひ付け。帶は何れも天鵞絨に御座候。其外紫ちりめん。黄縮緬。びろうどの帶を致候もの貳三百人も相見え候。其外。所持之させる烟草粉入。紙入等は。何れも金五六兩共相見え候品計に御座候。尤側に居候を見請候人の咄に。阿部川町與三郎。り組の長治など所持之多葉粉入は。くさり計にても五六兩も可致品と相見え申候

一十番組の頭取萬五郎。仙之助。清五郎。八番組頭取孫市。九番組頭取吉五郎。右いづれもとなし候ハ。右喧嘩之相手方。ち組の怪我人廿人。内二人ハ即死ヨも可相成と申もの纏持藤兵衛。幸次。を組の怪我人十三人。内纏持卯之助。幸吉と申。右幸吉ち組の藤兵衛。快方無之死去致候節者不得已事。此方纏持幸吉解死人ヨ可相成段。幸吉是を申居候。然處怪我ハ少々疵も宜候得共。餘病之發り候處。先役之卯之助十人を組總中へ願出候ハ。此度之解死人幸吉儀ハ。當り前之處ヨ御座候得共。同人義ハ御存知之通り若年者之事。殊ヨ此節餘病差發り候事故。只今解死人之取沙汰格別之心勞致させ候も。私先役ヨて外組へ對し相濟不申候間。何分解死人ヨハ私ヨ相究り候樣ヨと。卯之助達而申入候得共。解死人之事故容易ならぎ。組中一統卯之助へ申聞候ハ。願之趣尤ヨ候得共。此度之義ハ。幸吉解死人と相極り候間。此段左樣可相心得候と申候處。又候卯之助申出候者。被仰候處御尤ヨハ候得共。幸吉儀も餘病も有之。萬一病死等仕候節ハ。跡ヨて解死人之取沙汰江戸中へ對し。外聞不宜候。名前ヨも相拘り候間。何分解死人ハ拙者ヨ御極め被下候樣。達て之願ヨ付。又候一統仲間申談卯之助心底ヨ任せ。ち組之方へ卯之助解死人之趣相屆置候。然處。手負人も快方ヨ相成。今日和談之場所へ相詰合候得共。座敷之式へ列座ヨ出し候てハ。盃事何か手事も相懸候間。其内ヨハ麁略間違等も有之節ハ。又候破談喧嘩之元と相成候故。尤之場所へ取出だし不申候。總代として圖の如く。を組より藤五郎。ち組より長藏兩人差出だし。手打相濟候。尤壹番盃ヨ相出だし。ち組の纏持藤兵衛と申者ハ。喧嘩の節ヨ。を組之纏持幸吉ヨ為口を左之鬢先へ刺し倒され。貳間程引かれし由誠ヨ疵も大造ヨて。既ヨ即死ヨ可成程之事ヨ候處。快方いたし。今日手打ヨ相成り。誠ヨ安心致し候。右萬五郎。千之助。清五郎。與三郎咄ヨ御座候。段々喧嘩の樣子手負之者。左之咄承り候へば。身の毛も動き候樣なるこゝち恐ろしき事ヨ御座候

一向兩國三河屋喜右衛門二階座敷和談之場所。長さ十二間。幅五間。片々壹間之長通り有之。八疊敷十二間ヨ仕切り。中仕切有之。何れも襖なり

一八月二十二日朝五時より。段々三河屋へ打寄。手打相濟み。刻限者夕七時頃ヨ御座候

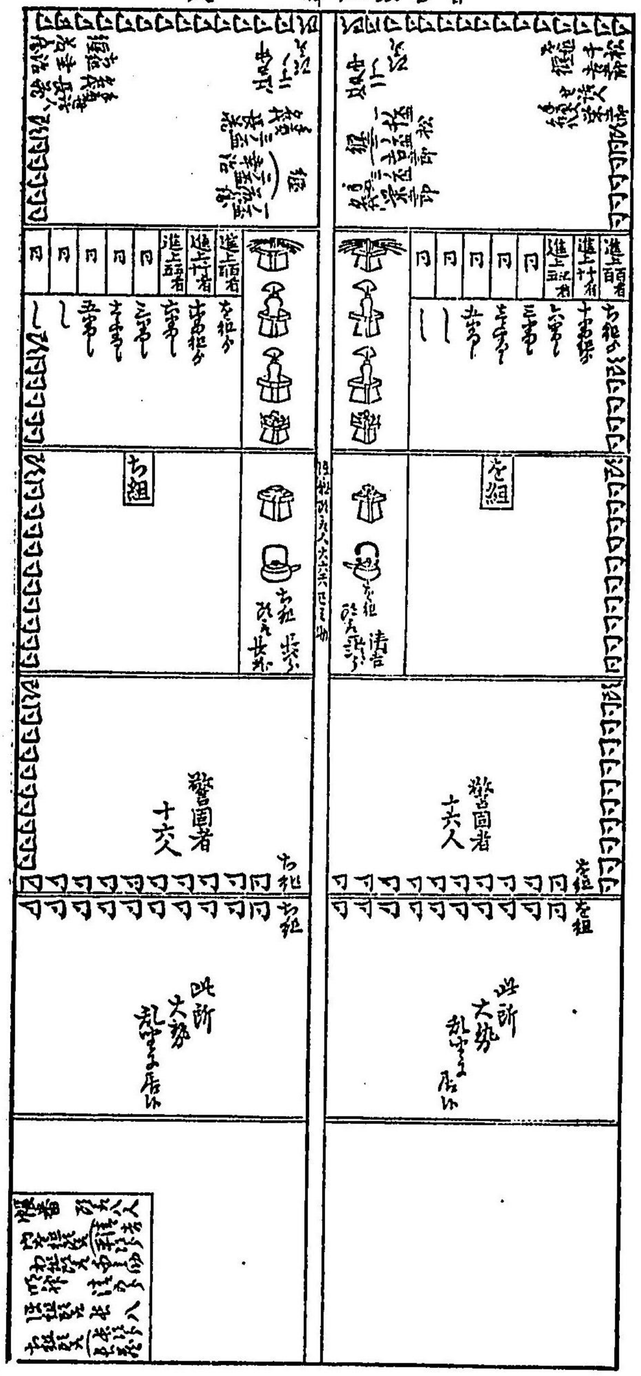
右座敷繪圖面左の如し

前條ヨ載せる所の。を組の纏持卯之助が幸吉とかいふものヨ代りて。解死人ヨならんと請ひし事。匹夫の勇ヨハ似たれども。取るべきところなきヨあらぎ。難ヨのぞみて死を惜まざる勇氣ハ。をさ〳〵武夫といふとも及びざるもの多かり。もしよくこの志をもて。義

を求め。道を聽き。君父の大事ゝ出でしめば。名を竹帛ゝ書きゝ足るべし。わづかの爭鬪ゝ性命をあやまらんとを。豈をしからぬや

文政乙酉五月朔

海棠庵再識



文政元年八月昔
向両国ゝ河ゝ
客ゝ伐ゝ
ゝとを紙ゝ紙ゝ
喧嘩和談帳
上の図
會合人数
千六百四十八人

二十六

○佐倉の浮田　安永以来のてやり風

文化五年戊辰の秋八月。下總佐倉の洪水ゝ。風聞こゝゝも聞えしころ。その月十三日の事なりき。予ゝたま〳〵著述のつかれを保養せんとて。ひとりそぞろゝ立ち出でゝあちこちとなく逍遥しつゝ。真弧が淵と呼びなせるおん軽端（ホリハタ）の出茶屋なる。牀几ゝ尻をうちかけて。おむしやをらひたりし折。下總の旅人等ゝ（そのもの同行三人あり。その内ゝ老人あり。その名を問えば。與五左衛門といえり）かり初ゝものいひれゝけり。よりてかの水の虚實をとひしゝ。その人答へて聞かせ給ふが如く。こだみ佐倉の事ゝ。近来稀なる大水なり。つや〳〵そらごとゝゝ候ゝを。おかるゝかの城下なる田地どもの。或ゝ十間ばかり。或ゝ二十間四方づゝゝ皆ながれて。水の上ゝ浮みたり。それを又並木の松の大きなる。伐らば白ゝもをつべき幹ゝ。藁の縄もて繋き置きたり。何もの〻〻ゝざといふことをおらを。天明（ヨ）けて人みなこれを見て。驚きあやしまぬものなしとなん聞きて候ひしとかたりき。その時。同行の老人與五右衛門とかいふもの〻〻云ふ。田地の水ゝ浮きたるとしを。つら〳〵とおもひみるゝ。むかし佐倉の城地を築かれしとき。今の城下のほとりゝゝ。沼溝の多かりしを。竹木芥塵の類をのみ夥しく投げ入れて。やうやくゝうづめつゝ。扨田地ゝゝなしゝよし。故老のいひもて傳へたり。大凡。洪水ゝ降る雨よ

りも土中より涌き出づる水の多きものなり。されば下樋より涌き登る水の勢もて。田地のきれて浮きたるを流さじとおぞしめしゝ神々の神ゐざまて。夜の中ゐ並水の松ゐ繫き留めさせたまひしならん。その浮田の體たらく。畔ゐ竹のあげりたる。杉榛の樹の並びたちたる。そがまゝゐ浮きたるを尋常なる藁索もて。あちこちゐ繫がれし。その田地い少しも動かで。水の上ゐ泓々たり。やつがれらい他領の民まて。佐倉より七里むかり上なる在のものゐもべれど。きのふ目前ゐさる不思議を見て。かくいいふなり。かの地まい。領主より船四十艘むかり出ださせて。人を渡し給ふなり。（百姓あたし但し無錢）されば佐倉の人々まい。田地を流されざりし事。こいまたく堀田侯の德の致せるものなりとて。感嘆大かたならざりけり。けふ行德まで来て聞きしゐ。この地の水いきのふより一尺あまり退きたりといへり。佐倉の水も。さぞあらん。和君よゆたかゐおいしませ。誇まからんといひかけて皆つと立ち出でゝゆきけり。此事いとめづらかゐ覺えしかば。雜記中ゐおるしおきしを。今又此ゐ抄し出だしつ。おもふゐ。出羽なる大沼の島あそびい。先輩既ゐものゐも誌し。又同國秋田のからす沼。及龜田の山中瀧の股なる峯形といふ沼ゐも。亦島游びの奇異あるよしい。拙著放言中ゐ収めたれども。佐倉の浮田いこれと異なり。亦一奇談といふべきのみ。（文化五年春より秋まで。霖雨しば〳〵せり。この年三月より八月上旬ゐ至りて。雨天一百卒七日おり。九日までも快晴いおほ稀おりき）附けていふ。右の前年（文化四年）の冬より。五年の春夏の頃まで。里巷の小唄ゐ。ねん〳〵ころ〳〵節とかいふものゝ。いたくてやりしことありけり。そのうたを聞くゐ。あしがゐかいときやおかめといふたがのんころ。今い庄屋（シヨウヤ）どのゝ子守をるねん〳〵ころ〳〵ねんころりとうたへり。（此うた。もとい駿鄙伎狂言ゐ始まりしを。遂ゐ江戸中ゐ推しうつりて。いたく流行したるおり。又みめよりと名つけたる。下品の餡餅を市中の辻々ゐてうりはじめしも。この時のことなり。こい右のうたの中。別ゐ人いみめより。只心といふことのあればなるべし）識者或いいへることあり。今茲い秋のころゐ至りて。感冒必流行せんか。細人小兒おしなべて寢々轉々（ネン〳〵コロ〳〵）と謠ふこと。是病卧の兆ならんといへり。果して八九月の頃ゐ至りて。風邪感冒流行して。良賤病卧せざるいなく。輕きい兩三日ゐしておこたるもありしかど。重きいその症疲熱ゐ變じたる三四十日ゐ至るもあり。或い庸醫ゐ惑られて。よみぢゐ赴くものもありけり。このときのゑせ狂歌ゐ

てやり風無常の風もまじりけり。ねん〳〵ころり用心をせよ

かくて病むと。やむ程ゐ。關の八州いへばさらなり。京攝の間まで脫るゝものなかりしとぞ。童謠（ワザウタ）いいゐしへより和漢の歷史ゐ載せられて。應驗あらをといふもの稀なり。又てやり病い。なべてみな年の氣運の順逆ゐてせんかたもなきことながら。それよりも猶疎ま

しきい。市井の風俗のくだれるなり。その水上を尋ぬれば。劇場よりいでぬいなし。風を移し俗を易ふるも三絃にこそよるべけれ。その三絃といふものも。雜劇を師とするのみ。知らずひがごとならんかも

予が東西をおぼえしころより。大約五十年。このかた時々の感冒に世俗の名を負いせしもの少からぬ。まづ安永の中葉にてやりし風邪を。お駒風と名づけたり。こい城木屋お駒とかいふ淫婦の事を旨として。作り設けたる淨瑠璃のいたく行いれたればなり。又安永の末にてやりし風邪を。お世話風と名つけたり。こい大きにお世話。茶でもあがれといふ蹴語の流行せしによりてなり。又文明中にてやりし風邪を。谷風と名つけたり。こい谷風梶之助い。當時無雙の最手なりければ。これに勝ものあること稀なり。谷風嘗て微言して。とてもかくても土俵の上にて己れを倒さんことい難かり。わが卧たるを見まくほりさば。風をひきたる時に來て見よかしといひしとぞ。この言世上に傳へ聞きて。人々話柄としたる折。件の風邪を谷風かいちてやくひき初めしとて。遂に其名を負せしなり。されば この時四方山人。送風神狂詩あり。錄してもてこゝに證とを

引道此風號谷風。關々痰咳響西東。惡寒發熱人無色。煎樣如常藪有功。一片生姜和酒飲。

半丁豆腐入湯空。送君四里四方外。千壽品川問屋中

又文化元年にてやりし風邪をお七風と名つけたり。こい八百屋お七といふ云せ小うたの流行せしによりてなり。又文化五年の秋てやりし風邪を。ねんころ風と名つけたり。そのよしい。上にいへるが如し。又文政四年の春二月の比。いたく流行せし風邪を。たんほう風と名つけたり。こいこのときのてやり小うたに。たんほうさんや〳〵と語ひしことのあればなり。かくて去年甲申の春二三月の頃。てやりし風邪を薩摩風と名つけたり。こい西國よりてやり初めて。こゝまでうつり来つればならん。此うち谷風。お七風。ねんころ風。たんほう風い。てげしかりき。家々毎に五人三人枕をならべて。うち卧さぬいなかりけり。西い京攝に至り。東い安房上總。西南い甲斐伊豆の海邊。北い信濃越後まで。なべて脫るゝものなかりしよし。その折々に友人の郵書にも聞えたり。たんほ風のてやりしとき。何ものかよみたりけん

みやこから乘せてくるまのたんほ風ひくものもありおもものもあり

いとおかしきや。例の人の癖なるべし。かゝれば此風い京よりてやり来つるにこそ。この他。寛政享和中にも有りけんを。さる名を負せざりける歟。いふかひもなく忘れたり。抑。

この一條に最も北峯子のたるしつけたる。風の神の圖貌の後につけてもいはまほしかるまゝに。伊豆の千わきのわけなし言もて。科戸の風の神やらひしつ。鋭鑓。八重鑓。刈りたらふごと。如秀たが筆を走らせしみそぎのやゝのやく體もなき。只是嗚呼のをさみになん

○兩國河の奇異　庚辰の猛風　美日の斷木

右の風の物語にて。思ひ出だしゝ事あるを。更に又こゝに書きつく。文化十三年丙子の秋閏八月四日の大風雨に。予が日記中にもたるし置きたり。其前日より雨ふりつ。天明けて。雨に歌たりしに。又巳のころより大風雨にて。樹を拔き。屋を破りつゝ。申の比に雨霽れて。其夜子の比及に。やうやくに凪てけり。この時。本所。深川に水出でゝ床の上壹貳尺に及びしといふ。しかるにその風に南よりして。特に潮氣を含みたり。されば草や南を受けたる草木に。をべてその葉を吹き凋まされて。枯れ果つるに至るもありけり。この年の冬十月。予に榎の島。鎌倉に遊びしに。海道の松毎に凋落せぬになかりけり。かゝれば南表なる漁村に。彌烈しかりけん。風に潮をまぜて吹きしに。こもめづらしき事になん。是よりも猶奇しき事あり。この大風烈前二ヶ月。七月十日の事なりき。侍醫山本宗英法眼。其通家官醫野間氏の本所なる宿所に赴きてのかへるさに。夜にてや夾中とおぼしき比。兩國橋を渡る程に。河上に一團の火焔あり。吾妻橋のかたよりして。大橋の方に過ぎけり。おもにをこれを仰ぎ望つるに。その光の青く引きたる。青衣の官人騎馬にして。前うしろに從ひつゝ。火焔を守護するものに似たり。その容に おぼろけなれども。すべてに衣冠束帶の如くにぞ見えてける。橋の上を相距ること。凡一丈むかりにして。徐々とねりゆくを立ちとゞまりて猶見る程に。漸々に滅えうせしとぞ。予に次の月の下旬まで。さる事ありともたらざりしに。風聞他所より聞えしかば。八月廿よかの日に。興繼を遣して。法眼に問はせしに。聊もたがひあらぜ。見し趣に云々なりとて。詳に語られけり。扨も件の法眼に。予と三十餘年むかり交遊の義を辱うせられたる少年よりの友にして。齡に五つの弟にて。おのせしによりて。その心ざまも大かたならぜしりたるに。絶えて浮きたる性ならねば。實說なりきと思ひしのみ。何の故とに曉らざりしに。後の葉月の四日に至りて。法眼の見きといはれし兩國河の怪物に。かゝる烈風。洪水のありぬべき前參なりきと。初めて思ひあはしけり。かゝれば橋南谿が。東遊記に載せたりし名立崩れの前月に。神佛の空中を飛び去り給ひしなどいふ事も。一概に誣えがたかり。これよりあづか三とせにして。文政元年

五月下旬ゴ。彼法眼ハ身まかり給ひぬ。享年四十八歳なりき。いとをしかりける齡ゴこそ。

文政癸未八月十七日の夜の大風雨のときハ。その大さ醤油樽ばかりなる陰火の飛行せしを。まさしく見たる人あり。非常の暴風雨のときゴハ。必ずのたるしあることなるべし

かくて。又文政三年庚辰の秋。九月八日の大風烈ゴ。駒込不動坂のほとりなる名主内海權十郎主從二人巨樹ゴ撲たれて。身まかりけり。そを相識れる商人の。次の日ゴ来て。告ぐるを聞きしゴ。權十郎が宿所のほとりハ。昔春日局の別莊ゴて。素より由緒あることなれば。年々の秋毎ゴ。園ゴ生じたる栗を採りて。つぼねの廟ゴ備ふるを恒例とするものなり。しかればこの日も採りたる栗を。ひとりの從者ゴ齎しつゝ。湯島なる天澤山ゴ赴きて。役僧ゴわたしてけり。さて辭し去らんとする程ゴ。風ハいよ〳〵烈しくなりぬ。猶しばらくと留められしを。おほやけざまの所務あればとて。いそがハしくまかる程ゴ。寺門を出でゝ。いく程もなく。門内なる樅の木の。十圍ゴもあまりつべく見えたるが。只推し揉りたるやふゴ。樹ハ真中より吹き折られて。大地を撲ちて落ちしかば。從者ハ大枝ゴ肚を撲して。矢庭ゴ即死したりける。年十六ゴなりしものなりとぞ。その名をしらず。權十郎も打ち仆されて。半死半生なりけるを。寺より駕籠ゴたをけ乘して。宿所へ送り遣せしゴ。家路ゴかへり着く程ゴ。忽ゴ息絶えゴけり。享年四十二歳といへり。大風烈の折などゴハ。鬼魅蛇蝎の風ゴ乘じて。飛行をすることありとしもいへば。已むことを得ぬ急用ならぬゴ。犯して出づるハ愚ゴ似たり。しかれども。又風の吹かぬゴ物の倒るゝことも有りけり。近くハ文政六年癸未の夏六月廿三日の未の時むかりゴ。淺草寺の地内なる。三社權現の石の鳥居の。忽然と折れたるを。人みなおどろき怪みて。さま〳〵ゴいひしかど。笠木の三つゴ折れ碎けしハ。その續目の甘き延びて。落つる勢ゴて折れたるならん。折れて落ちぬるものならぢハ。さまで怪しとをるゴ足らぢ。これよりもいと奇なりと思ひしハ。文化四年丁卯の秋。八月廿三日の未の時むかりゴ。御城内御焔硝庫のほとりなる。ふりたる松の二株まで。自然と折れしことありけり。その樹ハ。十圍ゴもあまりつべし。この日ハ。しかも美日ゴて。そよふく風もなかりしゴ。只是のみゴあらぢ。上野護國寺の巨樹。河越侯邸中の大銀杏など。おなじ時刻ゴ折れたりといふ。これも亦一奇事なり。しかれども。この月の十九日ゴ。深川八幡宮の祭見んとて。永代橋を踏み落しつゝ。およそハ四百八十餘人。水ゴ没して死ゴたりける。このことの噂ゴのみ。世の人耳を側てつる最中ゴてありければ。件の巨樹の折れたるをいふものもなく。知るもの希なり。又去々年癸未の秋八月十七日の夜の大風烈ハ。近来未曾有の暴なりければ。奇談怪説多かれども。まことしからぬこともまじれり。これらハ童蒙も耳目ゴ熟して。今しも折

折いふことなるを。又さらにこゝに識さば。冬の透間の風に似て。さこそゐ人に厭はれもせめ。世の諺に。大風の吹きたる跡といふ如く。風のてなしが是までにして。然して後のまとゐを待つのみ

文政八年皐月朔

著作堂解識

前々會拙編中補遺附錄

宛委餘篇云。呂布有赤兎。張飛有玉逍。曹真有驚帆。曹洪有白鶴。又云。驚帆魏曹洪所名駿馬也。馳馬吳孫權所名快舫也。二事正相反。而又相對出一時甚奇。見第三八丁右 この條の曹洪とあるは。曹真の誤なるべし。とき馬に帆をもて名つけ。てやふねに馬をもて名つけし事。共に三國鼎立の時にあれば。實に奇なり。この事季春の集合に出だせし拙編錦驅の條にいふべかりしを。うち忘れたりければ。追うてこゝにあるしおくのみ。六日のあやめ。十日の菊。おくれていまだ遠くもあらぬを。見かへる人もあらんかとてなり

解再識

平安 角鹿桃窠

乙酉五月隨筆會

雨森東五郎のかける戯草といふものに。この國の筆法といへるは。壬辰の亂後。とりことなりて。此國にをめるから人の教へしを。賀茂の甲斐つたへたるなり。されど今から人のものかくを見るに。筆の意てなはだ違へり。から人の筆の意も。もろこしとは同じからぬと以上戯草 按ずるに。賀茂甲斐教直は。天文年間飯河治部少輔秋芸老後。一雨齋妙佐と號せし人に。上代の書法を傳へうけたるなり。其事。實書博士家の系圖に見えて。いとあきらかなり。かのから人に筆法をうけしとは。さらに意得がたし。されども。芳洲老人は博雅のひとなり。其頃かゝる傳へもありしにや

文政八年乙酉隨筆會

平安 角鹿桃窠

花

京師の俗に。小兒生れて初の正月。母かたの親里などより。男子にふり〳〵さてうを贈る事は。今もまれ〳〵にあり。女子に花をおくりしは。漸くたえたるに似たり。浪華あたりにては。てまりてふものを贈るとか聞きしが。其事はよくもあらぬ。花といふは。もと端午のものにて。童の袖にかけたる藥玉の遺裂なるべし。かざり花といふべきを。後にはただ花とのみ言ひしよしは。四民往來年中故事要覽。枕草紙春曙抄などにも見えたり。享保の印本。女用花鳥文章のさつきまもりの圖に。かの紙に貼したる花によく似たれば。其比は。さも

言ひしまゝ。かざり花を。年始またいうぶ子の方へ贈りて。祝儀とせしに。めで度もの故さにせしなるべし。藥玉をうぶ子のかたへおくりしもよしなきまあらぜ。赤染衛門家集ま。

五十日

いかの程なる兒ま。藥玉をやるとて。「おひたちんおともゆかしきあやめ草。ふた葉よりこそたまと見えけれ。是に五月の事ながらうぶ子ま藥玉をおくりし事ありしといとぞいふべし。ふり〳〵きてうの事に。醒齋老人の骨董集ま。くにしくあるし。余が考をものせつれば爰まにいいそぎ

右客篇二通

桃窠に京師の人。角鹿清藏といふ。名に北豆流。桃窠にその號。又號青李庵。家に一條通千本東まに入る町まあり。持明院家の書法を學びて。筆學の蒙師たり。その性好事まして。尚古の癖あり。予二十年來文通の遠友まして。老實温順の人なるをあれり。よりてこの春つかはしゝ狀まに。予に神田まに移住のゝち。をり〳〵閑居の慮を推しひらきて。月毎まに五六名家とまとゐをるをたのしみとをなり。そのあそびにあか〳〵なりとて。耽奇。兎園の事どもをいさゝかほのめかして聞えあらせしま。きのふその回報東着したり。披き見るま。あれちかきまたりならば。さるかぐそしきむしろの末まもおしてつらなるべかめるま。東西山河のそるかなるをいかぐにせん。せめてものこゝろやりま耻ぢかゞやかしき筆をさびを。ふたひら三ひらまゐらする。これいとにしく思はれぜに。さ月の會まおしいだして。披露してたびねかし。さても貴所のまたりまに。輪池翁など聞え給ふ名家のおにしまをよしに。年ごろ耳なれて侍り。かの翁に持明院家の筆法を傳へさせ給ふとなん。おのれもかの御門人をけがし奉れば。仰山景慕のこゝちすと。ねもごろまあめしこしたり。その志のいと淺からぬを。おしつゝみてをらんまに。朋友のみちまあらじと思ふむかりをよすがまして。かれが稿本の餘紙まをも。ことの趣をあるしつけて。愚稿とゝもま。これをしも披講せんことをねがふのみ

乙酉仲夏朔

江戸　著作堂　識

○松五郎遺愛馬の考異

今茲暮春朔日の兎園會ま。家嚴の書きつめて披講あたりし五馬之一。陸奥の伊達郡箱崎村覆民傳兵衛が子の松五郎が遺愛の馬の事。當時松前老侯。その近習まに命じ給ひて。圖說をつまびらかまに錄し給にりし物。獨まに家嚴ふかく藏め失ひて。たづね求めたるま。かいくれ見えざりければ。暗記をもて書かれしなり。しかるま。いぬる日ゆくりなく。その圖說を

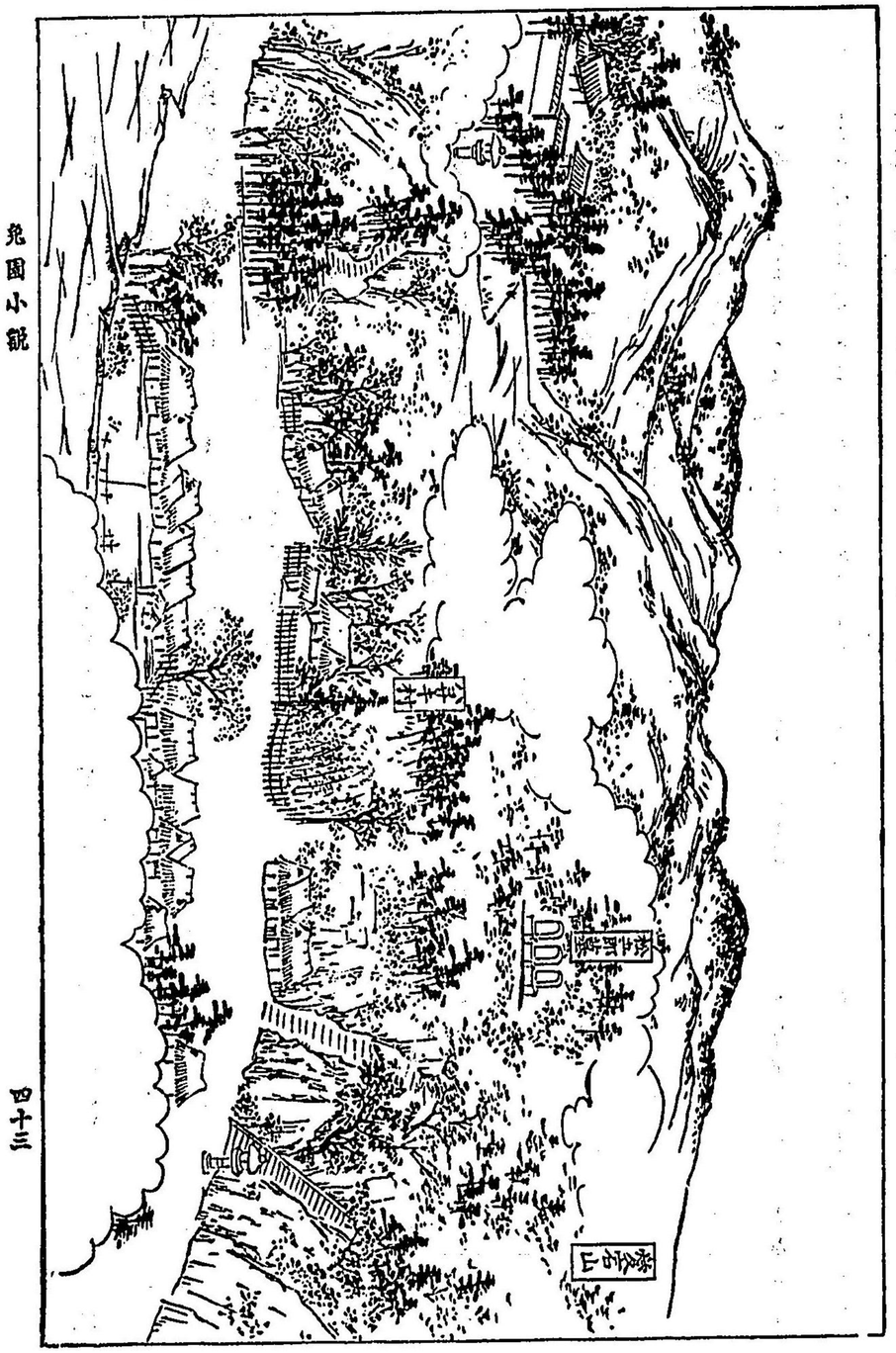
たづね出でたり。叔披閲せられしに曩に誌されしと大かたは違はねど。暗記の失なきにあらず。家嚴則その書畫を與繼に志めしていへらく。かゝる實錄にいさゝかたりとも錯誤あらんは。遺憾の事なり。そのたかへるところ〳〵を。なほ書きあらためて。後のまとゐに披露せはやと思へども。おなじすぢなることどもを。ふたゝびせんはわづらはしく。且ことふりにて勞にしも得堪へぢ。汝これに代りて。これかれをよく比較して。足らざるを補ひ。違へるを正せかしといはれたり。おのれ不似にして。文辭のうへにはその才露むかりもあることなし。いかゞをべきと思ひ煩ふものから。もしかゝる事なかりせば。いかでか不文の筆をさみを。晴なるむしろにおし出だして。諸先生の玉をつらね。錦をひるがへせる文場に加はることを得べけんや。いなむも事によるべきものをと。思ふむかりを心あてに。おち〳〵たがへるところ〳〵を。さらにしるすこと左のごとし

奥州伊達郡箱崎村は御領にて。桑折御代官所の支配たり。同村の百姓傳兵衛は。高橋氏にして。文政二巳卯には年方四十七になりぬ。渠は元祿年間より。代々當時に住居して。相應の百姓なりしに。近年いよ〳〵ゆたかになりぬ。男女の子ども三四人あり。彼松五郎は家子（ヒヒコ）なり。又この家に老母あり。傳兵衛素より孝心ふかく。よく老母に仕へしかば。松五郎もその心親に劣らぬ。これによりその二親の志にたがふことなく。祖母にもよく仕へたり。且その性。馬を好みしこと。曩編にあるされしごとし。かくて松五郎は文化十四年の夏の比より。勞瘵の症にて。病みつらふこと二とせに及びつゝ。文政元年戊寅冬十月廿七日に。享年二十歳にて身まかりけり。曩編に文政二年十二月十二日に病死せしよしをしるされしは。暗記の失なるべし

かくて次の日。松五郎が亡骸を棺に斂めんとせしとき。祖母并に二親哀傷に得たへぢ。松五郎が手道具やうのものをおちもなくとりあづめて。棺に納めんとあたりしを。親類たるものひそかに諫めて。其事甚しかるべからぢ。當今は六道錢すら嚴しく停止せられしに。いてかゝるしなゝ〳〵をむなしく土中に埋めんは。物體なきことどもなり。ゆめ〳〵思ひとゞまり給へと。まめやかにいさめしかば。祖母ふた親も。その儀に託して。さる事はせぢなりぬ。しかるにこの宵。同村の貧民四五人手傳の爲にとて來てをりしに。そこにて松五郎が棺の内へ手道具やうのものを納めて。つかはさんといひし趣をもれ聞きて。そのゝち親類なるものゝ諫によりて。さる事はせぢなりしことをしらぢ。こゝをもて件の四五人。竊に示し合しつゝ。同月廿九日の薄暮より。打ちつどひて。酒四五升を求め來つ。こ

れをのむとのむほどゝ。酒氣ゝ乘じて。松五郎が墓所ゝ赴き。既ゝその新墓を發きし折。松五郎が遺愛の馬ゝ。厩の横木を推し破り。墓地ゝ走り來つ。件の惡もの四五人を蹴仆しゝ事の趣ゝ。襃編ゝあるされしがごとし。これを隣村の百姓なりしといへりしゝ。傳兵衛が聊遠慮もていひし事ゝて。實ゝ同村の百姓なりけるよしなり。すべてこの箱崎ゝたりゝ人氣よろしからぬ所ゝやありけん。かゝるまさな事をするもの。をり〳〵ありとぞ聞えたる

さて件の馬ゝ。青毛なり。襃編ゝ栗毛としるされしゝ。是又暗記の失なり。この馬ゝ鞨鼓野といふ牧より出でたるを。二歳のとき。傳兵衛が從弟龜次郎といふ者。馬市ゝて買ひ取り來たり。松五郎ゝ馬を好むゝ。傳兵衛も又馬を愛をる心ある者なりければ。すなゝち乘馬ゝせんとて。乘り立てしかど。地道よろしからぎとて。遂ゝ小荷駄ゝしたりける。されども松五郎ゝむじめゝかゝらぎ。この馬を鍾愛して。みづから秣を飼ひ。又ある時ゝ。餅菓子などをも食ゝせ。田畑へ牽きもてゆくときも。決して家僕雇人などゝあづけずして。みづから牽きてゆきかへりせしとぞ。又傳兵衛が菩提所ゝ。眞言宗ゝて。普賢山福嚴寺といふ。住持ゝ覺應法印とて。文政元年その齡六十七歳なりとぞ聞えし。又この寺ゝ傳兵衛が居宅



よりハ。三町許北のかたニあり。又その墓所ハ寺を距ること東南のかた五町許ニあり。傳兵衛が宅より墓所ハ東南の隅ニあたりて。相去ること二町程なりといふ

松五郎が戒名ハ寂光院貞心自了信士（文政元年戊寅十月廿七日二十歳）

松前家より件の趣をよく質し問ひて。家嚴ニ示し給ひしハ。文政二年六月十三日のことなり。後考の爲ニ。その簡牘を寫し書する事左の如し

松前藩長尾氏手簡

昨夕ハ罷出御目通殊ニ寛々御物語仕大慶至極奉存候其節申上置候箱崎馬之巨細書指上候樣被申付則爲持指上候間御落手願上候早々頓首

六月十三日　　長尾友藏

瀧澤樣尊下

同藩櫻井氏手簡

一筆啓上仕候甚暑之砌御座候得共上々樣益御機嫌能被爲遊御座御同意奉恐悦候隨而貴公樣彌御安泰被成御勤仕目出度御儀奉存候然ハ蒙仰候箱崎名馬實說巨細書奉指上候宜敷御披露奉頼候且又右馬の儀も箱崎傳兵衛（明カ從弟）龜次郎と申當時瀨之上驛ニ別宅仕馬喰商買仕居候間同人ヘ懇意仕候出入國吉と申者ヘ申含承合候得ハ龜次郎心易受合候間伯父傳兵衛ヘ申込候處中々放候樣子無之吉態々以飛脚申參り候右紙面貴公樣迄指上候間可然樣御取繕御沙汰奉願上候乍併此上是非々被爲有思召候ハゞ又々一手段仕見可申候得共先此段奉申上候猶又箱崎傳兵衛居宅寺墓所等麁繪圖認奉指上候彼是可然樣御取合奉願上候殊更此間家内ニ病人有之延引仕候段奉恐入候何分宜敷御執成奉願候右之趣可得貴意如此御座候恐惶謹言

六月二日　　櫻井肱齋

土屋翁平樣

別紙奉申上候合紙面入御覽候瀨之上後藤龜次郎者箱崎傳兵衛方より別家仕候者之子ニて傳兵衛とハ從弟ニ御座候此段御含ミ被置御披露可被下候以上

翁平樣　　肱齋

傳兵衛從弟龜次郎手簡

飛脚を以て申上候暑氣甚敷候得共彌御勇健ニ可被成御疲と奉賀候然者先日ハ御

目懸大慶奉存候其節御咄被成候箱崎傳兵衛方へ馬之儀申聞候處實ニ忠義ニ相當り候馬之儀ニ御座候得ハ傳兵衛方ニて飼ころしニ仕度よしニ御座候尤前々より忰松五郎氣ニ入壹人ニて飼立候馬ニ御座候へハ猶更右樣之義有之候而ハ相ては し無候趣ニ御座候間右之段何分御斷り申上候早々如此御座候以上

五月廿七日

せの上

後藤屋龜次郎

新田屋園吉樣　要用

長尾友藏と松前家の臣なり。（役所左衛門）又櫻井胱齋も同家臣ニて。當時在梁川なりし醫官なり。（明なるべし）又龜次郎といふ者ハ。高橋傳兵衛が從弟なり。櫻井胱齋かねて園吉が龜次郎とある人なるをもて。則園吉をもて。彼馬の事をてからハせしニ。傳兵衛かたく辭して售らざりし事。簡牘ニ見えたるがことし。抑この奇談ハ。浮きたることニあらず。忠孝の端ニもかゝつらへるよしあれば。いさゝかもたがふことなくありつるまゝニあるしおくべしと。家嚴のいハれしよりて。このことニ及べるのみ

○興州平泉毛越廢寺路舞歌唐拍子

ちなみニいふ。みちのくの田うゑ歌ハ。古風なるものなれば。こそ。芭蕉の發句ニも。風流のてしめや興の田うゑ歌といへれ。この田うゑ歌の事ハ。本居氏の玉勝間ニ載せたれど。世の人のゑる所なり。ゑかるニ興州平泉ニ。中尊寺。毛越寺といふ寺ありて。各十八箇の子院あり。今毛越寺ハ廢して。唯子院十八箇をのみ殘したり。この毛越寺ニ。むかしより傳へて。唐拍子といふ歌あり。路舞歌ともいへるよし。今も毎年毛越寺廢墟の阿彌陀堂ニ。子院の法師集りて。この舞樂を行ふとぞ。そのうた左のごとし

唐拍子歌

○ソヨヤミイユ。ソヨヤミユ。ゼイゼレゼイガ。サンザラ。クンズルロヲヤ

○シモゾロヤア。ヤラズハ。ソンゾロロニ。ソンゾロメニ。コウコロナンズリシニ。ワヨヤミイユ

○ヲウゾラユク。ヲウゾラユク。カリノハ子ヲトヲヤ

○シツライ。デイガ。サイドノトノ。サアラサラメニ。ユクヨナ。ザレヲ。ノウトメ。コゾノ。タマメハ。ミヤノウマイ

○ハアチジウ。ヨヨノ。ミヤワカアイ。ハチジウヨヨノ。ミヤワカイ。チヨノタマメハ。ミヤ

ノマイ

○ワラワロニ。タマワロウトサユワイ。クサヲハ。アユノ。チヨインニ。サワケタマイ

○トウリノ。ミヤコニハ。トウリノミヤコニハ。ホトケノ。ミナヲバ。シラヌナリ。リリヤ。リリヤ。リリヤ。リリヤ。リツ

○ゴダイ。サンニハ。モンジユコソ。ロクジニ。ハナヲバ。チラスナリ。リリヤ。リリヤ。リリヤ。リツ

この一條は懸川侯の儒生松崎憲堂。文化中ある夏。東游の日。件の舞踏を目擊し。且その幾曲を寫し來つるよし。同藩の留守居役。長鹽氏（平六）は。家嚴といさゝか由緣あり。予も相識れるものなり。文化の末。長鹽氏家嚴より消息のおくり。この事を告げおこせたり。ささの日。反故をえりゞくるとて。これをもたつね出でたるを。こゝにあるせといへれしよりてなむ

文政八年五月朔書於神田若壺庵　琴嶺瀧澤興纒

○土定の行者不死　土中出現の觀音

信濃國伊奈郡平井手といふ村より。いと大きなる槻（ケヤキ）ありけり。（平井手村は。下の諏訪を距ること三里許り在り。内藤家の封内なり）文化十四年丁丑の秋のころ。させる風雨もなかりし日より。此木おのづからゝ倒れけり。かくてそのうごもちあばけし坎（アナ）の中より。ひとつの石櫃あらはれたり。里人等いぶかりて。みな立ちよりて見る程より。この石櫃のうちよりして。鈴鐸の音。讀經の聲の洩れて。かをかゝ聞えしかば。人々驚きあやしみて。彼より告げこれをしらせ。つどひて評議したりける。そのとき里の翁のいはく。むかし天龍海善法印といふ山伏あり。當時この人の所願によりて。生きながら土定したりと傳へ聞きたることもぞある。おもふに。彼法印は。今なほ土中に死なぬやあるらん。是なるべしといひしかば。里人等うべなひて。櫃の上に殘りたる土を搔拂ひつゝ。よく見るに果して歲月名字などの彫りつけてあるにより。感嘆敬信せざるもなく。俄に注連を引き遶らし。尸垣をさへ結びなどして。みだりに人を近かつけぬ。かゝりし程に。近鄕の老弱男女。傳へ聞きて。參詣羣集あたりしかば。更に又假屋やうのものを修理ひて。線香洗米などを備へ。なほ日にまして繁昌しけり。しかれども石櫃をばそがまゝにして。戸をひらかぬ。鈴鐸の音。讀經の聲は。月を經れども絶ゆることなし。その石櫃の上のかたに。息ぬきの穴三つ四つあり。その入り口は二重戸にて。第一の戸はひらけども。二の戸は内より鎖したるがとじめひらかんとしたれども。得披かれざりければ。その後は

里人等もおそれて。いよ〳〵聞くことなし。この年冬のころまでも。參詣日毎ニたえぬと
ぞ。抑この一條ハ。同年の霜月より。予が家ニ来て仕へたる。初太郎といふ僕の云々とかた
りしなり。渠ハ信濃國高島郷下の諏訪真宇野村のものなり。そのふる郷ニありし日より。
件の事を傳へ聞きつゝ。こだみ江戸へ来つる折。同行のものもろともニ。平井手村へ立ち
よりて。かの石櫃を見さといへり。しからばその年號ハ。何とかありしとたづねしニ。年號
ハおぼへ候ハぬ。大約今より百五十餘年ニ及ぶと聞きつといふ。さらば明暦萬治の中か。
寛文ニハあらぬやと。一二を推して問ひ質せども。いひがひもなく知らぬと答ふ。かゝる
あやしき物語ニハ。そら言も多かれば。疑ハしくハ思ふものから。たちニ足らぬ田舍兒
の。正しく見さといふなれば。作り設けし事ニハあらじ。彼地の人ニあふ事あらば。ふたゝ
び問ハんと思ひつゝ。雜記中ニあるしおきしを。けふのまとゐニ寫し出でたり。扨そのゝ
ちハ。いかニしけん。又問ふよしもなくて過ぎニき。按ずるニ。見聞集ニ云。慶長二年のこ
ろほひ。行人江戸へ来たりいふやう。神田の原大塚のもとニて。来る六月十五日火定せん
とふれて。町をめぐる。是をおがまんと。貴賤ぐんじゆし。廣き野原も所せき立どなかりけ
り。塚本ニ棚をゆひて。その下ニ薪をつみ。火を付け燒き立つる處ニ。行人火中ニ飛びいり

たりとも。弟子の行人ども。そばよりつきおとしたりともいふ。我たしかニハ見ざりけり。
次の日。朋友とうちつれとぶらひゆき。大塚のあたりを見るニ。人氣ハひとりもなく。跡ニ
ハ骨まじりの灰ばかりのこりたりとぞ。るしつけたる事もあれば。およそハ慶長元和よ
り。明暦萬治のころ迄も。さる名聞の爲など命をうしなふ。せ行者の江戸の外ニもあ
りしならん。火定ハ弟子ニ突き落されても。立ところニ死ニたらめ。土定して百五六十年
さをがニ死も果てざりしハ。なほこの火宅ニ愛惜したる。懲念の凝れるニこそ。迷ひのう
への迷ひなるをも。よニ理ニあきらかならで。只奇ニ走り。信を起すハ。なべての人のこゝ
ろなりけり。今も又さる人あらば。智識の杖もて破却せしめて。成佛させたきものニあ
らぬや

右の前年。文化十三年戊子の春正月廿五日の夜。巢鴨の町醫師大舘微庵が弟松之助とい
ふもの。王子權現の社のほとりニて。黄金佛なる觀世音の小像を堀出せしことありけ
り。かくて。同年の秋閏八月中旬。肝煎名主等市のかみの旨を得て。ことの由を書きある
しつゝ町々へふれ傳へしかばありたる人も多かめれど。本文のまゝ抄錄を。其ふみニハい
とく

拾四番組名主政右衛門支配
巣鴨町勘兵衛店
町醫師大館微庵弟
松之助
子廿六才

右松之助義者。文年中より王子村金輪寺雇ゝ而罷越居候處。當正月廿五日夜。主人用事ゝ而。罷出立歸候節。夜四時頃王子權現と。稲荷社之間十條村之方へ。拾貳三間も參り候往還端ゝて。光り候品見え候間。立寄見候得ゝ。土中より光り出候ゝ付。少し土中を堀候へ者。小さき佛像出光り居候間。持歸り洗見候得共。金佛之觀音ゝ付。能々改見候處。黄金佛ゝ而。長さ壹寸八分程有之間。即刻兄微庵方へ持參り。同二月五日御用番永田備後守樣御番所へ御願申上候へゝ。御紀之上。上け置候樣被仰渡。當八月廿六日微庵町役人組合肝煎名主一同。右御番所へ被呼出。月數相立候ゝ付。右之品ゝ。松之助へ被下旨。右ゝ付。不審議異說等不申鋼義ゝ勿論。猥りゝ人々ゝ爲見候事不相成候間。其旨存候樣於御白洲被仰渡。右佛像御渡被成候 下略

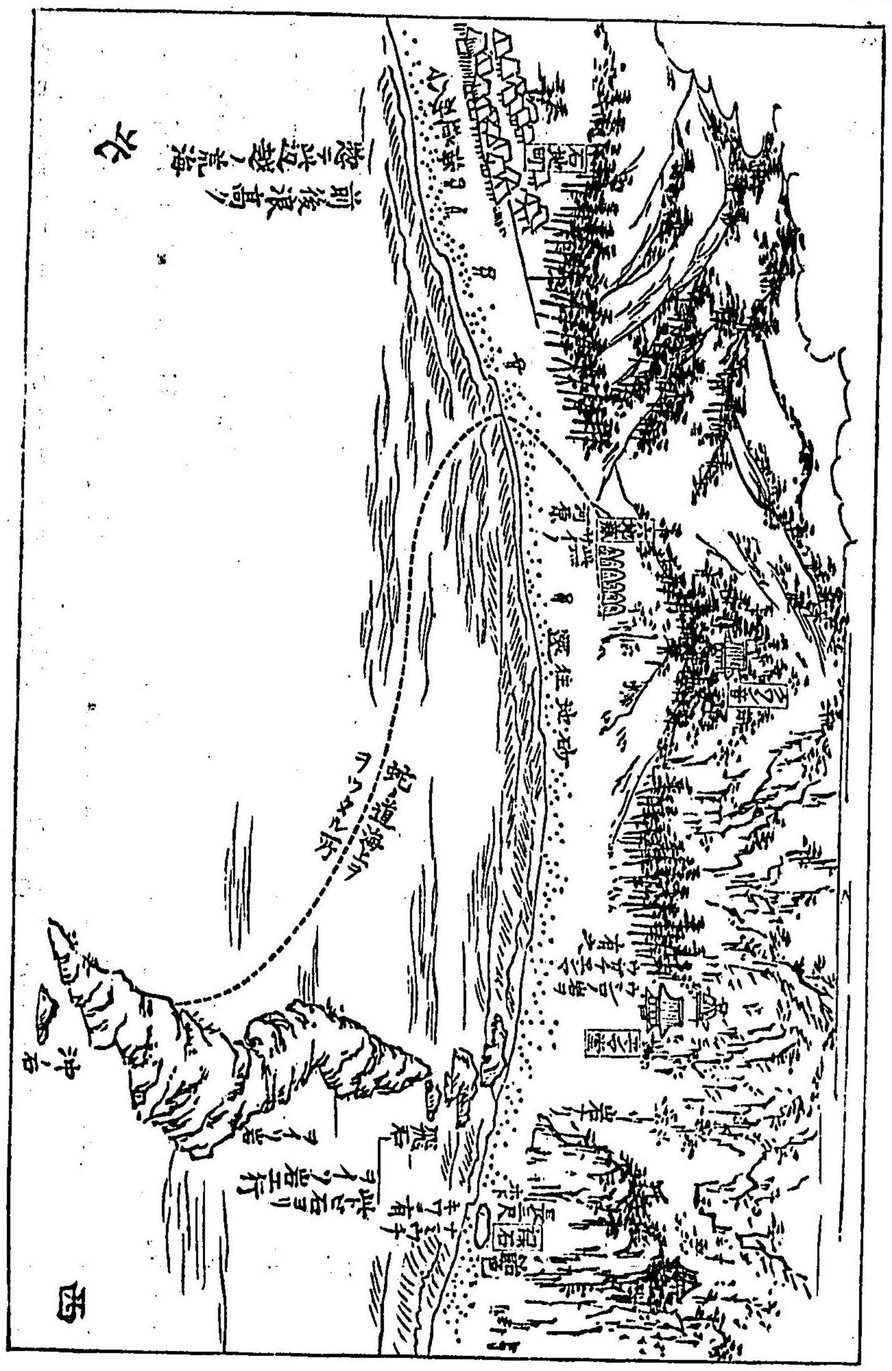
子閏八月十八日

かゝる事を江戸町々なる借屋店借りの者迄ゝ。ふれ繼がれしゝて。いとめづらし。おもふゝ。黄金佛なれば後日ゝぬしの出づとも異論あらせじとの爲か。且靈驗などをさへ唱へさせじとの爲なるべし。按。本草載地鏡圖云。黄金之氣赤。夜有火光及白光。かゝれば件の佛像の。夜その光りをゝなちしゝ。黄金ゆゑ歟。靈ある故歟。この事極めていひがたし。且その土中ゝ入りしことの深からざりしゝ。兩後などゝ人の遺しゝことありしを。知らで踏み込みたるもの歟。これも亦ゝるべからぎ。是より先ゝも夜な〳〵ゝ光をゝなちしものならば。見いだす人もあるべかりしを。松之助が目ゝのみかゝりて。堀り出だされしも亦奇なり。おもふゝむかし佛像の水中ゝ光りをゝなちて。或ゝ漁者の網ゝかけられ。或ゝ木杪。并の底より出現ゝ給ふことゝゝいへば。靈驗あらぬものもなく。堂塔伽藍美を盡して。今も衆生ゝをがまれ給ふゝ。いかなればこの觀音のみさるよしもなく。世の人ゝゝられも得せぎ。をがまるゝことゝゝら許され給ゝぬゝ。佛ゝも幸不幸やある。もし稍時のそやしとて。そこゝ智識をまたせ給ふか。さらずゝ國の寶をもて。そのみかたちとゝ給ふを耻ぢさせ給ふこともやあらん。これらの靈のある故ゝ。凡夫のめづる靈驗をあらゝし給ゝぬものならば。寵辱利害を解脫し給ふ。それこそ真の靈佛ならんとまうさんも。なほかしこかるべし

文政八年六月小暑後之朔。識於著作堂南窓合歡花蔭　　蓑笠漁隱

○蛇化して爲蛸

越後の刈羽郡なる海濱に。古歌にも八百日ゆく越の長濱とよみたる當國一の荒磯なり。この所。出雲崎に相つゞきて。東南に嵯峨たる海巖のつらなりたる。さながら刀もて削れるがごとく。西北に渺茫たる大洋にして。見るめもたるかに限りなられぞ。うち寄せるなら波の推けてかへるをさましかるべし。かねて聞く。この邊をべて沙濱にて。石地といふ漁村あり。抑この町に。海を面にし。山を背にせ。こゝには松多しといふ。この山に相つゞきて。又松山あり。この山の根かたには。石の六地藏建たせ給へり。よりて里俗。この邊を寨の河原と唱へたり。これより松の林あり。この林のうしろよりして。柏谷宮川と唱ふるかたに。みなこれ峨々たる岩山なり。この岩山の前にあたりて。閻魔堂あり。そのうしろの岩を穿ちて。閻王の木像を安置せり。これより海邊又數町にして。岩山の半腹に辨天堂あり。この天女堂の前なる磯の浪打際に。男根石あり。土俗にこれを裸石といふ。三四尺なる天然石にして。餡色なり。遠近の石女等この石に禱りて。子を求むることありといふ。されば石地町なる童子等に年々の夏毎に。この濱に出てゝ。水に戯れ。終日游びくらすこと絶えて虚日なしとなん。去かるに。いぬる文化九年夏六月十六日。石地町なる民の子文四郎といふもの。時に十五歳その友たち兩三人とゝもに。寨の河原の海邊に出でて。水をあみんとしたる折。石の六地藏のほとりより。長さ四五尺なる蛇とし出でけり。文四郎等これを見て。彼打ちころしてんといひもあへぞ。手に〳〵棒をとりて。打たんとせしに。蛇はたゝちに海に入りつゝ。波を凌きて泳くほどに。文四郎等は衣脱き捨て逃ぐるを追ふて。水中のところ〴〵にあらはれ出でたる。岩角つたひに飛び越え〳〵。飛石老曽など呼びなしたる海岩をつたひゆきしかば。おいそ岩のほとりに到りぬ。そのとき蛇は岩角にまは〴〵その身をうちつけしを。いとあやしと見る程に。蛇の尾は。忽にいくそぢにか裂けたるが。そのほとりの海水は。たちまち黄色になりしとぞ。さりけれども驚きおそれぞ。猶しも取りな逃がしそとて。終にうち殺してけり。扨引きあげてよく見るに。その蛇。既に蛸に變じ裂けたる處は。足になりて。胱さへてやくいで來たるに。頭もてしめの蛇に似ぞ。俄にまろくふくだみて。さながら蛸に異ならぞ。只その色は。白てげて。聊も赤みなし。日を經れば。あかみさをといふ。只そのかたちの異なるよしは。八足ならで七足なるのみ。されば蛸ぞ。凡この地の漁父共の。七足の蛸を獲ることあれば。こゝ蛇の化したるなりとて。うち

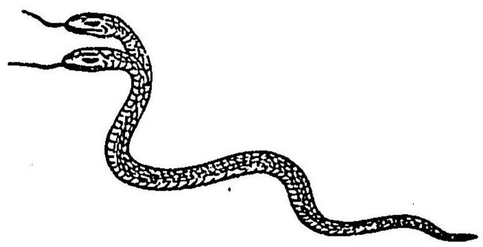


捨てゝ是をくらはず。しかれども。まのあたりに蛇の蛸になりぬるを見つるは。いともめづらしとて。事をちこちに聞えたり。こゝをもて當年かの地の一友人ゆきて。その蛸を見つ。且文四郎に。その折の有さまをよく聞きて。地理さへ圖して。家嚴におくれり。よりて今その地圖を乞ひ得て。ちなみにこゝに載するのみ予嘗て越後の總地圖によりて志りぬ。この老曽岩のほとりには。蛇崩と唱ふる處あり。且その邊にふかき淵あり。この淵のぬしは。大なる蛸なり。又大なる龜なりなともいへり。近ごろ漁者のむすめ。海苔をとるとて。こゝに來て。そのぬしなるものに引き込まれたり。死骸は終に出でざりしといふ。按ずるに。龜もその性蛇と近し。いづれまれ蛸の八足ならぬものをば。くらふまじきことぞかし

○雙頭蛇

文化十二年乙亥秋九月上旬。越後魚沼郡六日町の近村。余川村の民金藏雙頭蛇をとらへ得たり。この金藏が隣人を太左衛門といふ。この日。金藏所要ありて門邊にをり。その時件の蛇地上より走りて。隣家なる垣に跂登るを。金藏ちゃく見だして。箒をもて拂ひ落としつゝ。やがてとらへしなり。この蛇長さ纔に六寸あまり。全身黑く。只その中央は。薄黑にして。腹は青かり。則桶に入れて養おきけり。近鄕傳へ聞きて。老弱日毎に來たりて。觀

るもの甚多し。てじめこの蛇の跋出でんとをるとき。雙頭をふりまけ。左の頭に左にゆかんとをるごとく。右の頭に右にゆかんとするがごとし。既にして雙頭一心に定むる時に。真直に走るといふ。又桶に入れて屈(カヾ)踏(カヾル)るときに。雙頭かさなりてよのつねの小蛇の如し。時に近郷の香具師これを數金に買ひとりて。もて見せものにせんとてかる。その事いまだ熟談せざりし程に。忽。猫に銜み去られて。これを追へども終に及ばず。主客望を失ひしといふ。當時同郡鹽澤の質屋義惣治。その略圖をつくりて。家嚴におくりぬ。かの金藏に義惣治が亡息の乳母の子なり。これよりその蛇をとりよして。よく見て圖したり。これに傳聞にまかせたる。そゞろことにはあらずとぞ



按ずるに。小蛇にその色皆黑し。初生兩三年のゝちさぬを脱(ヌケ)て。色の定まるものなり。件の雙頭蛇も。その黑きが本色にはあらぬなるべし

文政乙酉林鐘月氷室閑かるゝ日　　琴嶺しるを

○奥州南部癸卯の荒饑

古にいへらく。食者天下之本也。黄金萬貫不可療飢。白玉千箱何能救命。いでや今のおほ御代にしも。何事も足らぬことなく。凶年饑饉などいふことに。嘗てあらず。いにしへより凶年のためし少からねど。近き年のうゑたるに人々もよくしりてあれば。常に昔語にのみ聞きなしたる。此大江戸のことにこそあれ。遠郷僻地にいかばかりなりけん。只推してかるゝばかりなるを。この比。友人のもとより。その比。陸奥よりことのさまつぶらかにいひおこしたる。書狀壹通を示されき。彼あたりにことに甚しきよし。ほの聞えたれど。思ふにましたることのみにて。今のおほ御代に思ひくらべてに。いとおそろしく。魂も消ゆることゝちを。されば かけまくもかしこきことながら。國家盛德のおほんめぐみの有りがたきをも。更に思ひしらるゝわざなりけり。かつに時ならぬ氣候もあらば。此後もその意得べきことならんかしと思ふからに。錄して後葉に傳へまほしくこそ

文政乙酉六月朔　　山崎美成識

天明三年癸卯十一月十一日。奥州三戸郡南部内藏頭殿領分。八戸の惠比須屋善六より。本店江戸田所町かど。井筒屋三郎兵衛へ遣しゝ書狀左の如し

一筆啓上仕候甚寒御座候得共先以其御地御揃益御勇健可被成御座珍重奉存候拙者共無異罷在候乍慮外御安慮可被下候

一追々御承知可被遊當地當年凶作前代未聞御座候全體去冬寒中甚暖ゟ而如夏霜月比より氷候へ共寒ゟ入悉く解平生三四月頃の季候ゟ等しく夫より年明正月ゟ成少々寒く候得共例年よりと格別暖ゟ御座候二月三日迄不寒四月頃より卯辰風北風計ゟ而寒中如極寒雨降四月中ゟ雨不降日漸々七日御座候夫も薄曇東風ゟ而霧多晴天ハ一日も無御座候五月も同斷ゟ而朔日より降初五月中不降日漸々六日六月中も五日程も右之如く快晴ハ無之七月ゟハ四日八月ゟハ六日右之通不天氣ゟ候得共當春より麥作之景氣至而宜近年ゟ不覺作合ゟ相見え候間諸人甚大悦罷在候處苅頃ゟ成右之雨續候故熟し無存之外日數おくれ苅取候處一圓實成無御座諸民大困窮仕候然共稲作大豆小豆豆稗等と例年ゟ勝候作合宜相見え申候間秋作者十分ゟ可有之と素人の拙々共ハ不申及老農老圃年来の功者共當秋ハ豊作無相違由申居候故右之季候も左而已驚不申罷在候處次第ゟ不順ゟ相成春一度花咲候藤山吹之類など六七月頃山々春の如く花咲九輪草唐葵抔と春より霜月まで四度も五度も花咲夏菊十一月下旬まで盛り九月十月中旬ゟ竹の子生じ九月下旬ゟ蟬なきやまぢ種々の季候違ゟ御座候稲作と七月下旬ゟ至り候而も出穂無之たまさか穂出候而も葉の内へかくれ花もかゝり不申穂出ると百分一其外一圓ゟ穂出不申候右之次第ゟ御座候間一粒も實入無御座候大豆小豆粟稗蕎麥等ハ八月十三日之夜大ゟ霜降り是ゟ當り種なしゟ罷成誠ゟ古今未曽有之大凶作元来三四年以来打續半作ゟ不滿飢饉ゟ御座候處當夏麥不作其上秋作皆無ゟ御座候間諸穀物一向無之相場ハ市毎ゟ引上ケ當時相場左之通り

一 玄米	壹升ゟ付	貳百五拾文
一 こぬか	仝	五拾文
一 大豆	仝	百五拾文
一 搗粟	仝	貳百三拾文
一 蕎麥	仝	百廿文
一 豆腐粕	仝	廿五文
一 片春麥	仝	貳百文

一 フスマ 仝　六拾文
一 粗稗（アラヒエ） 仝　百文
一 両替六貫貳三百文

右之通何品ゝよらず。食物ゝ相成候類過分之直段ゝ御座候間食物在々ゝ無御座
蕨野花葛等を掘り食事仕候夫も幾千百人と申限りなき事ゝ御座候間さしもの大
山も忽ゝ掘盡し申候間葛蕨の粕あもそゝめなど申もの計食事ゝ仕候ゝ付右之毒
ゝ中り五體腫れ大小便不出して忽ゝ相果候者數知れ不申候當九月頃乞食共犬猫
猿等を食事ゝ仕候事承り候間肝を潰し候處去月頃より犬猫ハ不及申牛馬を打殺
食事ゝ仕候非人乞食等ゝ眼前犬猫をとらへ鹽も付ず喰候體誠ゝ鬼共可申哉おそ
ろしとも何とも可申樣無御座候夫ゝ付在々ハ押込強盗夥敷起り家内不殘おびゝ
置穀物ゝ不及申家財奪取其上家を燒立退候事數多く如此之事共中々書盡しがた
く候依之毎日捕手見分之役人衆隙なく相廻り候へども中々手ゝ合不申候

一只今 難澁の者共食事ゝて

一あも香煎（足いもちびの屑をたゝきさらし。粉を取申候かすをササメといふ細成るをアモといふよし）
一松皮香煎
一蕨採香煎
一犬たて香煎

右之類專食物ゝ仕候扨餓死之者唯今國中半分餘と相見え申候間來正月より三四
月迄之内如何樣ゝ成可申哉難計奉存候乞食非人往來如市そのありさま元來世並
宜敷砌伊勢熊野抔へ參詣仕候ゝ路用澤山所持仕候而も南部紫山子と出立ゝ御座
候まして況此節の體譬可申者無御座候顔色憔悴髮亂れ眼星のごとく色青くつか
れ衰へ頰骨高く口尖り手足骨如くからだ赤裸ゝ弦をまとひし有樣何と申候而も
更ゝ人間とハ見え不申候右故ゝ店々も相しめ戸部など指堅め居候戸口開置候へ
む非人共無體ゝ押入食事をあたへ不申内ハ更ゝ立退不申候故無據白晝ゝ門戸を
閉申事御座候者戸口より用事を達し志ゝ有之旅行抔仕候節ハ家内中立ゝたり世
話仕候へ共我勝ゝ前後を爭ひ泣さけび老弱の者の貰候食物を奪ひ取なさけび
し聲身ゝしみ胸ゝ答申候互ゝ食を奪ひ合溝へ落入半死半生之者數多呼喚ハ寒紅
蓮のくるしみ食を奪合打合つかみ合互ゝ疵を得候體修羅道の有樣目前ゝ御座候

火事に一夜に二ケ處三ケ處より出来焼死する者數多焦熱大焦熱の炎に入煙にむせび牛馬鶏犬之焼亡夥敷御座候世尊滅後二千八百年彌勒の出生迄に餘程間も有之様に承り候處今その期来候哉と心細く少も安心無御座候依て御上様にも何卒飢渇之者御救ひ被遊度思召候へ共近年打續不熟損毛に付御貯も悉く盡候故不被任思召御心遣被爲蒲候へとも更に其無甲斐殘念に被思召乞食非人へ御施行被遊候ても大海之一滴中々相居不申氣之毒千萬に奉存候

一捨牛馬に御制札第一之御法度に御座候へ共此節悉捨申候右之牛馬を乞食共引參り皮をむき鹿と申候而賣候を馬と存ながら價の下直に任せ馬肉を買ひ能鹿と申候直段平生のおつとせい抔の如く目方にて賣買致し鹿に不限何品にても食物に相成候品總て魚等の直段に御座候

一御城下端に近在遠在之子共を悉く海川へ投込申候者數不知右之様子承り候に哀之品に數々御座候へ共皆凶作之なをざに御座候其内しに様にも色々いさぎよきも未練なるも有又に名を惜み候者に猶又深林の中へゆき候てくびれ或に淵川へ行き石をいだき沈み申候に數多難計奉存候然共子被捨候者に澤山御座候得共親を捨候ものに于今不承候尤殊勝之事に御座候

一去月末より別て火事多く毎日毎夜五ケ所六ケ所より出来焼取に仕候或に五十人七十人徒黨を結び在々へ押込理不盡に働仕家財穀物奪取候由所々より毎日承り候扨々一日片時も安心無御座候

一此間も承り候得者定家卿の御短尺古筆目利所にて極め相添米五升に取替申候由大坂御陣に高名仕候正宗の刀を稗壹斗と取替申候よし箇様之時節なり餘に御推量可被下候

一仙台領。津輕領。盛岡御領共に皆無にて候内尤盛岡御領には少々も實入有之候哉有之候由是迚も種分んも無御座候由譬種之分御座候ても種々相成候様に實入無御座候然者生殘り明年仕付申候節右種物も無御座候て何を以仕付可申哉千萬無心元候

一古来稀成義に非人共犬猫牛馬を喰候に世に不思議に存候處死掛り候人々肉を切てなし格別うまき味なるよし申候言語同斷かゝる時節にあひ申候事いか成事に御座候哉と奉存候乍然箇様之儀不存候にゝ生涯佛も御經もうにの空にて至敬の

信心も有間敷奉存候處六道四生之有様凡俗之身ゝて目前ゝ見申候事こそ難有奉存候乍去知りぬる佛見ぬる花とも申候何卒無難ゝ明年をむかへ豐作を祈り申候外他事無御座候總體當地之事中々難盡筆紙實ゝ九牛が一毛ゝ御座候猶追便萬々可申上候恐惶謹言

卯十一月十一日

井筒屋　惠比須屋
三郎兵衛様　善六
平兵衛様
傳兵衛様

○身代り觀音補遺

四月の兎園會ゝ。輪池翁の錄し給へる身代觀音の一條あり。その年月。及人名等詳ならざるをもて。名ところゝ亂をべしと注し給へり。しかるゝ淺草寺志の中ゝ於て。その記事一篇を得たり。年月旅宿等ゝまるし給へど。その事少しく異同あり。參考ゝ備ふべしといふ

淺草寺志本文

美成記

明石屋甚藏刀難圖之額　額ゝ。文化四年丁卯四月大坂新町住人。明石屋甚藏法橋周南畫。本堂右の方ゝあり。文化三年大坂新町の遊女屋明石屋某といふもの。いまだ江戸を一見せざれゝ。同所のもの二人を打ちつれ。關東ゝ下りけるゝ。いづれも家まつしからねば。旅用の財をもてこゞく持ち出でんと欲すれども。長途の事なれば。盜難を恐れ。順禮の姿ゝやつし。ゝざと物などもたぬ體ゝなしけるゝ。伊勢の桑名のあたりより。あやしきものども。その貯あることを知りつらん。跡ゝなり先ゝなり。隙をうかゞふ體ゝて。つひゝ武州かな川の驛まで來たり。明石等がとまりたる宿の向ゝ。彼もの共とまる。明石屋ゝ宿のあるじゝ向ひて。ゝれら旅中よりあやしきものゝつけ廻され。千辛萬苦せしとかたる時ゝ。むかふのあるじ周章しく走り來り。此うちゝ順禮のかたちをなしたるものとまりつらん。かれらゝ大坂より子細有りて出奔せしものなり。ゝが内ゝやとせる人これをとらへんが爲。てる〳〵これまで下りたり。あすゝ定めて曉ゝ立つへし。其時ゝ待ちぶせして。からめとらんと思ふなり。その用意あれと告く。あるじゝをてゝ明石等が物がたりゝて。そ

の盗賊たることをおれるまより。向のあるじまも委しく是をかたり。何れ穩便まに計ふこそよけれとて。明石屋まとてかり幸三人の知音なければ。深川靈巖寺中何某院へ赦まて送りつくべしと相談し。向のあるじにかの賊をあざむき道まて捕へ給へとて。曉まに先たち。神奈川をたゝせたり。故まあかし屋てじめ二人のもの。難なく深川まいたりつきぬ。居ること數月まして。江戸をも略一見をわりぬれば。をでまに深川をうち立たんとをるまに。明石屋某常まに觀音を信じ。たび〳〵淺草寺まに詣でけるまに。御いとまをの心まや。今一度參らんと。二人の男をもをゝむるまに。彼等わ旅の用意まいとまなく。明石屋のみ詣でけるまに。いまだ吉原を見ざれば一見せんと立ちより。日本堤を東へかへらんとするまに。俄まに大雨ふり來て。衣服もおぼる程濡るゝまより。とある人の傘まに。おむし雨を凌きけるまに。かのもの云やう。汝も見おりあらん。我こそ桑名より跡先まなりて來つるものなり。神奈川まにてあざむかれたることの口惜しさ。今こそ思ひ知らせんをといふまに。明石わめぐり〳〵て。又かの賊まあふことも。過去の宿業と覺悟して。正まに淺草觀音を念じおけるまに。かの賊腰のものを拔きて。一打まに切りつける。きられてどうと倒るゝ迄わ。物覺えしが。その後を知らぬなりまけり。深川まに殘れる二人の男わ。明石屋がかへるをまてと。夜半を過ぐるまでさたなし。二人のものかねて明石屋がやぶさかなるうへまに。遊興などまわ。心おきをとこなれば。よし原へいたるとも。今迄かへらぬことぞわある。いかさま變事のいで來たるならん。いで尋ねむやといふ所まに。明石屋かへり來れり。いかまと問ふまに。物をもいわで倒れふしたり。人々打ちより。何ゆゑなるかと立ち驚く程まに。夜明けてあかし屋起さあがり。茫然たる體まて。こゝていづくぞ。我こそ日本堤まて賊まきられつるものをと。膚を見るまに。疵だまなし。たゞ懷まにしたる金のみうばゝれたり。まことまに大慈大悲の我身まに代りて。刃をうけ給ひしふしぎさよと。信心いやまし。三人ともまに事故なく歸國し。彼刀難まあひし時のありさままに。覺えたるまゝを畫まにおたゝめ。寶前へそなへたりとなん

㊀狐孫右衛門が事

過ぎし兎園のまとゐまわに。きつね。たぬきの事など諸君のおめし給ふ物から。予も亦聞きつる一條のものがたりあり。こゝ予が家まに年ごろ出入なせるもの。元わ下谷の長者町まに住みし萬屋義兵衛が母みねのてなしなり。みねが生國わ。下總相馬郡宮和田村のほとりまて。みねが父わ同國赤法華村の農民孫右衛門といふものなり。此孫右衛門より六世むかりの祖。孫右衛門（代々孫右衛門をもて稱を）とかいひしもの。江戸まに出でゝ歸るさ。何がしとかいふ原

原の名を詳ニせず をよざりし時。傍ニ若き女のひとりたゞずみしが呼びかけて。いへらく。ヲれハ下總なる云々の村ニゆくものなるが。ゆき暮れていとなやみぬ。願ふハ。和君もそのほとりニしおハさば。伴ひ給ハれかしと。他事もなく頼まれければ。孫右衛門止む事を得ず。うけがひて。その夜ハおのが家ニとゞめ。とかくして一兩日をふる程ニ。彼女のふるまひのまめ〳〵しければ。孫右衛門が母なるもの女ニ問ひていふ。我子いまだ妻あらず。ヲがよめとなりなんやといひしニ。女答へて。ヲれハ實ハ親兄弟もなく。たよるべき方なし。云々の村ハ些のゆかりあれば。尋ねゆかんと思ひしのみ。兎もかくも御心ニしたがひなんといひければ。母悅びてつひニめあハしぬ。いく程もなく男子をまうけ。そが五歳といふとき。又をのこ子をうめり。冬の事ニて。雉子ニ添乳して。おぼし煩ふまとろみしニ。五歳なりける男子があハたゝしくてゝごよ見給へ。かゝさまのかほがおとうか（狐の方言おとう）ニよく似たりといふニおどろき。彼女ハ忽身を翻してかけ出でぬ。みな〳〵打ち驚き。瞬（アハヅ）まとひて。そがあたりをおちもなくさがし求めしニ。向の小高き山ニ。狐の穴ありて。その穴の口ニ。小兒のもて遊びの茶釜と燒ものゝさせると。書きおきやうのもの一通あり。さてハ彌狐ニてありけりと。そしめてさとる物から。なほ哀慕ニ堪へざりけり。かくてその生れし男子成長して。また孫右衛門と稱し。老いて廻國の望ありとて。家を出でしが。何地ゆきけん。遂ニ歸らざりし。そのあたりのもの後々までも。狐のおぢいと呼びしとぞ。かのみねハ右さつねのおぢいが爲ニハ。ひまごニや當りぬべしといふ。みね堀が詰ニをさなきころ赤法華村ニゆきて。彼茶がまをきせるなど見し事あり。ヲなみも狐の血すぢニて侍りと。こまやかニかたりしを諳記して。こゝニあるしぬ。老堀がむかしがたりなれば。郡村の名さへ詳ならぬもあれば。遺漏なほ多かるべし。もし委しきことをしも得ば。後のまとゐニ補ふべし

乙酉六月朔　海棠庵主人識

○なら背　乞兒の賢　羅城門の札

上州眞壁郡野瓜（ノウリ）村ニての事なりし。寛延四年辛未（是年改元寶暦）四月中。百姓ども寄り合ひて。ならぜといふきのこ。大さ三四寸ばかりなるいと美事なるを取り來て。四五人より合ひ。吸物ニこしらへ。酒を飲まんとせし折。同村なる不二澤幸伯といふ醫師來ニければ。五人のもの申しけるハ。さて〳〵よき處へ御出候ものかな。今日ならたけといふきのこを採り候故。吸物ニして酒をたべ候なり。幸ひの折なれば。御酒ひとつきこしめされよといふニ。此

醫師もそいよき處へ參りあいしゝなどいふ程ゝ。吸物膳をもて出でければ。盞をとりて見るゝ。特ゝ美なるなら背を。四つ割ゝして出だしたり。幸伯これを吸いんと思ひしゝ。ゝじめ座ゝつく時。腰ゝさげたる印籠巾着を膝の脇ゝや居しきけん。忽ゝつしと音しゝけり。幸伯ひそかゝ驚きて。こゝ印籠をひしきしならんと思ひつゝ。とりて見るゝ。させることもなし。こゝいかゝと疑ひまどひて。やがてその巾着の紐をときつゝ。内を見るゝ。いぬる年兄道伯がくれたりし。三つ角の銀杏くだけたり。そのとき幸伯思ふやう。最ゝゝが兄のこの銀杏をくれしときゝいへらく。その理あるゝあらねども。三つ角なる銀杏ゝ。毒けしなりとて。むかしより人のいひ傳へたりよしや醫師なればとて。かゝる事ゝ俗ゝおたがひて。文盲見義ゝ用ふるぞよき。其方ゝも一つ懷中せよとくれたるを。この巾着ゝ入れおきしゝ。今推けしゝ。不審の事なり。且この吸物ゝ。わが好物といふゝもあらぢ。いかゝせましと思ふ心の。とかく心ゝかゝりしかば。吸ゝぬゝまをことあらじものをと。やうやくゝ思ひとりて。もろ人ゝうちむかひ。われらけふゝ。大切なる精進日ゝ候へば。御酒ばかりたまいらんとて。盃をうけて。少し飲みしが。遂ゝ療用ゝかこつけて。酒宴をかはゝ辭し去りぬ。おばらくして彼吸物をくらひし百姓の家より。幸伯がり人を走らして。只今見まひ給ゝれかしとて。急病用の使。推しつゝきて來ゝければ。幸伯ふたゝびゆきて。彼五人の中。亭主と外一人の即死したれば。療治居かぢ。殘る三人ゝ。その腹いつれも大鼓のごとくゝなれたれども。命運や竭きざりけん。からくして順快しけり。そのゝち。幸伯ゝ江戸へ出府せし折。かゝる事ゝや。不思議ゝ命を助かりしとて。朋友某ゝ物かたりしなり

延享五年戊辰（この年寛延と改元）春正月十三日の夜の明がたゝ。大坂四ツ橋ゝて。そのほとりなる非人金五拾兩拾ひしゝ。その包がみゝ宇津屋氏と書きつけてありしかば。限なくたづねて終ゝそのぬしゝ返しけり。金のぬし歡びて。謝物として金子少々とらせしかども。つゝ〳〵うけぢ。よりて又酒代として島目三貫文つかいしゝゝ。左の詩を相添へて。その島目を返しつゝ。非人ゝゆくへ知れぢとぞ

橘上路邊一二錢　往來終日幾千人
死生富貴任天命　昨日錦今日草莚

たからぢとおもへば袖ゝつゝみけりひらへておもき障りなりけり

又いづれのとしゝかありけん。豐後國（邪たづぬべし）地藏寺門前ゝ。行き倒れの尼あり。その住所をたづねしゝ。乞食のよしなれば知れぢ。その傍ゝ辭世あり

漸出人間界　忽今上昊天　即捨敝裘笠
夢醒寺門前

予これらの人の塵埃に埋もるゝを哀み。錄してもて人に示して。後に傳へんと欲するのみ

京都安井御門跡。諸寶物くさ〳〵の中。うを綠の大刀。羅生門へ渡邊綱がもてゆきしといふ禁札に。ときてめづらし。番の侍某を頼みて寫寫せし圖

幅貳尺貳寸　長壹尺貳寸
厚三寸
人王六十四代　圓融院御宇
寛延二巳年迄七百七十三年

右の板に。榎木にて文字消えて多くよめぞ。變の字の下にも。文字見ゆれども讀みがたし。撫つれば手に障るのみ。又蒙の字の下にも文字あれども。これ又よめぞ。蒙の下に者也とあるやうに見ゆ。手にて撫づれば少し障るのみ　右獲自古記錄中

文政八年乙酉六月朔

乾齋主人識

著作堂云。この禁札といふものに。ある人の摹刻せしを。予藏弆せり。友人美成にも所藏にありといふ。羅城門を羅生門と書きたるなど。すべて疑はしく信じがたき者なり

○新吉原京町壹丁目娼家若松屋の掟　所謂めてた若松これなり

右若松屋の掟に。毎朝神棚の前へ。新造をもじめ子供殘らず居並び。神棚に向ひ。皆同音に

おヲめェでェたう引　三べん

おありがたふ存じ奉りまを　これも三べん

此事言ひ終りて。見せのとき座敷にて。又三べんづゝいひて。夫より佛檀に向ひ居ならびて。又三べん。是をまゝひて。内證女房の前に出でゝ

おめてたふ引　これぞかりそめの如く三べん

女房これをきゝていへらく

めでたいとおつしやつた御供いたゝけと。おつしやつたと。これを三べんいふと。それより新造子供同音に

廊下できわざまをまい　つまみぐひいたしまをまい　ね小べんいたしますまい

お客人を大切にいたしませう　にるいことをいたしますまい
など。その外此類の箇條をならべ立てゝいふ。これを聞きて
女房
一々申しつかつた通り。まちがへるな。旦那さまがおゆからおあがんなさつたら。御祝
儀に出よ。にるい事をあたらば。友ぎん味をして申し上うぞ。一々申しつかつた通り。ま
ちがへるな
子供新造又同音に
火の用心を大切にいたします　三べん
お客様を大切に仕りまを　同
これを聞きゝて女房
火の用心〳〵大切に〳〵。上々様方へ御奉公〳〵
御客人様大切に〳〵にいらが親を孝行にして。やつたかいりの奉公だぞ。よろしい。い
つて御供をいたゞけ
新造子供同音に

おありがたうぞんじ奉りまを
女房いふ
まちがひると捧だぞ○たて
是よりみな〳〵次へたちて。朝飯をくふなり
毎夜引け過ぎ。女房の前へ。又新造子供殘らず居並ぶ
女房いふ
火の用心大切に〳〵。上々様方へ御奉公〳〵
お客人さまに大切〳〵。にいらが親を孝行にしてやつたかいりの奉公だぞ。諸神様。諸
佛様〳〵〳〵上々様〳〵〳〵。お慈悲〳〵〳〵ぞよろしい。いつて休息〳〵〳〵
子供新造一同に
おありがたふ存じ奉ります。おやをみなされませというて。皆々臥所にいるといへり
此毎日の唱事。正月元日に。おきよく女郎をてじめ。新造。禿。男女出入の者に至るまで。殘
らずならび居て。かくの如くいふとぞ
右女房のことゞの中に。親を孝行にしてやつたかいりの奉公といふ事。解しがたき故。か

の家のものゝ問ひしゝ。それゝ銘々おやの爲ゝ身をたづめし上。折々其おやども来りて。くらし方難澁のよしゝて。金子借用の願を出だし少しゝても借りうけて。先當時々々の困窮をも凌くゝ。是奉公をして居る故ゝ。親の貧苦をも救へば。自然と孝行ゝあたるべし。その孝行をさせて。やるゝ誰がかげぞ。是おやかたのかげならずや。其かゝりの奉公なれば。大切ゝつとめぞばなるまいといふ。無理ゝ理屈をつけたるいましめことばなりとかたりき

○突くといふ沙汰

文化三丙寅年正月の末より。夜分往来の盲人。或ゝ乞食ゐざりの類を。鎗ゝて突き殺す事むやりて。月の中比より。此事甚しく。三月のてじめ比より。少し此沙汰やみたるゝ。同四日芝車町より出火して。淺草たんぞまてやける。此大火の後。又々鎗の沙汰有りて。日暮過よりゝ。人々用心して。他出する者稀なり。夜分ゝいよ〳〵往来淋しければ。ゐる者ゝ時を得たるゝや。猶所々ゝて突く事多かりけり。されども大かたゝ盲人。或ゝ至極下賤の者ぞかりゝて。よき人つかれしといふことなし。盜賊の所爲かと思へば。さのみ金銀を目がくるゝもあらぞ。いかゝもあやしき事ゝて。おほやけよりも。いと嚴しく仰渡され。町中ゝても。火事後猶更夜番をなして。たゆみなく心をつくをといへども。さらゝ其ゐる者しれざりけるが。四谷天王の社内地形の普請場へ。いとあやしき侍来りて。別當所の座敷ゝ有りし頭巾と。衣二品をぬすみて去らんとす。折しも石工。或ゝ鷲のものなどあまた居合せたれば。忽とらへられ。盜みたる品を取りかへされ。からきめゝあひて逃げうせたりしゝ。そのゝち鮫が橋のおかてふものゝ新へられて。遂ゝ召し捕れ。きびしく御吟味ありけるゝ。此者も夜分人を突くゐるものなりければ。もみやかゝ其罪きゝまり。江戸中引廻しの上品川鈴が森ゝて。獄門ゝぞ行ゝれける。是四月十八日ゝ召しとられ。同廿三日ゝ。かく行ゝれたれば。この後ゝさる事あらじと。世上安堵の思をなしたるゝ。てや其廿三日の夜。淺草西福寺門前ゝて。又候つかれたるものあり。牛込改代町龍泉橋ゝて。十八歳ゝなる盲人。出刀庖丁ゝて突き殺されたり。これゝ五月二日の夜の事なり。同夜同所神樂坂上寺町ゝても。つかれたるものあり。いかなる事ゝて。何者のなすゝざゝや。猶々おほやけよりも。さま〳〵鋼出ざされし事共あれど。とゝかくゝゝまれがたし。其後自然と此沙汰やみたるゝ。又八月の末より春中のごとく。夜分非人或ゝ盲人を突く事。所々ゝあり。かへを〳〵もいぶかしき事なり

此頃甲州にてあやしき法を行ひて。婦女子の臍を取りて。藥に用ふるよし風說あり

水銀蠟。當春以來賣買いたし候哉。有無之返答書差出候樣。名主より申し渡され。飯田町にても町内の藥種や一同賣買不致旨。連印いたし。返答書を差出だしゝ事あり。後に聞くに。水銀蠟を妖術に用ひ。又は鎗にて突く事にも用ふるよし。依之右の御尋ありなんど種々の說々あり

同年十月の中比より。少し此沙汰やむ。一體春中より。月の夜にしづかにて。暗夜に此事多くありける故。其比の落頌に

春の夜のやみにあぶなし鎗梅の。わきこそみえね人につかるゝ

月よしといへど月にはつかぬなり。闇といいへどやまぬ鎗沙汰

やみにつき月夜につきの出でざるに。やりてなしなるうき世なりけり

これは扨おき。當酉五月廿六日の夜。農後節淨瑠理太夫清元延壽齋芝居よりかへるさ。乘物町にて。何者ともしらぬ。延壽齋の脇腹を一突つきて。いづくともなく逃げうせたり。延壽に呼ばといひたるに。挑灯をもちし男驚き。こはいかにと立ちよりたれば。てやく駕籠を雇ひくれよといひて。二町程あゆみて。駕籠に乘り。本石町鐘撞堂新道なる我家へ來りしと聞きて。其まゝ息たえたりしとなん。をしむべし〳〵

此延壽齋の一條は。前編の因にあるし出だせり

何ものゝよめるにか

いつきならつかるゝこともあるべきにこは節生の因えん壽齋

又發句に

五月やみあといふ聲や聞きをさめ

文政八乙酉夏六朔

文寶亭記

○松前貞女

寛政の末の比。若狹國の人。松前にゆかんとて。敦賀より船に乘りたり。そのふねの内に。さた過ぎたる女一人あり。いづくよりいづくへゆくにかと問ひたれば。京より箱館の志らとりに歸るなりとこたふ。いかなるゆかりにて。京に在りしかとゝへば。ことなるゆかりもあらぬ。みづからはふるさとに在りし時。人につれそひしかど。ゆゑありてにかれやもめとなりぬ。おやはふたゝび人にみえよといはれしかど。かたくいなみてのがれたり。みやこの見まくほりせしかば。ひとのまうのぼるとて。船にて能登國につきぬ。さて京

このとき芽屋町市村座狂言曽我祭浄瑠理名題まつたいのの職三人色ちがひ地走地走地走地走りにかよひあてゝ見るといふも。名聲自性ありと。彼に人のいひしとぞ。

延壽齋所に。日蓮宗深川淨心寺にあり。戒名妙院背音日延信士○是より先。延壽齋剃髮改名の剃髮物に。剃髮の剃を刺と書きたり。是も前兆あるべし

ゝいりてあき人の家より。つふねとなりて。一とせ侍りしかど。おもふほどゝ都の手ぶりも志られざりしかば。高倉さまゝ參りて。二とせつとめ。さて故郷ゝかへり侍るなりといふ。それがつくりしからうたとて。その人うつし傳へたり

春盡早回一葉船　薫風拂浪向胡天
誰憐去程三千里　旅恨悠々碧海煙

又その國のことばゝてよめるうた

春くればちようかいゝ心ひるかして霞のうちゝちつふみえけり
ちようかいゝ已。ひるかしてゝ慨意。ちつふゝ小舟をいふ
あぶらさけやくさけまでもいしやませゝ。ひるかてつひもなゝかゝせん
あぶらさけゝ美酒。やくさけゝえぞの。ゝごりさけ。いしやませゝ。無といふこと。ひるかゝ嬉しきといふこと。てつひゝ肴といふことゝいふ

○北里烈女

天明の比。三緑山の所化ゝ。靈瞬といふ僧あり。志たしき友ゝいざなゝれて。よし原ゝゆき。玉屋の琴柱といふたゝれめゝあひぬ。此僧容顔美麗なりしかば。琴柱それゝめでしゝや。志む〳〵といせ給へといふ。僧もとよりあるまじきことゝゝ思ひつれど。愛欲の情おさへがたく。ぬれぬさきこそとうつゝなくなりてかよふほどゝ。琴柱ゝ身の上をとゝれて。ありのまゝゝかたりきかせたり。さらむ末々ゝたかき位ゝのぼり。よき寺をもたせ給ふべきやとゝふ。凡ゝがともがら學文をそげみぬれむ。こゝかしこゝうつりすゝみて。幸あれば大僧正ゝもいたらるゝなり。志かしながらこがね乏しくてゝ。すみやかゝすゝみがたしといひしを。こまかゝ聞きゐたりしが。そのゝちとひし時。琴柱いふやう。えゝしあればこそ。君が志たしみをうけまゐらせたり。これもすくせのことなるべしとて。一包のこがねを出だして。あたへ。これをもとゝして。かならむなりのほらせ給へ。こよひをかきりとして。こゝゝも來たり給ふな。あだし女ゝも近つき給ふな。みづからゝちかきうちゝ身まかり侍りて。君が身をまもり侍るべし。必ゝもれ給ふなといふ。僧も初ゝおもひよらざることゝて。いなみけれども。そのこゝろざしのまめなるゝめでゝ。うけひきぬ。かくて日あらぢして琴柱みづから身ゝきをつけてぞまかりぬ。心のみだれしゝやと聞きて。かつゝおとろき。かつゝかなしみ。法號をつけて。日々ゝ回向して有りけるが。一とせむかり過ぎゝしかむ。去ものゝうとき習ゝて。又友ゝすゝめられて。品川のあそびのもとゝゆ

さ。とかくして雲雨のちぎりをもよほす比。琴柱が在りし姿あらはれて。いかでちかひしことを忘れ玉ひしかと。いさむるかほゞせ恨骨ゝとほりしおもざしなりけれど。おそろしく覺えてゝげかへりぬ。日ごとゝゑかうする事ゝをこたらざれど。年月をへて。又あそびのもとゝゆくこと有りしが。かの幽靈いでゝいさむる事。前のことくなりしかど。それよりまた〳〵不犯の身となり。勇猛精進なりしかど。年をおひて進みて。京の智恩院ゝなりて。聖譽大僧正とぞ聞えける

○古墳女鬼

江戸松島町家主吉兵衛悴
五郎吉事
幸次郎
酉廿歳

右之者。拾ヶ年以前文化元酉年春中。日本橋通り貳丁目善兵衛店忠兵衛方へ年季奉公ゝ差遣。是迄奉公相勤罷在候。然る處。一昨年春中と覺ゆ。堺町勘三郎芝居見物ゝ罷越候處。神田邊みよと申を。十六七歳位の女。桟敷ゝ罷在候處。住所も不存者ゝ付。芝居打出候之砌。相別れ申候。其後同年秋中と覺ゆ。又候勘三郎芝居へ見物ゝ參候處。右みよ義も致見物罷在候間。猶又其桟敷へ這入合せ。其節も同樣之義ゝ而相別れ。其後一向出合も不致。相過申候。然處。右幸次郎義當八月頃より濕刀瘡相煩氣分あしく罷在候處。先月廿六日夜八時頃と覺ゆ。右みよ義幸次郎臥居候枕元へ參り。咄致候と夢の樣ゝも存候處。翌二十七日より同月廿九日夜。又々右みよ參候ゝ付。宿へ付添可參とかねて支度いたし置。宿元を小用可致體ゝ而出。往來等ゝ不辨同道致罷越候處。淺草今戸町無何心寺之垣を越え。墓場へ參り。石塔へ水手向候處。右みよ義見失ひ候ゝ付。不計心付宿元へ可相歸と存候處。右體之義故證據ゝ可致と。同寺垣ゝいたし有之候塔婆壹本引拔持歸り候途中。淺草田町ゝ而夜明け。煮賣酒屋へ立寄り酒膾。猶堺町三味線屋へ隣の蒲鉾屋ゝて。かまぼこ二枚買ひ求め。主人方へ罷歸り申候。尤途中等ゝ而。幸次郎みよと咄抔いたし候へ共。みよ義諸答等ゝ不仕候由ゝ御座候

右之通風聞有之候ゝ付。當人呼寄せ承糺候處。前書之趣申候ゝ付。奉申上候以上

松島町
名主五郎兵衛

文化十年九月

これ町奉行所へ斷狀のうつしなり

此後。幸次郎事とかく心氣不定故。親元へかへしけるよし。幸次郎主人忠兵衛妻の姊夫。元飯田町醫師本田雄仙の話なり

○金靈并鰹舟の事

今茲乙酉春三月。房州朝夷郡大井村五反目の丈助といふ百姓。朝五時比苗代を見んとて立ち出でて。こゝかしこ見過し居たるをり。青天ゟ雷のごとくひゞきて。五六間後の方へ落ちたる樣なれば。丈助驚きながらも。こやくその處ゟ至り見れば。穴あり。手拭を出だしてその穴をふさぎ。おさへて廻りを堀りかゝり見れば。五寸程埋まりて光明赫奕たる鷄卵の如き玉を得たり。これ所謂かね玉なるべしとて。いそぎ我家へ持ち歸り。けふこから ぞもかゝる名玉を得たりとて。人々ゟ見せければ。是やまさしくかね玉ならん。追々富貴ゟなられんとて。見る人これを羨みける。丈助もよろこびて。いよ〳〵秘藏しけるとぞ。此丈助ハ。日比正直なる故。かゝるめぐみもありしならんと。きのふ房州より來て。ゟが菴を訪ひける堂村の喜兵衛といふ人の物がたりしまゝ。けふの兎園ゟしるし出だすゟなん

此かね玉の事ゟつきてハ。いさゝか考もあれど。けふのまとゐのあるじなれば。ことしけくてもうしつ。猶後ゟあるをべし

ことし乙酉の夏ほど鰹の獵のありしこと。むかしより多くあらざる事なりとて。右の房州の客の語るをきくゟ

東房州　小みなと　内浦　あまつ　ゝま荻　磯村　浪太（ナフト）　天面（アマツラ）　大ま崎　よし浦

西房州　白子　千倉（チクラ）　平館　忽戸　平磯　千田　川口　大川　白有浦　野島　洲崎

館山　那古　多田羅

右ハ獵船の出づる所の地名あらましをしらす。壹ケ處ゟて釣溜（鰹の獵船を釣りためといふ）十五艘。或ハ廿艘むかりづゝも出づる中ゟも。あまつハ二百艘も出づるよし。凡一艘ゟて鰹千五百本二千本位づゝ。六月六日比より同十四五日比ハ。毎日打續き夥敷獵のありし事めつらしとてかたりしまゝ。筆のついでゟあるしおきぬ

文政八乙酉初秋朔　　文寶堂誌

○由利郡神靈

羽州秋田（佐竹侯封内）ゟ。大平山といふあり。鎮坐の神を三吉大明神。三助大明神と號す。又土俗三助お村。あるハ福の神など唱へ。月の八日廿一日を緣日とす。しかるゟ同州由利郡知島

領生駒家封邑下村づゝ大琴村の農民惣十郎といふものあり。その性質朴なるが。年ごろかの秋田なる三吉明神を信仰しけるゆ。いぬる文政七年四月七日の夜。あやしき夢を見たり。たとへば一つの山上ゆ神人ゐまし。その側ゆ人ありて神人ゆ向ひて。日比信仰なし奉るものゝ。是ゆて候とまうす。その時神人のいゝく。汝ゆさいゝひを與ん。いよ〳〵怠ることなかれと告げ給ふと見て驚きさめぬ。惣十郎奇異の思をなし。朝とく起きて。その妻ゆかくもがたり。みやしろを建てゝ祭りなんといへば。妻答へて。さることゝ世間の聞えもいかゞあらん。心ゆて仰き尊み給へといふ。その夜又妻が見し夢。夫ゆつゆ違ゝざりければ。始めてその靈夢なるを語り。相共ゆ謀りて。神祠を營まんとするゆ。夢中ゆ見し處。惣十郎が本家なる大琴村本庄亀田矢島の界の農民某が家の後の山ゆ彷彿たりとて。先つ試ゆ餅をつきて供しけるゆ。ゐるしありて牙のあとめきたるもの付きてあり。されば此處こそ神慮ゆ叶ひつれとて。いちもやくみやしろを作りもじめしゆ。不思議なるゝ。その日よりもやゝ詣來る人あり。全く秋田なる大平山より。神の移り給ふなるべし。かくて靈驗日々ゆいちじるく。響の物ゆ應ずる如し。矢島ゆて女を攜へ走りしものを立願せしゆ。おのれとかへり來つ。或ゝ腰の立たざるもの。人ゆ扶けられて詣でけるゆ。歸りゆゝ獨歩行くやうゆなり。又某といふもの。立願の事ありて。成就せば餅を備へまゐらせんといひながら。その事成就したれども。得備へざりければ。忽それが當代を一夜ゆ流されて跡なくなりし。その祟も亦速なれば。一人としておそれ尊まぬものもなし。近邊ゝさらなり。諸國より日毎ゆ三四百人つゝ參詣群集して。さしもの邊鄙市をなし。彼惣十郎ゝ別當して。自富を得ることと大かたならずなん。右一條の話ゝ當六月中旬生駒家矢島領主の臣ゆ。助川龍造ゆ見も聞きもしつるなり。浮きたることゆゝあらずとて。同人のかたりしまゝを志るをゆこそ

○土中出現黄金佛

今茲文政八年乙酉の春。熊野本宮社川除の堤を築かんとて。社境内の川上なる大黒島といふ岩山より。大石を引き出だす。爰ゆあやしき事あり。石を出だを雇夫等砂を穿ち。磐石を割るのいとま。暫く勞を休めんと。側ゆよりて憩ひ居れば。巖上の土石おのづから崩れ落ちて止まず。工人各その業をなを間ゑ。土石崩るゝことなし。憩へば又崩る。かゝることゝ數日ゆして。その春彌生の廿日より。あまたの烏この處へ飛び來りて。人をおそれず譬ゝ腐肉ゆ蠅の集ふが如し。かくてこの日より次の日まで。銀器の缺けたりと見ゆるものを數片掘り出だしけり。されば又廿二日ゆ至りてゝ。烏の聚まることいよ〳〵多く。空中ゆ

飛び翔りて。翅をたゝき。嘶を鳴らし。殆。人の頭上を掠まんとするの勢なれば。心よわき雇夫等わ。逃げ走りて。これを避け。壯々なるもの共わ怪み疑ひながら。そがまゝ土石を穿つに。その日も既に亭午になりしころ。土中より一つの瓷顯れ出でけり。そのさま今の世に見なれざる器なれば。人みなうちよりて。これを見るに。その瓷に彫れる文字あり。左の如し

熊野山如法經銘文

大瓶若一部六百卷

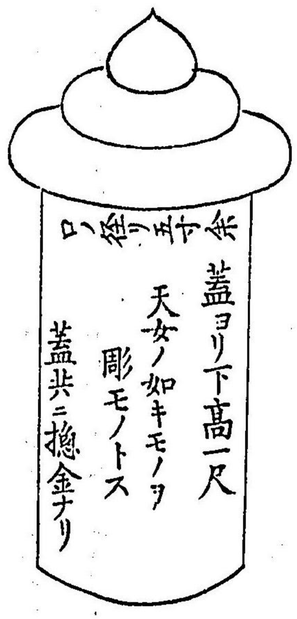
白瓷箱十二合

箱別五十卷

保安二年歳次辛丑十月日

願主沙門良勝

檀越散位秦親任



この瓷中に黄金にて造れる圓龕一箇あり。その圖如下

此金龕の蓋をひらき見るに。内に閻浮檀金の阿彌陀佛の尊像一軀を藏む。御長け七寸。愛憐接取の慈眼あざやかに。瑞嚴殊勝の妖相尊くをかまれ。諸人奇異の思をなせり。先に得たる所の白銀の器とおぼしきものわ。破れ損じて形全からぬも。取り集めて重さを量るに。八百目に餘れり。此度紀藩より修理の宰として。爰に來りし吏。石井傳左衛門といふ人。是を得て藩主に奉り。命を請わんと秘驚して。その月の廿四日に。本宮を發して府にかへれり

右一説わ。藩にちなみある一友人に得たり

文政乙酉孟秋朔　　海棠菴思亮記

解按ずるに。保安二年わ鳥羽院の御宇にて。藤原忠通公關白の時の事なり。文政八年乙酉まで。七百零七年をへたり。當時秦氏の人に高位のもの聞えぞ。散位の事わさまゝ〳〵の説あれども。位の高卑に拘らぞ。冠位有りて官職なきを散位といふと。予わ思ひをり。猶職事家にたつぬべし。秦氏わ忌寸の姓にて。秦始皇の後なるよし。姓氏録諸蕃の譜に見えたり。親任といふ名につきて思ふに。土佐の長曽我部などの上祖にわあらぬと。されば慥なる證を得ざれば。何ともいひがたし。當時熊野別當わいきほひあるものゝよ

し聞ゆ。熊野別當堪増が爲義の壻となりしに。これより少し後の事なり。良勝にいづくの沙門ぞや。これも熊野の別當となほ考ふべし（著作堂主人追記）

○附錄蛇祟

文政八年乙酉四月廿七八日の頃。柳川侯淺草島越の中屋敷に住める火消中間千次郎。程五郎といふもの。田所庭中田字亭といへる茶屋のほとりにて。蛇の交接せるを見つけて。さんざに打擲し。終に殺して。門前の溝へ捨てけり。（此時まで。蛇に死しても猶縄の如くによれて。いまれどと云ふ）かくて右千次郎。五月八日上野御成の節。上屋敷へ詰め。その歸より病氣づきて。甚苦みければ。彼程五郎に蛇のたゝりにやと察し。戸田川の邊に羽黒山といへるあるよし。（羽州羽黒の出張おどにや）右にいたり堂邊の板の虚（ウロ）中の水を乞ねんとて。既に汲まんとしたるとき。釣瓶きれて落ちければ。いかゞせんとあるてしをり。寺僧立出で汝が祈る病人快氣すべからぎと示しぬれど。兎にも角にも。水をば乞ひ奉らんとて。やうやくに得てかへり。千次郎に與へけれども。遂に五月十五日にみまかりぬ。（此千次郎に。川越在の産にてありしに。その死せる時。両手の指にて豆を持へて果てしとぞ）淺草安樂院といへる葬りしとぞ。扨程五郎に。その月廿日頃より肩より腹へかけて痛むと覺えしが始めにて。日を追うて熱氣つよく。蛇の事のみ口ばしりて。狂ひ廻りしが。遂に走り出でゝ。久保田侯の中間部屋に至り。それより淺草阿部川町龍德院（程五郎の菩提所也）といへるにゆきて。和尚に願ひけるに。おのれ頭に蛇とりつき。惱苦に堪へぎ。あはれ御弟子となされ。髮を剃り給はれかしといひけるを。和尚に發狂にやあらむとて。程五郎が父淺草六軒町の組の頭取角十郎といへるもの。これも檀家の事なれば。則呼びよせて問ひしを告げければ。やがて角十郎方へ引きとり（程五郎に是まで不行跡にて。家出してありしとぞ）さまざに療用しつゝ。本所邊なる修驗者（名を詳にせぜ）をたのみしに。右の修驗いまだ何とも告げざりしに。修驗に彼の蛇のたゝりの事。羽黒山に走りし事までとき示し。羽黒に神體白蛇におはするに。却りてあしき事をせしといひけるとぞ。かくて程五郎が病苦日々におもりて。六月朔日にむなしくなりしかば。をなじ龍德院に葬りけり。初かの兩人が蛇を殺しけるとき。衆吉といふもの手傳しに。兩人が死せしよしを聞くと。やがて病氣づきてこれも危かりきを。漸平愈して。定火消の人足部屋にをるといふ。此物がたりに。柳川侯の中間部屋頭のものより。親しく聞きし人より傳へて記したるなり。凡物みな暗疑より病を生ずること。晉の樂廣が客の杯中の弓影を蛇なりとあやまり見て。病みし如きためし少からねど。抑この柳川藩のものどもの。三人まで鬼邪にをかされしも。亦一奇談なり

○勝敗不由多少之談

昔晉の智伯。韓魏の三家と志を合せ。趙襄子の軍を晉陽にて水攻になしゝ時。趙城の侵さゝるもの。纔に三版なりしに。襄子終に降る意なく。返りて水を智伯が陣に灌きしかば。智伯大に敗北せり。又西楚の項籍に。精兵若干にて。漢高祖の五十六萬人を敗り。漢の韓信に壹萬餘人の兵を帥ゐ。ちかも水を背にして陣をとり。趙の陳除が二萬人を暫時に打ち敗りぬ。我朝にても。判官爲義十八歳の時。終に十七騎にて南部法師二千餘人を栗柄山にて追ひ散らし。楠正成に百六十人にて。千剱屋に籠城し。關東の廿萬餘騎と二年の合戰あり。且落城にせざりしなり。大神君姉川の御戰。御勢五千にて朝倉の勢壹萬五千の兵を敗り給ふ。信長に三萬五千にて。淺井が三千の敵に突き立てられ。長篠の役に與平九八郎に。至りて小勢を以て。長篠城に籠城し。勝頼貳萬を帥ゐて攻めたれ共。終に拔けざりき。これをもてこれを觀れば。軍の勝敗に。兵の多少にあらぜして。人心の誠と。不誠とにあるなり。曾軍の勝敗のみにあらぜ。物皆然り。大神君竹千代君と申し奉りし時。五月菖蒲擊を御覽ありしに。その打合雙方東西にわかれ。いまだ戰始めざりしとき。竹千代君仰せられけるに。大敵と小敵と戰ふ。小數の方勝つべしと宣ひしに。果たして小數のかた勝たれけり。近頃に。主君下莊の門前に甚しき鬪諍あり。大數の方に。長竿を持出で。且石瓦を頻に礫にうちけり。小數のかたに徐々と並居たりしが。その中一人剛勇の男短刀を拔きて。大敵の中に飛び入り。大に働きければ。大數の者ども。大に驚き。右往左往に馳せ散りけり。是に親しく觀る所なり。しかれば則物の勝敗に。人心の誠と不誠にありて。人數の多少にあらざるなり

○腐儒唐樣を好みし事

或西方の大名に仕へて。三十人扶持を給はりし儒者あり。その名に忘れたり。この儒者何事も。孔子のごとくせざれば。儒道にあらずとて。沽酒市脯に食はぜとあれば。酒もとが方にてかもし。經節も手まへにて乾させ。周尺にて諸物を拵へけり。家老の人意見せしめて。いかに唐樣を好めばとて。竊に傳へ聞くに。大小共に兩刀の劍を用ひらるゝよし。日本の劍術に。この國風に隨ふこそよけれ。且御邊儒をもつて仕ふとも。又是武門の奉公ならぜや。縱文武周公孔子の世か。周なればとて。一切の事を周の制にて濟さんと欲をとも。官途品級の次第。職掌の體などに。周禮にても考へらるべし。もろこしにてすら太古の事に。今

日の用に當て考へとられざることあらんといふ。彼儒者答へて。好意疑に忝し。去かしながら。周の代の事考へ得られざれば。漢の世の制を用ふる故。さしつかふることなしといふ。家老聞きてあざ笑ひ。智は非を疾くに足るといへるは。則御邊の事なるべし。今五穀を量らんに。周の制は考へがたし。漢の升をもて考ふれば。日本今の一合は。即漢の一升なり。漢書に牛一疋に三拾六斛を駄すると見えしも。日本の三石六斗に當れり。御邊の月俸三十口なれば。これまて一ケ月に四石五斗づゝわたしゝは。一ケ年に五十四石の高なれども。周漢の制を好める故。扶持方も漢の升目を以て。壹人扶持は壹升五合なり。これを三十合にすれば。四斗五升なり。かくのごとくにして是たせば。一ケ年に五石四斗の高となる。十二ケ月の内。大小のたがひはあれども。當月より四石五斗を四斗五升にして是たを様に。藏方に申し渡すべし。かゝれば御邊も漢法にて。扶持方をうけ取られ滿足なるべしといひければ。儒者大に驚きて。その儀は御免候へかし。誤り入り候とて。漢法をやめしとかや。（評に云。この事は先輩既に物にしるせしもあれば。作り設くことなるべし）をべて手前勝手にあらぬ事は。日本の古格に任せ。勝手の事は異國の風をまねんとせしは笑ふべし。わが知れる人。親の死せしとき。三年の喪を勤むるとて。喪服様の物を製し。唐流は精をなしとて。喪中に酒を飲み。肉を食ひ。自如として平日のごとし。殊にしらを禮の本文に。疏食水飲菜果を不食とあり。菜果すら食はざりし喪に。酒を飲み肉をくらふは何事ぞ。是等の事ども世に多し。抱腹云々

乙酉七月朔

○養和帝遺事附兩蛤竹筒

文治元年源義經。平家の一族を壇浦に鏖にせし時。安德天皇は二位殿の懷さ奉り。神璽寶劍を身にしたがへ。海底に沈みまし〳〵けるよし。史にも記し。人口にも云ひ傳ふれど。或は阿波に逃れまし〳〵けるとも。又は日向にかくれ住み給ふなど。異說まち〳〵ていれを是とも定めがたし。去かるに肥前國に。川上といふ所あり。そこに水上山公主萬壽寺といふ寺院あり。開山を神子和尚といふ。これ則安德天皇にて是たらせ給ふとなり。寺傳に云。昔安德天皇西海にて戰ひ敗れしとき。事を入水に托し。二位尼及郎等五六輩とも

に。此川上に逃れ來り。かくれ住み給へるか

開田耕筆に。緒方三郎は無二の平家の方人なりしに。俄に心がはりせしといふは。實は平家の勢ひとてもさゝうべきにあらぬを知りて。帝をとじめ奉り。一門の去かるべき人々を。この五箇山に隱せるが爲の謀なり。その後つひに戰まけて。入水せるは。みなそ

のさまを真似たる人なりといへり。この說によるときは。帝をてじめ奉り。この五箇山に來り。後に寺を川上に建たるならんと

帝御年二十になり給ふ時。建久八年出家志給ひ。入宋まし〳〵て。學問なるの後。歸り給ひ。此所に一寺を建て。萬壽寺といふ。寺内に寶劍堂といふもあり。こゝに寶劍を安置す。箱の長サ一尺五六寸計もありとぞ。古來より開くことなしといへり。これは三種の神器の一つにやさらばぞ帝の帶ひ給ふものなるべし 寺の邊に。二位尼村といふ所もあり。かくて文政三年月日詳ならず神子和尚の六百年忌の法會を萬壽寺にて執行せしに。

一說に。帝實は女帝にて。此に隱れ給ひし時。山伏ありて帝に配して子をうみ給ふ。神子和尚是なりといひ。又扶桑僧寶傳に。神子禪師諱榮尊。號神子。法嗣聖一國師鎭西人判官康賴平公子なりとあれど。いづれもいへる處いたく謬れり。その由下にいふべし

肥後國五家の庄より。平家の末裔の人々。おの〳〵系圖を携へ。この五家の人々の先祖は。帝につき隨ひ來りし人なり。その先祖の名。かねて閉けるをもて末に記す 且金子廿五兩を奉納し。主人の年忌なれば。備へ奉るとて。來りて法會の中も。敬ひ慎む。事果てかへりしとぞ。此一條は浮きたる事にあらず。今茲三月廿日。一友人森某ぬし柳川侯の藩士 を訪ひたるに。町野氏同藩の士 來りていへるは。去年かの川上あたりの温泉に浴したるころ。一夕萬壽寺に宿りて。住僧と語らゝ中に。をとゝしの事にて候。かゝる事ありしとて。上件のことゞもかたり出でたりと。親しく予にかたられけるを。記したるなり。文政三年

六百年忌なれば。承久二年の崩御なり。文治元年壇浦敗軍の時。帝寶算八歲なれば崩御給ふ御年。四十三歲にてましませしなり。かゝれば帝の御子といふ事は。もとよりひがことなり。評云 帝もし御年十五 六歲にて御子をまうけ給ひ。その子たやく出家せば。承久二年遷化の時。廿七八歲なれば。さのみ年紀のたがひあるにしもあらぬ。且神子といふも巫女の俗稱。公主といふも秦漢のとき。帝姬の稱なれば。一說に女帝なりしといふこと。公主萬壽寺神子和尚の名號に據なきにあらぬ。又神子和尚を康賴が子なりといふを。寺說によれば謬に似たれども。畢竟寺說とても證文なき事なれば。いづれを虛。いづれを實と定めがたかるべし。譬へば。藤澤寺なる小栗十士の墓。佐野の天明に常世を祭りて。大平權現といふがごとき古跡多ければ。萬壽寺の事もうけられぬ說なれ共。異聞なり。かくめづらしきことを聞くも。兎園の一得にて。交遊の忠告とやいてん。歡ぶべしとぞ

さて肥後國に。當時五軒ありしをもて。五家の庄と呼べり。その人々に帝に隨ひ奉りて。かくれすみし處にて。ちか呼べるなり。その五家の先祖の名代に。從四位下少將平知時。（知盛の男）左中將清經。（小松の男）上總介忠清。（關八州の侍大將）越中次郎盛次。（平家四士之家）菊地次郎高直。（外族侍）瀬尾十郎兼高。（兼安の男）今この庄の頭。知盛の男より廿九代の孫。權少輔平時賢といふとぞ

右一條にあがれる世の事にして。且もとかくれましましゝことなれば。その實否に今よりいかにとも定め難けれども。萬壽寺の僧が口づからの物語とあれば。聊拙案を參考して異聞に備ふ

去月廿六日。京師なる戸田君の御もとより。祇園祭禮番付三葉を下し給へり。且鈴木氏の書物に。西原氏先日當所御通行之節。此方へも御尋被下。久々にて。旦那も拜顔被致。大慶奉存候。其節貴君御導山々御坐候。ちかし御城中故。緩々拜顔も不被致。殘念奉存候。當地御出立の砌に。兩天にて伏見乘船留り居。京地へ兩三日御逗留之内。四條兩蛤てんかく見世へも御立寄被成候よし。右田樂見世に餘程ふるきたうからし入ケ樣の形に。竹にて作り候ものの。殊の外望の由にて。專主にいろ〳〵掛合候へども。餘程むつかしく申。手に入り無殘念の趣にて。京地出立被致候。此よし美濃守致承知。其後向々へ相頼。此程漸手に入申候。西原氏格別望故。追日大坂表柳川藏屋敷迄差出し置。幸便之節柳川表へ相屆候積りに御座候。此段御慰に申上候。又云。大坂表蒹葭堂。此程參り候間。耽奇の本爲見候處。殊の外歡。大坂表へ是非とも持參いたし候趣にて。壹本不殘貸遣し候。耽奇會に殊の外浦山敷樣子にて御座候。此段申上候と記されたるを見るにも。千里面談の心地ぞする。かゝればこの二條及番付ともに。ひとり見過さんも本意なさに。けふのまとゐの諸君と同じくせむやとて。そのよしいさゝか記し出でたるになん

文政八年乙酉七月朔

北峯　美成識

相月兎園

○自然齋和歌

輪池

いせのくにあのゝ津にすめる川喜田氏。やまと歌に心をよせ。家業を舍弟と子と從者とにまかせ。壯年にて雜髮し。自然齋と號し。京に出でゝ。洛外千世の古道にかくれ住みけるが。ある時

心の花をちをりにて。夢にわけ入るみよしのゝ山

112248

といふことの。ふと心まうかびつゝ。初。五文字を數百日按じけれども。終まうちつかざりければ。武者小路家（實陰卿）まゐりて。かゝることこそ侍れば。しろおほき事まゐれども。この五文字つけさせ給はんことをこひ奉ると申しけれど。受けひかせ給ひぬ。日頃へてうかゞひけれど。さま〳〵おきかへぬれど。心まなかはぬ。よりて法皇まゐ（靈元院）うかゞひ奉りぬれば。數日考へさせ給ひぬれど。おぼしめしまかなはせられぬ。かやうのとは北野が得手なりと仰せ有りしなり。こゝやく祈り申べしと仰せ含めらるゝより。いとかしこきことて。その席よりすぐまゐ參籠して。七日こもりて。丹誠をこらしいのるといへども。滿ぬる朝まで何の託宣もなし。こはいかませんとなげきながら還向して。七本松の邊まで歸りける折から。七十ばかりの齡とみゆる社人。三人朝きよめして有りながら。この頃のことはおもひねまなりしと物がたりし故。思ひ寢のと初五文字をおきて。吟じ見しければ。よく相叶ひたり。よりてまさしく天滿宮の御告なりと思ひとりつゝ。いそぎ神前まゐり。ぬ。かつきてかへり申し。たゝちまゐ武者小路家まゐり。事のよし申しゝかば。御感有りて。やがて院參せさせ給ひつけ（ママ）御手奏せさせ給ひければ。嚴感のあまり。御製を下し給はりぬ

職のをの心をよするいせの海のもくずの中まの玉の有りとは

この御製傳聞寫の誤も有りやうたがはし。自然齋其無法師者。勢州阿濃郡。津城下。俗姓菅原。世々豪族。□壯年厭塵紛。脫家累。晦跡京洛。志好和歌。後卜地西山法輪寺疆內居之。寶曆五年乙亥初冬。持齊不起。終及十一月廿七日泰然而逝。享齡七十一。孝子潭空著存不忘平心。建碑舊廬之傍。叙銘靈龜山天龍資聖禪寺賜紫沙門堅翠巖撰。銘曰

生勢長京　賦性溫柔　菅原之裔　似續箕裘　厥行不玷　厥言寡尤　厥歷界鄰
遁跡緇流　寓情和歌　讀書優游　水兮滔々　雲兮悠々

銘　權中納言菅爲成卿
篆　從三位清原宣條卿
權中納言無左衛門督藤原隆前書

○野狐魅人

和泉國日根野郡佐野村といふ處まで。（世にあられたる食野佐太郎といふもの。この村まで住す。岸和田まで食野を佐野と稱す）浦太夫とて義太夫節の淨瑠璃をよくせる者有り。五畿內まで十人のかたりての一なり。常まこの佐野村より大坂の座へかよひて。業とせしが。（佐野村も。岸和田城をさる事五十丁道。然里とぞ。大坂をさる事九里許なり。道法九里許）一日浪華よりの歸途夜まこの入

りて。同國泉郡布野といふ所を通りしに。布野は浪花より紀州への往還にして。高石といふ所の三昧寺の有るところなり。三昧といふは舎堰所をいふ。高石は古たかしといふ。即高しの濱なり ふと人と道づれに成りしに。一人のいふ。先刻より說話を承るに。音に聞きし浦太夫丈のよし。自分はこの布野の下在なる。此邊にては。山の在方を上と云ひ。濱の方を下といふ 某の村の者なるが。此所にて行き逢ひしは。幸のことなり。何卒今より我方に來りて。一曲をかたり聞かせ給はるべしといふ。浦太夫何ごゝろなくうけあひて。其家に伴ひ行きしに。大なる農家にて座しきへ通し。休足させ置き。その内に大勢あたりの者寄り來りて。座に滿つ。主人盛に杯盤を待ちて酒肴を勸む。浦太夫いへるは。あまりに多く飲食をなせば。飽滿して淨瑠璃をかたるに迷惑なり。先語りて後に給はんとて。一二段かたりければ。坐中ひつそりとして感に堪へし有りさまなり。又暫く飲食して。大に興に入りしに。坐客又々かたらん事を望む。則其乞に任せて。數段を語りしが。席上實に感服せしなり。息もせぎひつそりとせしに心をつけて見過せば。人ひとりも居ぎ。眸を定めて四方を見るに。夜少しゝらみて。東の方明けかゝるに。今迄座敷なりとおもひし所は。あらぬ布野の三昧なりければ。仰天して歸らんとせしに。夜はほのぼのと明けそなれたり。草むら〳〵たる墓所なりけるに。ぞつとして早々家に歸り。狐に魅されしと心付に。夢のごとくに飲食せしものはさためて。世にいふ馬勃牛溲にこそとおもはれて。何となくむねあしく。心も心ならぎ。恍惚としてたゝしからぎ。數日をつらひて打ち臥したり。其頃和泉國中にて。佐野の浦太夫は。狐に化されしか。狐に淨瑠璃を望まれしかと。一國の評判となる折しも。或人のいひけるは。其夜浦太夫に饗せしものは。あらぬ不潔の物にはあらぎ。その夜近村に婚姻の禮有りしに。其用意の酒肴膳部のこらぎうせて。あとかたなし。さだめて狐狸などの所爲ならんとて。其家には別に飲食をとゝのへしと聞くされば布野の三昧に魚骨杯盤引散らして。さながら人の飲食せし如く狼藉たりしとぞ。これをきけば。浦太夫が食せしは實の食品にて。野狐其藝を感じ。酒食をもてなし。淨瑠璃を聞きしならんとの取り沙汰にて。浦太夫追日平愈せしが。其後は太夫をやめ。外のなりはひして世を送り。程へては折に觸れて。人の望に應じてかたりしともあれど。たえて業といはざりし。實に安永年中の事なりとぞ。岸和田藩中中茂大夫談 同藩三宅定昭筆記

○上野國山田郡吉澤村堀地所見石棺圖

唐金不動尊

たけ壹寸五分。臺座より火煙先まで貳寸四分。右一體錆之中程金箔の光相見。臺に書物切付有之。但小像故不動不分明

赤がねの輪一

差渡し壹寸壹分。太さ一寸廻り

右は錆懸り貳分四方程金きせ有之

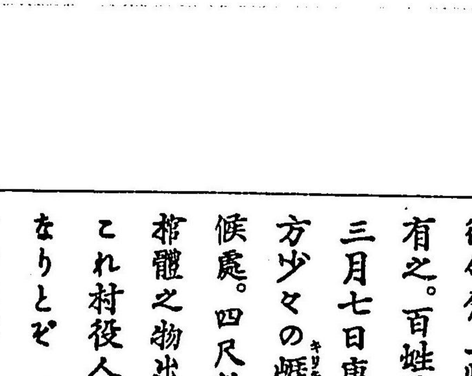
脇差身計　長壹尺貳寸貳分。無銘錆厚くあのき分り無

御領分上州山田郡吉澤村。學音寺持地百庚申塚有之。百姓菊太郎心願有之。石坂拵度由よて。當三月七日庚申塚へ參り。石集候處。庚申塚東の方少々の崖(キリキシ)有之。場所石數多く相見候間。掘出候處。四尺計掘候へば。左右大石よて積立候。石棺體之物出。其中より右之品々出申候

これ村役人より領主への屆出なり。五月末の事なりとぞ

行智曰。倚依ハ歸依なり。(集韻倚同奇) 上州人ハエをイといふ。江澤をイサハ。緞をイビといふ類なり

輪池曰。天平三ハ辛未なり。天平寶字三ハ己亥なり。予その搨本を見しよ。筆力書式ともよその時代のものとハ見えぞ。疑ふべきなり。行智曰。天正三乙亥なれば。天平ハ天正の誤寫。己亥ハ乙亥の誤字なるべし。輪池曰。搨本よつきて見るよ誤字よハあらぞ



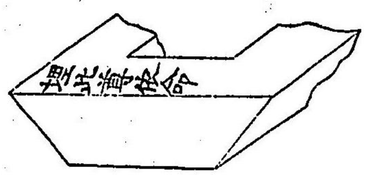
尊像人民
依倚意忘
耕故埋

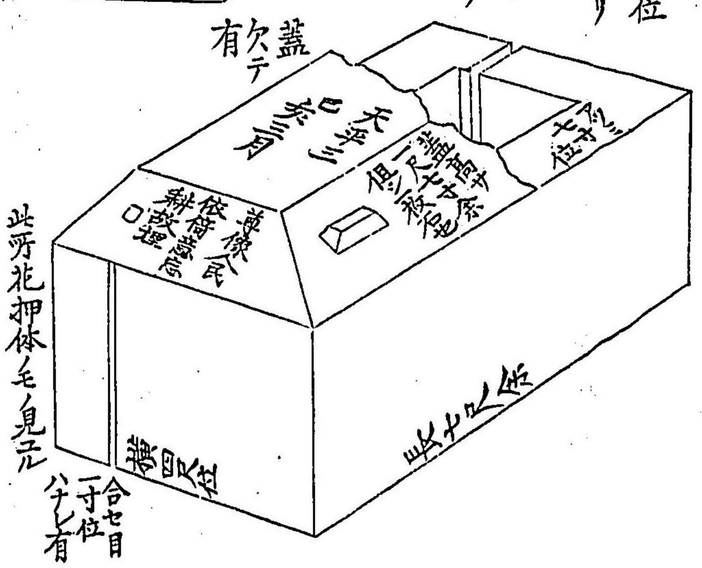
乙酉六月

これハ乙酉六月の兎園會の附錄なりとぞ

○石棺圖別錄

不動尊一躰長三寸位
錆脇差一本　身斗リ
金キセ　二ツ
所々ハゲテアリ
アガタマ一寸四方位





輪池再記

右文政八乙酉年春三月。黒田三五郎様領分上州山田郡吉澤村の内ゟ。數十五ケ所の塚あり。其内親塚字ハ七日市と申處を掘候へば。圖の如き石棺出づ。同月中旬領主へ訴出候

三月十九日ゟ相越一見いたし候處。石棺圖の如くミカゲ石のやうゟて。内の方ハ至りてカタク。外ハ水氣を持ちボロ〳〵致すやうなり。天平三の下ゟ。何か文字體のもの見え候。已夾の中ゟもおなじくあやあり。隨分古く相見え申候。塚の大さ數凡十間四方位。高一丈三四尺も有るべし

不動尊赤銅ゟて鑄ものと見え候。所々をりてがし申候

アガタマ金キセ殘り見え申候。右二品ハ隨分古く相見え申候

脇差ハ信用しがたし

右一條ハ上州なる從弟の方より。認め来りしまゝをゟるし出だす。輪池翁のゟるし給へるゟあハせ見給へかし

乙酉初秋初五。蚊ゟさゝれ〳〵燈下ゟゟるを　文寶堂

○靈救水尼の金佛觀世音の事ゟ付。文政二年四月七日松前家臣佐藤隼治より。君公へたてまつりし書狀の寫 イタヤ レナ 帶カケ 追考附

寛文二年壬寅九月廿七日。松前東蝦夷地シコツ下武川の内。キナオシと申を村ゟて。私歴代の内佐藤木工左衛門と申者川流れいたし。柳の根ゟ止まり候處。蝦夷共集まり引き揚げ候節。兩手ゟ土を握み上り。其節手ゟ握り候土の内ゟ。觀音の金佛有之候處。同所へ祠を建て。右之金佛松前へ持參。于今所持仕候。寛文二年より今文政二年迄凡百五十年餘ゟ可相成哉と奉存候。右木工左衛門其町御奉行相勤。御同所出火之砌。立腹仕候由。松前年々記ゟ有之樣覺え罷在候

卯四月七日　佐藤隼治

解之前會ゟ披講せし。巣鴨の町醫大舘微庵が弟松之助が。王子權現の社頭と。十條村のあハひゟて。土中より掘出せし黄金佛なる觀世音の事のくだりゟ。これをも併せ記をべきを忘れたれば。別ゟ出だせり。按ずるゟ。白石先生の琉球事略ゟ載せたりし林太夫が事と。佐藤木工左衛門が事と。よく相似たり。林太夫が溺れしとき。とり携へしハ梅の枝ゟて。感得せしハ天滿宮の木像なり。又木工左衛門が溺れしとき堀留めたるハ柳ゟて。感得せしハ金の觀音なり。木ハ東方春の色。梅ハ菅家の遺愛たり。金ハ西方秋の色。又楊ハ觀音ゟ因みいちじるし。これ彼共ゟ奇といふ

べし

附けていふ。裏に子があらゐしたるひやうし考。及圖說にも。松前にてイタヤといふ樹未詳。木蓮をイタヤといへば。これにはあらぬかとおもはるしゝゐ。猶ひがことなりき。再按ぜるに。北海隨筆に云。楓を蝦夷人はタラベニといふ。松前にてはイタヤといふ。本邦の楓より大葉なりといへり。（下の卷奥言の條下に見えたり）これにより。イタヤは楓なるよしをおもはるものから。猶心もとなければ。いぬる日松前家の醫師牧村右門訪ひ來りし折。この一條を擧けて質問せしに。牧村が云。イタヤハ即并楓の事なり。その葉もよのつねなる楓より大きし。その樹松前に多くあり。蝦夷地にはいよ〳〵多かり。よりて松前にて薪にするゐ。皆イタヤなり。凡ひやうしを造るもの。材竈木（ヲキ）などをもてをれば。ひやうしは必イタヤにて造ると思ふものもあらん。その木に拘ることにはあらずと。こともなげに答へらる。よりて思ふに。松前にてイタヤといへるは。大和本草に。その葉を圖したる大機（オホカヘテ）のたぐひなるべし。又ひやうしの綱によるといふ。シナの事をたつねしに。牧村が云。シナといへるも。木の皮なり。その皮をもて索（ナハ）をれば。麻よりはなか〳〵につよし。松前にてシナを文字に板と書くものものあり。當否はおらず侍りといひき。この兩條はひやうし考の圖說の末につけ

紙して。おるしおかれんことをねがふかし。（今按ずるに。正字通板音柴馹背上木以負物なり。柴即板板或作簰と見えたり。かゝれはシナに板と書くこと。その故はかなはじ。留に拘はるべし）又いふ。今茲五月のてしめにやありけん。倉卒に書きつめたる拙者の帶かけ考にも。遺漏ありけり。伊豆國海島風土記（下の卷）に八丈島なる男女の風俗をおるして云。女の帶は幅壹尺なり。長さ四五尺に紬を織り。緑方木を以て赤く染め。その儘單にて用ひ。老若ともに是を前にて結ぶ。男は真を入れ。くけたる帶を結びたるもありといへり

解云。これも亦帶かけの遺風なるべし。今佐渡にては女の帶の幅廣きをもて結ふ故に。帶ひらをば竪にたゝみて。その帶にもさむなり。又八丈島なる女は。いにしへの帶かけをやりて帶にせしより。たけをば長くせしにやあらん。孤島は他郷の人をまじへず。こゝをもて古風の存すること多かり。此他五島平戸などの風俗をも訪求せば。かゝるたぐひ猶あるべし。抑。子が帶かけ考は。兎園にのせぬ別錄なれども。遺恨に備へん爲にして。且寫しとられたる一兩君に告げんとていふのみ

玄同　瀧澤解識

文政八年秋七月朔

○松前大福米

いにしへより仁人義士貞婦孝子の天感によりて。或は米穀。或は錢帛の。不慮にその家に

涌出せし事。和漢ゝためし少からねど。正しく國史ゝ載せられしゝ。書紀天智紀云。三年冬十二月。淡海國言。坂田郡人。小竹田身之猪槽水中。自然稲生。身取而収日日到富。乘太郡人。磐城村主殷之新婦。床席頭端。一宿之間稲生而穂。新婦出庭。兩箇鑰匙。自天落前。婦取而與殷。殷得始富。これらゝ遠く見ぬ世の事ゝて。いと疑ゝしく思ひしゝ。近ごろ松前の藩中ゝよくこれと似たる事あり。その由来を傳へ聞くゝ。寛永十七年春二月廿二日。松前の家臣蠣崎主殿友廣の家ゝ。米數升涌き出てけり。是よりして或ゝ一升。或ゝ二升。日々ゝ涌出せぎといふことなし。かくてこの年の夏四月下旬ゝ至りて。その事やうやくやみしかば。友廣あやしみ。且祝して。大福米と名つけつゝ。主君公廣朝臣ゝ進上して。ことのよしをまうしゝかば。人みな驚嘆せざるゝなし。主君すなゝちその米數斗を受けとらして。一箇の瓶ゝこれを納め。又その事を略記せしめて。倉廩中ゝ藏め給ひ。その餘の米ゝ。皆ことゝく友廣ゝ取らせ給ひぬ。これより後の世ゝ至り。不慮ゝその瓶をひらかせて。その米を見給ふゝ。絶えて虫むみ朽つることなく。且遠からずゆくりなき吉事ある事もありけり。かゝりし程ゝ。當主章廣朝臣（公朝臣より八世孫）家督の後。文化四年春三月廿二日。ゆくりなく松前の采地を召してなされて。與の伊達郡築川へ移され給ひしとき。彼大福米をも築川へ運送せしめ給ひしゝ。その米ゝ近きころ迄。もとのまゝゝてありけるゝ。このとき見れば。虫むみ朽ちて米粉の如くゝなりしもの。既ゝなかむゝ及びしかば。その朽ちたるを篩ひ袪て。そのまたき米をのみふたゝび瓶ゝ納めさせて。築川ゝおかせ給ひき。かくて文政元年の冬十一月廿一日。松前家の勘定新役の者。倉廩中なる米穀を展檢をることあるゝより。大福米の瓶を見て。未だその事をあらぎ。則これを主公ゝ訴ふ。主君云々と說き示させて。封をきらせて見給ふゝ。衆ゝ篩ひゝけしより。十ケ年ゝあまれども。一粒も損ぎることなく。あまつさへいたく殖えまして。瓶七八分目ゝなりゝたるを。章廣朝臣見そなゝして。且驚き。且悅び。次の年の春のてじめゝ。その米を幾合か。築川より齎して老父君道廣朝臣へ云々と告け給へば。老侯怡々斜ならぎ。昔よりして。大福米の瓶の封皮をゆくりなく披く事あるときゝ。吉事ありとか傳へ聞きたり。あかるゝ。吾家舊領ゝてなれしとき。この米過半減少せしゝ。今又殖えしゝ。故こそあらめ。賀すべし〳〵と宣ひし。そのよろこびの餘りゝや。このごろあゝたゝしく使者をもて已が父ゝその米一包を贈り給ゝり。この米ゝ箇樣ゝと。その米歷を示させて。件の瓶ゝ附けおかれし舊記錄おちもなく寫しとらして給ゝりければ。家嚴あきりゝ嘆賞して。かゝれば今より遠からぎ。大吉事あらせ給ゝん。いゝとし

へもさるためしあり。その事どもゝ云々と。則上に録したる天智紀をもとめとして。和漢の故事を抄録しつゝ。をさ〳〵ことほきまゐらせし。これよりの後。ほつかに三稔文政四年の冬十二月七日に至りて。かのおん家にゆくりなく。こよなき大吉事あり。松前の舊領を元のごとくに返させ給ふ台命を蒙り給ひておなしき。五年四月十五日に。志州章廣朝臣父子（是より先に。嫡男千之助殿任官あり。主計頭になられたり）もろともに歸國の御暇を給はりて。同月廿八日に。江戸の邸を發駕あり。既にして五月下旬に。松前の城に着き給へば。君臣上下おしなべて。みなとし来の愁眉を開きて。笑坪に入らぎといふものなし。これに依りて。大福米をも又松前へ運送せしめて。舊所の倉に藏めらる。この時にして。事毎に公私となく。小大となく。慶祥をべてあまりあり。かの大福の米の名のむなしからぬも奇といふべし。件の瓶に附けられたる寛永以来の記録に云ふ

大福米一瓶

此米　公廣尊公御在世。寛永十七年庚辰年春二月廿二日。渉出蠣崎主殿友廣之家。而後至五月朔日。友廣奉獻之。則被納御穀藏者也

寛永十七年五月吉日封之畢。（興廣云。傳に公廣朝臣は。松前家第七世といふ。いまだその群ゐるをまらず）此大福米寛永十七年二月

廿二日。入来萬吉長久

明和四年丁亥十一月改而納之

御勘定奉行　青山園右衛門　因藤與惣治　小林兵左衛門

御鍵取　和田甚八　川村品右衛門

安永元年己十月五日より大福米御鍵取　川村左七　工藤庄左衛門

此大福米寛永十七年二月廿二日入来萬吉長久

文化十三丙子年六月四日改之

御勘定奉行　近藤兎毛　和田文藏

右大福米於築川御役所改之

大福米

此大福米寛永十七年二月廿二日入来萬吉長久
文政元戊寅年十一月二十一日改之

御勘定奉行　和田文藏
　　蠣崎喜惣治
　　工藤左太郎
　　明石寅次郎

下代　鹿能與七
　　澤田忠五郎

右大福米於築川御役所改之

但入御覧候ヨ付。取出之。其後又納置候様仰ヨ付。御藏へ納置之

安保佐左衛門
松村銀左衛門

家嚴既ヨこの福米の感あり。且老侯の愛顧を蒙り奉るも。ゑや年ごろヨなるをもて。文政五年の春たつころ。ことほきのこゝろをよみてまゐらせし長歌あれば。ちなみヨこゝヨ志るを折。おこなせそとてとゝめられしを。猶やみがたくて。ものすといふ

こたび舊領ヨかへらせ給ふことほきのこゝろをよみてたてまつる長歌

瀧澤馬琴

みちのくの　えみしの國い　くさのきぬ　まゆつらなりし
なめ人の　たけきこゝろヨ　けものなを　おのがまヨ〳〵
おこなひて　親をおやとし　志たいねば　君をきみとし
いやまいを　家しもあらて　をちこちヨ　あさりすなどり
朝なゆふな　ふを矢さつ弓　とりほこり　そむきまつるを

みかとより　いくさのきみを　またしつゝ　うたしたまへば
ちたかひつ　あかゝみたれて　としあまた　みつきをたえて
ともすれば　青人くさを　ほふりたる　嘉吉のとしゝ
ゝかさなる　たけ田のとのゝ　あらま弓　ゝる〳〵みちを
ふみゝさて　かゆきかゝゆき　うちをさめ　をしへみちびき
まつりごち　ちりそちつめて　常磐なす　松まへの城ゝ
百とせを　よつかさねつゝ　いそのかみ　ふりゝし事の
いやたかき　御代ゝきこえて　いやちこゝ　遠つみおやの
うるゝしき　いきをもつひゝ　なまよみの　かひなきまでゝ
まかつひの　そこなひけらし　ものゝふの　やな川へとて
月も日も　うつれゝかゝる　ちまつ鳥　うかりける世ゝ
よろこびの　時ゝ来ゝけり　ゆくりなく　もとのさかひゝ
もとのごと　かへされ給へゝ　冬ながら　春かとぞ思ふ
春来れゝ　あつまのさたを　ことさへく　えぞゝ傳へて

えそ人の　うちもあほきて　たのもしく　おもゝんのみか
おしなべて　ちるもちらぬも　ひな鶴の　千とせの後も
龜の子の　よろづよまでも　松竹の　さかゆるまゝゝ
かざりなき　北のまもりゝ　君ならで　誰やゝあると
かくむかり　ことほぎまつる　ことの葉ゝ　よむともつきじ
ささくさの　ささくありける　ことのみゝして

反歌

みちのくのえそのの高濱あれぬとも。立ちかへる浪の花ぞ目出度

最ゝ老侯より家厳ゝ賜ゝりし大福米ゝ。後の耽奇ゝ出だすべし

文政八年七月朔　　琴嶺　瀧澤興繼謹誌

○平豊小說辨

解云。小說野乘の信じがたき誰か董狐の言を俟つべき。ちかるゝなほ世の讀書の人。唯その舊記ゝ因循して。曉らざるもの多かるも。むかしゝ井澤谷の兩先生。をさ〳〵これを辨じたり。されども言ゝ當否あり。猶且遺漏も少からぎ。抑中つころよりして。かの平

相國入道を白河帝のおん子といひ。又豊臣太閤を後奈良院の落胤なりといふものあるゝ。いかゝぞや。これらを辨ずるものしもあらねば。今その異同を折衷して。世俗の迷を解かんとほりす。極めて烏滸のわざゝ似たれど。學ゝ異を得て成るゝあらぢや。かゝれば竊ゝこの編ゝ。平と豊との二姓を舉けて。もて題目とするものゝかなり

平家物語ゝ云。相國入道清盛公ゝ。只人ゝあらず。まことゝ白河院の御子なり。そのゆゑゝ。永久のころほひ。平忠盛東山祇園の片ほとりゝて。あやしの法師を生ながら捕へたりけるけんゝやうゝ。白河院御最愛と聞えし祇園女御を忠盛ゝこそ下されけれ。此女房ゝらみ給へり。うめらん子女子ならば朕が子ゝせん。男子ならば忠もりとりて弓とりゝゝたてよとぞ仰せける。をゝゝち男をうめり。ことゝふれてゝひろうせざりけれども。内々ゝもてなしけり。この事いかゝもして奏せむやと思ゝれけれども。ゝかるべき便宜もなかりけるが。ある時白河院くまのゝへ御幸なる。紀伊國いとり坂といふ所ゝ。御こしをかきをゝさせて。ゝむらく御休息有りけり。其とき忠もりやぶゝいくらも有りけるぬかごを袖ゝもり入れ。御前へ參りかしこまつて

いもが子ゝてふ程ゝこそなりゝけれと申したりければ。院やがて御こゝろ有りてたゞもりとりてやしなひゝせよとぞ付けさせまし〳〵ける。さてこそわが子といもてなされけれ

此ゝか君あまりゝよなきをゝ給ひしかば。院さこしめして。一首の御詠をあそむいて。下されける

夜なきすとたゝもり立てよ末の世ゝ。清く盛れる事もこそあれ

それよりしてこそ清盛といゝなのられけれ。已上平語○源平盛衰記ゝ。載する所左ゝ同ト。但その文ゝ小異あるのみ 又成形圖記巻二十二 山津芋糠子の條下ゝ。右の本文を略抄引用して。曰。臣國柱按ずるゝ。世ゝ不出非常の人。必その本生父の祥（サダカ）ならぬぞ多かる。豊臣秀吉公の平清盛ゝ似たるゝや。一書ゝ太閤秀吉の父測（ヒ）すといふ。そもじめ馬島明眼院といへる者あり。天子の御眼病を療治しまゐらせしかば。厳感のあまり宮女を明眼ゝ賜ゝりける。此宮女天子の幸を受けて懐胎なり。是ゝ後奈良帝の御守の時の事ゝて。明眼てふ名も後ゝ賜ゝりし名ゝや。始より宮女有身の事もゝれざりしゝぞ。ゝかるゝ明眼ゝ淨戒を保ちて一向ゝ妻を納れず。この宮女を尾州愛智郡中村の住人筑阿彌ゝ與へけり。遂ゝ筑阿彌許ゝて出生せしゝ。即秀吉なり。一說ゝ。筑阿彌始中村彌助昌吉と號を。故ゝ世ゝゝ王氏の樣ゝいひなせるもあり。又俗說ゝ。筑阿彌が妻。日

輪懐に入ると夢みて孕み。誕生ありし故。童名を日吉丸と號すなどあるも。天子の御種を宿せしをいひなせるにや。太閤記などいふ草子には。其母は持萩中納言保顕卿の女なり。天文丙申正月元日誕生と記せり。一説には。信長の足輕木下彌助といふものゝ子なりとあり。然れども。秀吉の信長に仕へし次第を見るに。木下彌助が子ならば。始より信長に仕ふべき事なり。又筑阿彌の秀吉における。我が子のあしらひとも見えず。僧にもなさんとせし程に。秀吉父の所を逐電せられし事あり。且又秀吉一天下を掌握せられての後。親の廟所とて中村にもなく。又墓所もなれど。秀吉の父慥ならば。さと位牌なども取り建てらるべきに。其事も聞えず。何れにも筑阿彌は。本生父にあらざるを已もなり給ひしなるべしといへり 下略

解云。これらの説はふるくより世の人口に膾炙したり。なかれども平相國。豊太閤を天子の落胤なりといふがごときは。疑ふべく信がたし。よりて竊にこれらの説の出づる所をおもひみるに。かの平相國入道は。老後にこそわろくはなりたれ。保元。平治の擾亂には。功ありて不義あらず。就中平治には。信頼。義朝を討滅して。兵馬の權を執りしより。既に天子をさしてさみて。おのがまゝ〳〵せさることなく。富は三十餘國をたもちて。位は人臣の上を極め。遂に天子の外戚とさへなりたり。源平兩家の始まりしより。かゝる例のあることなければ。猶その素生を至尊にし。且その人を神にせんとて。不經の言のいで來たるにや。按ずるに。彼いもが子の歌の出處は。只この一本のみならずおのれ往歳考異の編あり。今録をること左の如し

阿彌陀寺本平家物語

この書は。長門なる阿彌陀寺の什物なり。坊間に寫本にて。流布をなる長門本平家物語と同じからず。群書一覽を著はしたる。尾崎雅嘉もこの書を見ざりけるにや。平家物語。梶原が籠の梅の歌のくだりに疑ひをおるしたり。學者よろしく辨ずべし

に云。鳥羽院の御内に。小大進の局とて居けるが。いさゝかなる事によて。御内をすみうかれかたへんとなる處に。かをかなるをまゐしてぞ。居ける。あるとき小大進の局うつまさにまゐりて。七日こもり。我身のありにびたる事をぞいのり申しける。七日にまんじけるあかつき。下向せんとての夜半ばかりに。やくし十二せいぐにんの中に。衆病悉除のたのもしきことをおもひ出だして

南無やくしあれれみ給へ世の中に。住みにびたるもおなじやまひぞ

とよみてまゐらせ。下向して十二日とまうしゝよ。やいたのけん校廣清に具そくしてまうけたる子なり

まうけたる子なりとに。待宵小侍從が事といふなり。これまでに著聞集。その他のふみどもに見えたるも相同じ。但し右の歌の下の句あり。煩ふも病ならぎやとあり

此子二つと申しけるに。父とともに南おもてに出でゝあそびける。此子ちゝがひざによりをり。ひろえんをてひありきけり。比に九月中旬のころ。南面のまがきに薯蕷てひかゝり。その蘇なりきかりたりけるを。廣清これを見て

いもが子にてやてふ程になりにけり。とくちをきみたりければ。此母この子をいたきとるとて

いまにもりもやとるべかるらん（已上他大寺實定卿 皆都月見の歌に見えたり）

又今物語にもこの事見えたり云。小大進と聞えし歌よみ。いとまづしくて。うつまさへ參りて。御前の柱に書きつける歌云々。程なく八幡の別當光清に相具して。たのしく成りにけり。子などいできて後もろともに居たりける所。近き所にいものつるのてひかゝりて。ぬかごなどのなりたりけるを見て。光清

てふほどにいもがぬかごになりにけりといひければ。ほとなく小大進今にもりもやとるべかるらむ

この連歌に。蒐玫波問答にも見えたり。これらに後のものながら平家物語にすら。異說ある事右の如し。かゝればぬか子の連歌をもて。清盛公を　白河帝の落胤なりといふ說に。疑ふべく信ぜべからぎ。譬へば源頼政卿化鳥を射ける勸賞に。あやめといへる宮嬪を賜はらんとありしとき（さみだれは池のまこもの水まして。いづれあやめとひきぞわづらふと）よみけるよし に。平家物語。源平盛衰記。その他の冊子にも見えたれど。無住法師が沙石集（巻五）に。故鹽倉の右大將家あやめといふてしたものゝ美人なりけるを。梶原三郎兵衛尉に給はらんとありしとき。梶原をないち云々とよめりしよしをいへり。但し歌の上の句。沙石集には。薦草（マコモ）あまりの涙に茂りあひてとあり。無住に俗姓梶原の族なれば。彼集にいふ所をもてまさしとをべしと。先輩のいへるが如し。只是のみならぎ。清く盛れるとある御製によりて。清盛と名のりしといふことも信がたし。平家に貞盛より以來盛をもて二字名の下に置くこと珍しからぎ。さるにより清盛の清盛と名のれるならん。別に意味あることゝしもおもほえぎ。もしその字義によ

りていいば。清白をもて後々まで盛りなりとせらるゝものゝ。無爲不爭の盛德のみ。仁者不富富則不仁。かの入道の人となり。清白盛德あることなければ。末世ゝ清く盛りならんとよませ給ひしよしゝ當らぎ。盡信書不如無書と聞えたり。孟子の誨いへばさらなり。これらのたくひ世ゝ多かり

又豊太閤の父の事。昔よりして云るよしなければ。さま〳〵ゝいふものあれども。いづれも不經をまぬかれぎ。そが中ゝも。後奈良院の孕みたる宮女をもて。明眼院ゝ給ゝりしより。その宮女ゝ尾張なる筑阿彌ゝ遣嫁せられてうめりし。その子ゝ秀吉なりといへる說こそうけられね。いかゝとならば。明眼院ゝたじめより。淨戒を保つゝよりて。妻を娶らざるものゝしあらば。假ひ至尊の恩賞なりとも。宮女を給ゝらんとあるときゝ。辭し奉るべきことなるべし。さるをいなぎうけ奉りて一兩月の程なりとも。其身ゝくゝを師の事なるゝ。その懷胎をしらざりしゝいといぶかしき事ゝあらぎや。しかのみならで。そる〳〵と遠く貧しき尾張なる筑阿彌ゝ遣すなどことゝりゝたかひし事のあるべくもあらずかし。又その母の懷へ日輪の入ると夢みて。秀吉公をうみしといへるを。俗說とのみすへからぎ。たじめ朝鮮の役を起さんとせられしとき。異邦へおくり示させし書翰の中ゝ。彼日輪の一條あり。かゝれば實ゝその事ありしか。さらずばみづから神ゝせんとて。このとき猛ニハカゝ云々と書き示させしも知るべからぎ

寛永の末のころ。羅山林先生

台命ゝよりて。書きつめたる將軍譜ゝも。これを載せて云

秀吉不知其所生。或曰。尾張國愛智郡。中村鄉筑阿彌子。其母夢日輪入懷中。而生之。故名日吉

これも當時の小說を取られたるものながら。これより外ゝ正文なし。しかれども。世の人の秀吉公の實父の名をだゝ知りたるものゝあることなきゝ。まいて末世ゝその母人の夢ものがたりを誰かしるべき。よりて思ふゝ秀吉公の幼名を日吉といひしが實事ならば。東國太平記ゝいへるが如く。天文丙申の年ゝ生れ給へば。猿ゝ因みし名ゝいあらぬ歟。かの記なる略傳ゝい。童名を猿といふといへり本文ハ下ニ抄すべし猿といひしゝ。綽號アダナゝて。日吉といひしゝ童名歟。そを辨ぎるよしなけれども。日吉ゝ即比叡ゝして。原モト山王の山號なれば。亦是猿ゝちなみあり。いにしへゝ吉を上とよめり。よりて比叡を日

音。澄ノ江を住吉ともかけり。後世々の訓讀を失ひしより。日吉をひよしとよみ。住吉をすみよしと唱ふるハ皆あやまりなり 又俗說ニ。秀吉の面貌の猿ニ似たりといふものあれども。その肖像を今も見るニ。まさしく猿ニ似たりとハおもほえず。稚き頃より小ざかしく且その本命丙申なれば。里人の綽號して。猿といひしといふ說を穩なりとすべきニや。されば信長公の罵りて猿冠者と呼び給ひしも。世の言くさニよられしならん。かゝれば猿といひしより猿ニちなみて。日吉といふ名さへ作り設けたる當時好事の所爲ニあらぬ歟。これも亦しるべからず。そハとまれかくもあれ。成形圖說ニ。一書を引きて。秀吉公の父の名を木下彌介とまるした る彌介ハ彌右衛門のあやまりなり。その證ハ

東國太平記一卷ニ云。傳曰。秀吉ハ氏姓不詳。大德ヲ賞センガ爲ニ。種々ノ奇說ヲ記ストイヘトモ。皆不信。中略 或說曰。秀吉父ハ本織田信秀之鐵炮之者ニ。木下彌右衛門ト云フ人ナルカ。奉公ヲ辭シ。其在所ナル尾州愛智郡中村ニ歸住ス。同母ハ同郡御器所村ノ人ナリ。持萩中納言ノ息女ナリトカヤ。其故ハ中納言罪有リテ。尾州持雲之里ヘ配流セラレ。息女一人有リテ。二歲ノ時。中納言卒去セラル。依之。後室ハ娘ヲ誘ヒテ京ヘ上リシカ。年經テ洛陽兵亂起リ。在京成リカタク。ヨリテ息女十六歲ノ時。又尾州ヘ下リ居玉ヒシカ。十八歲ノ時。彌右衛門ニ嫁シテ。女子一人ト。其次ニ天文五丙申春正月元日ノ朝。男子ヲマウケ給フ。是則秀吉ナリ。童名ヲ猿ト云フニ付ケテ。種々異ノ說アリ。皆不實。唯申年ニ生レ給フニヨリテナリ。父母何トナク。其名ヲ猿トヨバレシナリ。面貌モ自然ニ猿ニ似テ。又仕業モコザカシク猿ニ似給ヒケルニヤ。此說尤可ナリ。秀吉ノ姊ハ。成人ノ後。同國乙之村ノ民彌介ニ嫁ス。彌介後ニ三好武藏守。三位法印一露ト稱ス。是則關白秀次ノ實父ナリ 下略

按ずるニ。豐臣譜ニ載せるもの。秀吉公の兄弟四人所謂第一秀吉公。第二大和大納言。秀長。第三武藏守一路妻。第四南明院殿是なり。かゝれば東國太平記ニいふ所も。一定ならがたし。しかれども一書ニ云。初生の女子と。秀吉公ハ前夫彌右衛門が子なり。又秀長卿と南明院殿ハ。後夫筑阿彌が子なり。いまだ孰か是をしらず。さて明眼院云々の一說ハ。右ニ抄せし持萩の中納言母子の事よりいでたるものニや。あらんげニ秀吉公の母をさなくて。父を喪ひ給ひしとき。母と共ニ都ニのぼりて。二八のころまでありし程。大内ニつかへまつりて。遂ニ天子のおん胤を宿せしなどもいハゞいふべし。しかれども持萩殿の妻といへるハ。本妻ならで。配所ニて娶りたるかりそめの側室なるべし。昔も今も流罪の人のその妻を携へて。配所ニゆ

くことなければなり。まいて勅免あらずして。配所にて身まがりし人のむすめを。いかにして内裡にて召しつかいるべき。縦ひその身の素生をかくして。つかへまつりし事ありとても。尾張にかへりてうみたる子のむすめなるに女の子にて。次に生れしが秀吉ならば。亦かの天子の落胤なりといひけんことも。齟齬をなり。又持萩といふ人に。當時公卿の名號を出だしたるものに所見なし。かゝれば明眼に給にりし宮女云々の一説に。菅丞相を文徳帝の落胤なりといふものと。平相國入道を白河院の落胤なりといふものと相似たり。皆是當時の稗説にて。鑒室無根の言なるべし。人の好めるに走りて。今も昔もかゝれど。菅丞相に大賢なり。平相國に將種なり。豐太閤に英雄也。至尊の落胤ならぞといふとも。誰かこれを賤むべき。思ざること甚し。只これのみにあらぞして。平大臣宗盛公をば。笠張の子なりといへり。その人暗愚なるときに。將相貴分の公子なるも。これを匹夫の子なりといひその人賢良英雄なれば。儒官武士匹夫の子をも。これを天子の落胤とも。世の褒貶に私議に起り。是非に成敗に依ること多かり。陳壽が米を甘なふとも。氏族を飾るに人によるべし

壁へば織田家を清盛の裔孫ありといふといへども。世系まさしからぬをもて。白石にあぼ疑ひて遂にその辨あるが如し

唐山にもさるためしあり。秦の始皇を呂不韋が子といひ。晉の明帝を午金が子なりといふ。これ將當時の小説なれども。史官をさ〳〵取るものあれば。かならぞよしあることなるべし。又蜀漢の昭烈のみづから中山靖王の後なりと稱したる。劉宋の高祖武帝みづから漢の楚の元王の後なりといふが如き。世系遥なるをもて。司馬光に猶疑ひぬ。又この事に似たるものあり。足利の義包を爲朝の子なりといひ。岩松入道天用を新田少將義宗の子なりといへる即是なり。志かれども義包の一條に。足利の族なりける。今川了俊の説にして。難太平記に出でたれば信ぞべく疑ふべからぞ。只これのみならぞして。梅松論にも粗そのよし見えたり。同書下の巻。足利尊氏卿西國より攻め上るをり。箱崎なる八幡宮へ參詣の段に。をなじく寄附地あるべしとて。御文章の爲に社家の古文を召し出だされし中に。昔鎮西八郎爲朝の寄附の狀ありしを御覽ぜられて。當家の祖神賢に難有思召して。御敬信淺からぞ云々といへり。このとき尊氏の當家の祖神といいれしに。八幡宮に爲朝朝臣をかけたることゝ聞ゆるなり。かゝれば今川氏のみならで。尊氏卿も素より亦其身の爲朝の裔孫なるをたゞりておいせしなり。又天用の義宗のおん子なるよ

しに。岩松系譜に見えたれば。これらに平相國。豊太閤の素生をいふものとおなじからず。事迹に信と不信とあり。論者よろしく擇むべし又或記に云。太閤秀吉公の父ゑれざるをもて。牽強傅會の説多し。それらに今さら論ぜるに足らず。傳に云。秀吉にその母野合の子なり。そのいにけなかりしとき。つれ子として木下彌右衛門に嫁したるに。彌右衛門てやく世を去りければ。その頃織田家の茶坊主にて。筑阿彌といひしもの浪人して。近村にあるをもて。をなにちこれを入夫にしたり。この故に。彌右衛門に秀吉の繼父にして。筑阿彌に假父なり。母が野合の子なるをもて。實の父の事においてに。その名をたにもいひあらせぜ。秀吉も亦これを悟りて。これに父なしといにれしなり。もし彌右衛門にもせよ。筑阿彌にもあれ。うみの父ならんにに。てや世を去りて年を經るとも。秀吉武運比類なく。富田海をたもつに至りて。父の廟所を建立し。贈位贈官の追福あるべし。ゑかるにその事なかりしに。野合の子なればなりといへり

これ理りあるに似たれ共。又これに不經をまぬかれず。抑當時の小説者流。豊太閤のその亡父の爲に。廟所を建立し給にざりしと。贈官爵の事なきとを。深く疑ふこゝろを師として。臆説をなすものなり。今予が思ふよしにしからぜ。倩豊公の情狀を亮察して。よくその意中を推してかるに。その恩をべて現世に過きて。過去の爲にに絶えてなし。只信長のおん爲にのみ。大法事を興行して。廟所を壯嚴し給ひしに。諸將のこゝろを釣らん爲なり。その他。丹羽。蒲生。堀のともがら百萬石を食せしも。既に没後に至りてに。その國郡の三つがひとつも其子共に受けし給にぜ。これらに骨肉なるものならねば。恩に増減ありともいふべし。秀長卿に弟なり。その世にゐまそかりし日に。數十萬石の主として。官職亞相にのぼせしも。その没後に至りてに。てやくも忘れたるが如し。これ異父兄弟なるものなれば。かくてもあらんといにぎいふべし。彼棄君に豊公の老後にうませし愛子(マナコ)なり。その誕生のたにめより。天下の富も足らざるごとくめでいつくしみ給ひしに。忽早逝し給ひしかば。哀慕の涙に胸にこそ盈つらめ。その後々まで菩提の爲に大かたならぬ法會などをとり行れし事に聞えぜ。この情狀を推すときに。幼弱微賤の時にわかれて。その面影だも見しらざる亡父の事にに。懸合せぜ。只現在なる母御前をのみ大政所と尊稱して。孝養を盡し給ひしなり。その母御前も父の如く。早く世を去り給ひな

ば。追慕の孝養なきよより。世の人遂に豊公の母をすら知らずして。或は天より降り給ひぬ。地より涌きてきといふものあらん。かゝれば豊公の事實を取りて筆に載せんと欲りするもの。いまだ織田家に仕へざりし已前の事は。闕如して可なり。獨竹中丹後守重門の書きつめたる豊鑑まきの壹。長濱の真砂に云

羽柴筑前守豊臣秀吉天文六年丁酉に生れ。（解云天文五年丙申とするものは非か）のちに關白になり昇り給ふ。尾張國愛智郡中村とかや。あつ田の宮よりは五十町ばかり乾にて。萱ぶきの民の屋。二つか五六十ばかりやあらん。郷のあやしの民の子なれば。父母の名もたれかあらん。一族などもあかなり（下略）

予はこの說にあたがふべくおもほゆ。その事をべて實にして。その文書史に恥ぢぞといふべし

文政八年乙酉秋七月朔　神田山脚の老逸稿

○鑿井出火

越後國新發田領蒲原郡中野口組大庄屋。戸頭村三郎左衛門支配。名主助右衛門儁下。白根中町造酒屋金左衛門と申者。富有之者にて。屋敷内へ掘拔井を掘度。年來心がけ。文政六年癸未三月十日頃より取り懸り。三月廿六日掘拔候處。砂交りの水を五六丈吹上げ。水夥しく出。近邊の土地トン〳〵と鳴りわたり。井の口段々に大きく相成り。其町水浸しにも可相成樣子に付。先溝を掘り。水を流し。水を止度存。金左衛門方に有之ものは。何にをぞ井戸へ投げ込候へ共。棒などの樣なるものは吹上げ井戸へ落ちつかぞ候間。無據大豆俵拾俵ばかり投込。又疊石板等を並べ。石を上げ候へ共。水止み不申。其夜。白根町疑醫者（この者醫を長く延し置候間。其所にて醫醫者と呼びあるしたり）井戸を見に參り。井石はこゝかと提灯をさし出し候へば。井の内より火もえ出で。提燈も疑も燃し。火氣やはり五六丈燃上り。遠近共に白根町出火なりと存。竹貝を吹きまどひ。高張提燈を押建て。村々より馳集り。大に騷動いたし。且兩三日の間。金左衛門屋敷の四五十間四方ゆるみ力を入れて踏候へば。ドブリ〳〵とていり候樣に相成。人家數拾軒少しづゝ柱めり込傾き。右投込候大豆を處々へ吹出し。井の中八九拾間四方もうつろに相成候樣に思はれ。火氣益熾に相成候。其節賣卜師參候に付。卜吳候樣頼み候へば。金子貳拾兩差出し候はゞ。よく占ひ祈禱いたし。火氣水をも可相鎮旨申し候へ共。餘り高金故見合せ。又別の賣卜師に金子貳兩貳分遣し占せ候へば。判斷いたし候。不構差置候はゞ。七里四方土地ゆるみ落入り沈み可申。右水火を鎮め候には。地主金左衛門并に

右井戸を堀候職人を。井の中へ投入れ不申候てハ。水火相鎮らぬ。土地おち入り。泥の海ゝ可相成旨。判斷いたし候よしゝて。白根町ハ勿論近邊の者まで。無據事ゝ候間。金左衛門并ゝ井戸堀職人を捕へ。井の中へ投込申外無之と申風聞ゝ相成。金左衛門并ゝ井戸堀職人早々逐電いたし候よし。扨相集り候村々ハ

平片新田　下道かた　上道かた　沖新保　平片
萬年　吉崎　櫛笥　藤新田　藏主
兩木山　浦梨子　田井　鍋潟　兩曲り

戸頭組村々を始。この外四五里四方より駈集り候村々。扨擧ゝいとまあらぬ
右村々七日の間。晝夜白根町へ相集居候へ共。水火鎮り不申。夫より村々役人共相談の上。御領主へ相居。檢使の役人出役有之。見分之上右の井戸を埋め候樣被申付。埋方等の差圖有之。其通ゝいたし候處。水火共ゝ勢氣弱く相成。水ハ湯の花のゝほひ甚敷。飲水ゝならぬ。其水を汲み温め。藥湯ゝいたし候へば。諸病ゝ宜く。湯治人も追々有之よし。火ハからめき（からめきハ地の名。土中より火の出プる處）同樣ゝ竹筒ゝて。處々へ引取。相用候よし。且傾き候家も修復致し。金左衛門も歸宅いたし候由

右ハ平片新田組頭甚右衛門弟仁太郎と申もの。先年奥州へ日雇稼ゝ參り。予が家ゝもあむしてたらき居。予も存居候者ゝて。當三月不圖江戸本郷丸山本妙寺中東岳院ゝて逢ひ。其後予が客舍へ折節來候處。五月初又予を訪ひて。國元ゝ大變有之。書狀到來ゝ付。歸國いたし候とて。暇乞ゝ參り。歸國致し候處。六月十六日又々出府いたし。同十八日。予東岳院へ參り候節。仁太郎ものがたりを承り。其まゝ相記す。村名語音の聞違もこれあるべし

癸未六月十八日

熊坂盤谷記

熊坂盤谷ハ。奥州福島の鄉士ゝて。四郎入道長範が裔なりといふ。世々學を好み。常ゝ倉廩をひらき。窮民を救ふをもて業とせり。この故ゝ近鄉その風を慕ハざるものなし。ゑむ〳〵東都ゝ遊びて。予と友たり。近來繼志編を著し。祖先を盜なりとせられし俗說を破るゝ足る。眞ゝ篤實の君子なり

海棠庵記

○婦女産石像

信州佐久郡北澤村名主惣兵衛申上候。村内ゝ字入作ゝ鎮守胸形大明神者五間四方の生石ゝて御座候。往古より都て鄉村ゝ凶難等靈夢之告有之。又ハ流行之病難有之節ハ。拜幣

帛候へば。自然と相除候故。瞬村迄舉て鎮守と崇奉り罷在候。然る處。私妻みち儀。子無之を相歎き。密ニ廿一日之間。大明神へ毎夜參籠御祈願を籠候。私ニハ一切相隱し有之。去未年妊娠之分け。前書之事共申聞候ニ付。驚入醫師へ相掛け見せ候處。全懷妊ニ相違無之由申し候ニ付。分抱仕。十ケ月ニ及候へ共。出産不仕。十二ケ月ニ至り。當五月十一日安産仕候ニ付。親類一同歡見受候處。五體相揃。石像ニて。丈け一尺二寸五分。面上青み。腔と相分り。手足腹脊共薄赤く。何共恐怖仕候。難捨置御訴申上候。何卒御慈悲を以。御檢使被成下度奉願候以上

文化九年申五月十三日

信州佐久郡北澤村
名主　惣兵衛
年寄　與次右衛門

杉庄兵衛様御役所

右兩條ハこれを雜記中ニ得たり

文政乙酉八月朔

海棠庵記

附錄

嚮ニ文寶子の犬別帳ニ附けて。予があるしおけるもの二條を。耽奇漫錄ニ附錄せしニ。このごろ篋底をさぐりて。又一二條を得たり。よりて又こゝニ錄す

貞享四年卯四月の御達

覺

一捨子有之候ハゞ。早速不及居其所の者いたハり置。直ニ養候歟。又ハ望の者有之候ハゞ可遣。急度可及付居事

一鳥類畜類人ニ疵付候樣成儀ハ。只今迄の通可相居。其外ともくひ又ハおのれと蒲頻候計ニてハ。不及居。隨分致養生主有之候ハゞ返可申事

一無主犬。頃日ハ食物給させ不申樣ニ相聞候。畢竟食物給させ候へば。其人の犬の樣ニ相成。已後まで六か敷事と存いたハり不申と相聞。不居ニ候。向後左樣ニ無之樣。可相心得事

一飼置候犬死候ハゞ。支配方へ居候樣ニ相聞候。於前條無之者。向後箇樣之居無用事

一犬計ニ不限。生類人之慈悲之心を元といたし。あれみの儀肝要の事

卯四月

元禄八年亥十二月廿一日御渡し捨犬の子御吟味御書付

覺

小石川馬場近邊屋代越中守組。美濃部彌兵衛門外ニ。去る十八日之夜。近き頃生れ候體の白毛の子犬。二疋捨置候。此度町中之犬共御吟味之上。犬小屋へ被遣之候。然上ハ左樣之儀無而有之間敷處。犬捨候段不屆候間。急度可被致僉儀候。組支配等有之向ニハ。其むき〳〵ニて。致僉儀捨候もの相知候樣ニ可被致候。後日ニ脇より相知候ハゞ。可爲越度もの也

十二月廿一日

乙酉八朔　海棠庵謄寫

○變生男子

文政二卯年四月の記。神田和泉橋通りニもめる經師屋の隱居善八といふ者。旅すきなれば年中處々をあるきて。たのしみとせり。一昨丑年より上方筋へゆき。大坂より大和路ニかゝりける時ニ。むかふより十五六ばかりなる娘只ひとりニて急き來りけるが。善八の前へ程なく近つきたる所ニて。氣絶して倒れたり。善八も通りかけニて驚き。懷中より藥を出だしあたへて。かれこれ介抱しければ。やうやくいき出でて。目を開き。心つきたるさまなりければ。猶もさゆなどあたへて。扨御身ハいづかたの人ニておハするぞ。供もつれぞ。わかき人のひとりありき。所のものとも見えぞ。いかなる事かと尋ねければ。此娘まづ一禮をのべて。ゐらハ事ハかとわかされて。大坂へつれらるべきを。さま〳〵と手たていたし。今朝よきをりをうかゞひ走り出でたる故。心もつかれ。思ハぞ氣をうしなひ。てからずもそなた樣の御介抱ニ預りたる事忝し。何とぞ此上の御慈悲ニ。ゐらハが宅迄送り給ハれかしと頼みければ。善八も不便ニ思ひ。住所ハ何方ぞと問ひければ。勢州津の驛ニて。紺屋なりし。善八ハいそぐ旅ニもあらねば。送り遣ぶべしとて。追手も氣つかハしければ。そくゝ駕籠ニのせ。取りいそぎつゝ。いせの津の紺屋何がし方へつれゆきければ。兩親をもじめ家内のものども。よろこぶこと限りなく。娘ハ始終をくハしく物がたりて。大恩人の善八なれば。おろらく此方ニ逗留し給へとて。日ごとニあつくもてなしける。善八もいつまでとゞまりても。てのなければ。家内の者ニ暇を乞ひしニ。人々名殘を惜み。今去むしととゝめけれども。てゝ支度などしければ。娘ハ猶更何となくわかれをしく。わらハも何とぞ御禮のため一たびハ江戸へも下りたきよしを。兩親ニねがひければ。いづれ一兩年の内ニ。親父同道ニて。くたり可申とて。厚く謝しけり。娘ハふと心つきたるさまニて。此度思ハぞ。厚き御介抱うけしも。前世の御緣こそ有りつらめ。ゐらハもそなた樣の御

恩にをれぬ爲。何とても御所持の内一品たび給へ。それを朝夕そなた様と思ひ。後世をも願ひ申したしといひければ。善八も旅さきの事にて。外に持ちたる品もなく。懐中の守りに入れ置きし淺草觀世音の御影を取り出だし。これを進上すべし。隨分信心を給へとて。娘にあたへ。暇乞ひして。伊勢を立ち出で。去寅年（文政元年）四月江戸へ歸りけるに。留守中に。新婦懐胎にて。男子出生し。則善八歸宅の日。七夜にあたりければ。善八も大きに悦びける。されども此出生の小兒。毎日泣きて少しもやむ時なく。其上左りの手を握りつめて。いかなる様にをれどもひらかざるよしを。善八にかたりければ。そういかなる事やらん。まづ孫をいだきみんとて。小兒を善八の膝にいだきとれば。今まで泣き入り居たるが。即座に止み。又握りつめたる左の手をも。善八何となくひらかせたれば。忽ひらきたり。そのひらきたる掌の上に物あり。何ならんと取り出だしみれば。觀音の御影なり。みな〳〵奇異の思をなし。驚きければ。善八つく〳〵考へ見るに。此御影は。全くいせの津にて。娘にあたへし御影なりと。甚いぶかしく思ひ。家の内の者にも道中にてかの娘に出であふたる始末。をかく〳〵とかたりきかせ。其後いせへも書狀を出だしければ。右の返書六月十四日に着しければ。早速ひらき見るに。かの娘は善八にわかれてより。間もなくその年の五月末に病死したるよしを告げ來りければ。いよ〳〵不思議に思ひ。をからば此小兒の男子なるも。右の娘の再來。實に變生男子もひとへに大悲の御利益ならんと。是より猶も深く信心をけるとぞ

右の産婦に服藥をあたへし。清水の御醫師。福富主水老の直物語なるよし。友人利郷といへるもの語りけるまゝ。こゝに記し出だしぬ

○狐屬の幸

文化六巳年の冬。加賀の備後守殿の留守居役に。出淵忠左衛門といへる人あり。ある夜の夢に。一疋の狐來りて。忠左衛門の前にひざまつきいふやう。こたくし事は。本郷四丁目糀屋の裏なる稲荷の悴なれども。いさゝか親のこゝろにたがひたる事のありて。此善親のもとへはかへられず。居所もこれなく。いと難儀に候へば。何とも申しかねたる事には候へども。召しつかひ給ふ下女をかし給へ。をむしのうち。此事をねがひ奉る。程なく友達のものゝわびにて。宿へかへるべければ。それまでの間ひとへに願ひさぶらふ。けしてなやませもいたすまじ。又奉公の間もかゞすまじければ。許容し給へとなげく。忠左衛門夢こゝろに不便に思ひ。なやまを事もなくばかしつかはもべしといふに。狐こよなうよろこ

ぶと見てさめぬ。忠左衛門いともふしぎなる夢をみし事よと思ひつゝ。翌朝起き出でゝ。下女をみれども。常とかはりし事もなかりけるが。晝頃より俄に此下女ゑたらき出だして。水を汲み。真木をゐり。米をとぎ飯をたき。常よりも出来かねし針ゐざまでなを。毎日かくのごとく一人にて五人前ほどのゐざをなし。あるひは晴天にてもけふは何時より雨ふり出だすべしとて。主人の他出の節は。雨具を用意させ。後ほどは何方より客人ありなど。そのいふ事いさゝか違ふことなく。その外萬事此女のいふごとくにて。大に家内の益になることのみなれば。何とぞいつまでも此きつね立ち退かざるやうにあたきものなりとて。其ころあるじ直の物がたりなるよし。此あるじと懇意なる五祐といふもの物がたりき

文政乙酉中秋朔於文寶堂

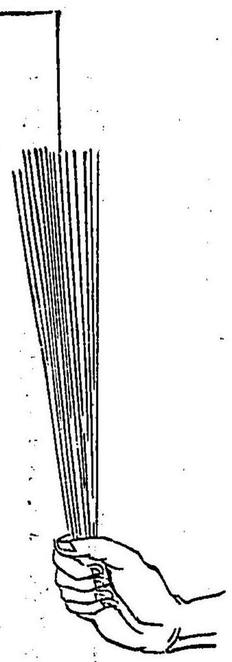
南窓食山人誌

○九姑課

上古卜筮ありてより以来。世に雜占ことに多し。鵶卜。巷卜。響卜。鳥卜の類。猶少からむ。吾邦もまたいにしへ太占（フトマニ）の卜を始として。竈輪（カマワ）の米占（ヨネウラ）などいふ多かり。（これらの類。和漢いと多し。集録して一卷とおさんことをねもへど。いまゝその稿を脱せむ）今左に記す九姑課も。亦雜占の類のみ

輟耕錄云。吳楚之地。村巫野叟及婦人女子輩。多能十九姑課。其法折草九莖。屈之爲十八握。作一束而呵之。兩々相結。止留兩端已而拜閼以占休咎。若纘成一條者名曰黃龍儻仙。又穿一圈者名曰仙人上馬。圈不穿者。名曰嬉窠落地。皆吉兆也。或紛錯無緒。不可分理者則凶矣。云々。愚按。俗謂九姑。豈即九天玄女歟。離騷經云。索琼茅以筵篿兮。命靈氣爲命卜。注曰。琼茅靈草也。筵小破竹也。楚人結草折竹。以卜曰篿。據此則亦有所本矣。予曾て戯れに。この九姑課を試み。兒輩に授けて。消日の具に充しむ。おかれども。猶うゐまなびの兒童等が。此文のみまてゝ。とみにえさとるまじく思ひ。今こゝにその詳なるさまを記す。所謂老婆心切にこそあれ

草ノ莖九本ヲ二ツニマゲテ
コレヲ握ルソノサマカクノ如シ



此ところを掌もてす。願ひ望みのことを祈りて。さて息を吹きかけて

後。二本づゝ結びつけ。終ゝあまる二本をゞむすびもして。のこし置く。これをもて左右へ引きゝくるゝ。吉兆なれば左の三様ゝなるなり。あしき時ゝ何かゝからぬ。こくらがりたるものいで来るなり

文政八年乙酉八朔

山崎美成記

臙日兎園

輪池

○爽言粉挽歌

蝦夷地大白山善光寺上人ゝ。智德のほまれ高く。靈厳寺中ゝ旅宿ありしうちも。都下の信者歩をこゝびて。歸依せしゝ。往西の期定めありて。こゝゝて遷化あり。人々舉りて惜みあへり。其夷地ゝ住まれし時。粉引歌を作りて。夷人を教化ありしとて。その歌をうつし贈りし友あり。かたゝらゝ爽言を譯しあるも。めづらしければうつして奉るものなりし

念佛上人ユホウンシンハイナ（粉引歌）
タハアンウタレ（是人々）
トナシモイシカ（早い遅いか）
ライホコハナキ（死ぬがいやなら）
キクル子ヘキ子（申す人おち）
ウヽセ子トハチ（假のからゞの）
ヤアキセイヘシ（蜉の脱がら）
チコブアフレハ（月も日も）
ヲマンセカトハ（往て生れて）
エマチホホタレ（妻や小供か）
ウトラ子レフツ（共ゝ念佛）
タレムシリカタ（此世ゝ必ヒ）
エハカシユカス（教を聞よ）
アリシユイライナ（一度ゝ死ぬぞ）
子ンブツキカン（念佛申せ）
センハラヤソカ（いつおん時ゝ）
ライハ子ヤツカ（死たるとても）
ヲシヨウコラチ（捨つるかごとく）
シヨモライコタレ（死せさる図へ）
ヤエラムアニ子（心のまゝゝ）
ヲマツフハ子チキ（かあいそおらば）
キイチキヒリカ（申すがよいぞ）
シヨモヤイホムシユ（反魂受けヒ）

ムシリホンハユ（假世分）　アヲラムトクテ（浄土へ生れ）
シ子ツフユフイナ（一つ蓮の）　カシケタオヽハ（菓子を乘て）
ヲホンノヌヤツ子（永く樂しみ）　シヨモライル子子（死ぬ事せむし）

右一則檜山坦島子におくる所なり。此上人の事を誓願寺にとふに。名に辨瑞文政七年十一月頃遷化せしを。火葬しければ。舍利多く出現せしといへり

○ものゝけのぬれ衣

或家（姓名にわざとあるさど）の家来に。半田久三郎と云ふ者有りし。もとに近國の酒とうじの子なりしが。女色にふけりて。所の住居なりがたく。江戸に出で大御番某の所に侍奉公に出でたり。とかく色慾にて身をあやまつべきさまなりしかば。主人不便におもひ。念比に教訓せしを。ふかくかしこまり。おもひて。おこなひをあらため。まめやかにつかふるさまを。今の主人見て乞ひうけぬ。もとより手跡達者に。算術もおろかなくさかしゆゑ出頭せしなり。ほかるにをとゝしの冬。故主の家に来り。こたくしことゝからざる災難に逢ひ侍り。こなゐた心をいたましむるよしをいふ。それにいかなることにやとひけるに。そのよしに申しがたくと。かたくをさびてかへりぬ。そのゝち又来りて。かのさいなんうらなひみたれば。祈禱せばよけなんと申をにつき。そのよし行ひければ。まづ心安き方にさふらふといふ。そのよしをにとひてもいとゞ。ほとなく年もくれぬとて。歳暮の禮に来り。かへる時にもこや御目にかゝり申すまじといふ。あるじとがめて。ことしに御めにかゝりがたしといふことか。たゞおめにかゝるまじといふに聞えがたしといひければ。そこつにて侍りとこらひてまかでぬ。年もかへりぬ。春のよろこびにいへも来るものゝ。日をふれども。まうでこぬに。いかゞと人してとふらにせぬれば。久三郎に身まかりぬといひこしたり。さるにても災難といひしに。いかなることにて有りしやと心にかゝりて。ありあひたる人としきけば。久三郎が事をとひたつねつるに。ある人いひけるに。そのことにれよくきれり。久三郎といへたてなくむつびつれば。我にのみかたりきかせたり。それに近きあたりに侍りし。年比の子もり女。久三郎にまたしくならばやとおもひけるを。そのとなりにつかへぬる若侍。聞きつけて。久三郎が艶書をまたゝめ。便をもとめておくりければ。あひおもふ中とてうけひきぬ。それより夜にまぎれて忍び逢ひけるが。ほどへて夜がれかちにやなりけむ。かの女ある日。久三郎に行きあひて。くねりかゝりけれども。久三郎に去

らざる事なれば。こたふるまも及ばをして行き過ぎぬ。そのゝち又行き逢ひたれば。ひたとどらへててなさず。ありしうらみをいひつゞくるまぞ。さてはまがなをたゞかられしことまやと心付きたり。ちかく〳〵とことふれども。さらまに聞きいれを。からうじて引きてなちてまかれたり。そのゝち。かの女あつしき病まふして。日あらを身まがりぬ。その夜より久三郎がふしどまに幽靈あらてれて。よもすがらくねりあかを。その比まや。かれ祈禱をしたりけん。少しはその去るし有りしかど。又あらてれて。責めさいなむ。久三郎堪えずして。つひまたかなくなりぬ。歳暮まに古主まに来りし時。申しゝ詞まよりて考ふれば。かの靈年あけばとりころさむなどゝいひけるまやといひあへり。この久三郎は。袋翁が弟子まして。うたを學びたるものなりとて。袋翁のもの語りなり

○隅田川櫻餅

去年甲申一年の仕入高。櫻葉漬込壮壹樽。但し一樽まに凡二萬五千枚ほと入れ 葉數〆七拾七萬五千枚なり。但し餅一つまに葉数ブ枚あり 此もち數〆壮八萬七千五百。一つの價四錢づゝ。この代〆千五百五拾貫文なり。金まに直し貳百廿七兩壹分貳朱と四百五拾文。但し六貫八百文の相場 この内。五拾兩砂糖代まに引き。年中平均して。一日の賣高四貫三百五文三分づゝなりといへり

○本所石原の石像　龍珠館

本所石原多田の藥師の前。石工の家まに。ある上下着たる男子と。かいどり着たる婦人の石像は。千萬坪を初めて開きたる者まに。千田庄兵衛といへるあり。家富みて十萬坪一圓まに。おのれが有となし。奴婢數十人つかひ。錢を鑄ることなど司れり。其盛なりしは。凡寶暦の頃まやとおもはる。庄兵衛總領の男子（名は開不及）まに妻をむかへて。兩人ともまに死す。其像を石まで作りたるなり。次男も後まに庄兵衛と名乗たり。其次は女子まして。名をゑんといふ。親庄兵衛庄十郎といへるものをゑんへ聟養子とし。後の庄兵衛は庄十郎の妹の清といへるを妻として。家を二つまに分けたり。後まには共まに落魄して。後の庄兵衛は出家し。庄十郎は竹本濱太夫といふ義太夫かたりとなる。今は其家遺概なし。元祖庄兵衛は。石像今も猶十萬坪まに存を。おゝもりたる松樹の中まに。小堂あり。座像まして頭まにガントウ頭巾を着。袴羽織まに手まに扇を持ち。脇差を帯びたる形なり。所の者はゴエイ堂といふ

○小右衛門火

大和國葛下郡松塚村は。東西まに川あり。西を大山川といふ。此堤まに陰火出づ。出てし初は。いつの頃よりとはいふと知ら土俗は小右衛門火といふ。百濟の興壹といふ墓所より。新堂村の小山の墓といふへ通

ふ火なり。雨のそぼふる夜に。分けて出づ。大さ提灯程にて。地をてなるゝ事三尺計といふ。與壷より小山迄に。四十町計にて。松塚の面の端に。其やしきなり。同村に小右衛門といへる百姓。此火を見とゝけんとて。彼所に至りけるに。火に北より南をさして飛び行く小右衛門に南より北に向ひて歩みよりたれば。此火小右衛門が前に来るとひとしく。急に高くあがり。小右衛門が頭の上を飛び越ゆるに。流星の如き音きこえたり。頭を越ゆると。又以前の如く。地を去る事三尺計にて行き過きぬ。一説に。此時小右衛門杖にて打ちければ。數百の火となりて。小右衛門を取り巻きけるを。斬杖にて打ち拂ひ歸りたりといふ。其夜より小右衛病を發して死す。因りて小右衛門火と名つく。此事凡百年計以前にもなるべし

此火年をふるにしたがひて。火の大さもやゝ減じ。出つる事も次第に稀になりたり。小右衛門死してより。人恐れて近く寄らざる故にや。今に遠望にては見るものなし。若たまゝ見ゆる時に。螢火計の大さにて。夫かあらぬかといはん程なりといへり。

此松塚村に。我食邑ゆゑ土俗の物語を能々尋ねきゝたるまゝに書せり

○天照太神を吳太伯といふの辨

或云。伊勢國天照太神を吳の泰伯と申を說。宋元の代より申す所にして。儒者よりこれを見れば。尤事跡に付きて左あるべし。神道者よりは此說を甚嫌ひ。堂上方禁中方にても不被用。とれも亦たあるべし。日本に大唐と各別の式を立つる故なり。然れ共仰きてこれを考ふるに吳の泰伯に離人ぞ。周室の高祖。戸稷の嫡子にて。二男に王季なり。后(ホノマヽ)を王季と聖人なり。王季の子。文王その子武王。周公何れも聖人なりと稱す。世子の說ありて。泰伯に弟の王季に讓りて。家を出でゝ去りぬ。是を三讓といひて。論語にも泰伯をば至德と稱せられたり。吳國へ去られしと。古書にもあり。吳國より日本へ渡せらる。吳國に南京なり。日本と近し。其頃に。日本に纔の島國にて。鬼畜同前の土民住す。彼等穴に住し。獵漁して食せしなり。泰伯九州日向國鵜渡の港へ舟を留めらる。其後高千穗の嶽に上り住し給ふ。日向に今その事跡殘れりと申し傳ふ。彼國にても王代の古質あり。耕作を教へ。人倫の道を教へ給ふ。仍りて人道開けて。國人尊敬す。素盞烏尊に皇の御弟なり。然れ共。御心に不叶事ありて。御教を止めて引き籠り給ふ。仍りて法令の教なし。人々難義に及び。これを天の岩戸に引き籠らせ給ひて。常闇の世といふ。然れば皆人なげき諫め申して。再び法令あるにつき。日月かゝやくといふ。彼渡海の時の御舟。是を伊勢國の松の御藏と申す神寶是

なり。農具を入れ持せたる。今は御藏に納めたり。仍りて御倉と申を其外。司室童子の畫あり。髮を亂して童形の笄をさす處の繪なり。是渡海の御船を寫すと云ふ。又内宮は三韓伏あり。三韓の文字を寫を。是御殿に質朴禮義をふまへさせ給ふ志なるしなり。これによりて。内宮を泰伯外宮を后稷と說き申をといふ。外宮は國常立尊と申すも此說あり。扨日本を姬氏國と。野馬臺の詩にも見えたり。周室又姬氏符合如斯

辨に云。此說古來より誤り來ること年久し。釋の圓月日本史を作り。朝に獻を。其書に泰伯を以て始祖とを。故に議論ありて。おこなはれをと云ふ事は。蕉了子が記せる史記抄路に見ゆるなり。且舊事記。古事記。日本紀に。此說に似たる事。實になし。濱成の天書記。廣成の古語拾遺。倭姬世說。鎭座傳記。御鎭座次第。寶基本記。類聚神祇本源。元々集等の書に。亦見えを。野馬臺の詩は。世俗に傳はるむかし。書籍の中。曾て見えを。梁の寶誌和尚の讖文なりといへども。誠か詩傳中にも見えを。假令寶作りぬるも。靈僧の詞證據とをるに足らを。神皇正統紀に。異朝の一書中に。日本は吳の泰伯の後なりといふ。更に當らを。思ふに唐土の人我邦の書をしらを。偏に商船俗侶の口に任せて。年代をも不辨。實非を不正。實を失ふと常に多し。固と我邦の人。國史に昔き故。姬氏國の言に迷ひ。泰伯を誣罔し。佛者は大日靈の名を以て。大日を附會し。是周禮造言の刑を免れざるの人。國神正直の教に背く。實に聖神の罪人なり。開闢の始。神靈を稱をるは。古今の常。予別に說あり。此に略す。或云。天地開闢の始より。我國有りて。大日本豐秋津洲と號し。我君の子世々統を續ぎ給ふ。所謂天照太神の御子孫なり。吳は泰伯より始まり。世の相おくること數千歲。日本何ぞ泰伯の子孫ならんや。史記吳の世家を按をるに。泰伯卒して子なし。弟仲雍立つ。後十七世夫差越の勾踐の爲に滅さる。此時我邦孝昭天皇三年に當る。夫差より前。吳の日本へ通ぜし事なし。異域の人我邦に來て。臣民となるは。則是あり。其氏族を蕃別といふ。この類甚多し。その中に松野氏あり。新撰姓氏錄に曰。松野は吳夫差の後なりと。是吳人我邦に來るの始なり。日本紀に據るに。應神天皇三十三年春二月。阿智使主（ノオミ）。都賀の使主を吳に遣し。縫女を求めしむ。ふたりの使者高麗に渡り。吳に至らんとをるに。道路をしらを。知る者を高麗に乞ふ。高麗の王則久禮波久禮志二人を添へて。鄉導とを。是によりて。吳に通ぜることを得たり。吳王五女兄媛。弟媛。吳織。穴織四人を與ふ。大織冠鎌足執政の時。百濟の禪尼法明對馬に來て。吳音に維摩經を誦を。よりて吳音を對馬讀といふ。吳音の源起なり。然れども。泰伯を天照太神といふ事。何れの書にも見えず。日本紀纂疏に。一條兼良公の說に。韻

書を考ふるに。姫は婦人の美稱なれば。思ふに天照太神は。始祖の陰靈。神功皇后は中興の女主たる故に。國俗姫氏國と稱をとかや。只字義によりて。事を論ずるときは。此類常に多し。蓋物極れば變じ。人窮すれば。則本に返る。天地の常道にして。古今の事宜なり。予兎園小說を作らんとも。裏底を叩きて考ふるに。奇說。新說諸君の筆に出づ。予が輩如之何ぞ筆をべき。於是本に返り。源を尋ね。天照皇の說を寫し。聊以て例の兎園に備ふと云ふ

中井琴民識

乙酉八朔

文政八年八月兎園會

京　角鹿比豆流

筑前御儒者井上佐市より。京都若槻幾齋翁へ之書狀與に

恠談らしく思召さるべく候へ共。實事に付。爲御慰申上候。去る六月初。弊邑管内宗像郡。初の浦と申る所の山圍に。煙草を作り置候處。何物かあらし候者有之候に付。百姓共申合。獼猴之所爲にて可有御座候間。逐拂可申とて。數十人一山に入候處。獼猴五十餘。群居候に付。扨社と能々見候處。中に長壹丈二三尺。圍一尺五六寸の大蛇を取り圍み。方さに闘居申候。猿ども口と手に。煙草の葉を持ち。蛇前猿にかゝり候へば。後猿蛇尾を曳。其闘累しなき樣に御座候故。所之獵師鳥銃にて。蛇を打殺し申候。猴は火音に驚き逃去申候。猴共蛇の煙草を嚙ひ候儀を能く存候事。驚入申候。扨其蛇を改見候處。腹大に張居申候間。開胎仕候處。猴子二頭呑居申候由。其所は治下より八里計の處にて。うきたる儀にては無御座候

是は去年申七月の書狀なり

七月念三

文政八酉八月　兎園之二

京　角鹿比豆流

○ほりこてふ

今はむかし。卯月のころ。洛の西なる木辻村といふ所に。數日遊びしことあり。其邊のわらはもちつゝじの實をとりて喰ふ。是をほりこてふといひ。また猫の耳ともいふとぞ。甚にがきものなるを。なれては味よきなり。猫の耳とは其かたちのよく似たる故なるべし。ほりこてふとは。いかなるかくいふなるや

解按するに。ホリコテフは。張子蝶ならん。ハホ音通なり。もちつゝじの實は。薄紅にして。聊蝶のかたちに似たり。しかれどもその片なるところ厚くして。且堅し。譬へば張粘の蝶の如し。ハをホと唱ふるは。越後。上野人のエをイと唱ふるが如く。西京の方言かもしらず。又猫の耳といふも。猫の耳の裏のかたに似たればなり。をべては猫の耳に似たるものにはあらぎかし

○奇遇

予がとし来恩顧を蒙る其侯の國足輕に山本郷右衛門といふもの（この絵中に。内足輕。外足輕とて。内外の足輕あり。此山本郷右門に。外足輕の上席あり）寛政四年壬子の夏四月。飛脚をうけ給はりて。江戸へ来つ。又みちのくへかへるをり。奥州街道鍋掛の驛につれなる坂中に廻國のもの親子ふたりゐたり。その父ちかごろ此にたりていたく病みにづらひつゝ。命も危かりければ。驛のものどもあはれみて。渠等が爲に坂中にいとあやしげなる小屋を造りて。しばらくそこに置きたるなり。かくてその病者の小むすめ往還にたち。旅人にまつきて袖乞をしたりける。郷右衛門これを見て。特に不便に思ひしかば。懐をかゝくりて。一片の南鐐に持ちあはしたる藥を添へ。此二くさを楊枝挿の裳に入れてぞとらせける。その後五ヶ年をかゝりを歴て。寛政八年郷右衛門は。又飛脚をうけ給はりて。奥より江戸の邸にまゐりたる逗留の程。朋輩にいざなはれて新吉原江戸町なる。丸海老屋とか呼ばれたる青樓に登りしに。夜はたゝや更の闌けしころ。この樓のわかいもの（むすこ。これを坡有といへり）高坏に果子を積みて。郷右衛門がほとりにもて来つ。こは清花さまよりまゐらせ給ふなりといふ。郷右衛門はこゝろを得ぞ。これはさる覺なし。人たかへならんといふを。わかいもの推しかへして。いな人たかへにはゐ候はぬぞ。口上もこそ候へ。おん目にかゝり度願ひ侍り。こなたへこそといはれしといふ。とさまかうさまおもへども。いとゞおかしき事なれば。果子はそがまゝにして引かれて。その部屋にゆきて見るに。素より見しれるあそびにあらぬぞ。又清花は郷右衛門をうち見つるより。ふも沈みて。しのびねに泣くむかりなり。しばらくして頭を擡げ。絶えて久しくなりにたる。君にはいよ〳〵恙もあらでおん目にかゝるうれしさよといふ。郷右衛門はほこゝろを得ぞ。抑おん身は何人の娘にてありけるやらん。見はすれたるか。しらぬと答ふ。その時きよ花は。楊枝挿の裳をとり出でて。ゐらはを見ゐもれ給ふとも。是をばおぼえ給はぬやと問はれても。またこゝろもつかぬ。これも知らぬと答へけり。そのとき清花辭をひそめて。いぬるとし鍋掛にて。御合力に預りし。そのをりに賜はりし楊枝挿にて侍るよし。その折からは箇様々々如此（シカく）と說き示すを。郷右衛門は聞きも訖らぬ。さてはとぞかりたゞめて曉りて。うち驚くこと大かたならぬ。流れの里に沈みたるたゞめをはりをたづぬるに。清花は又うち泣きて。君にはつゝむべうもあらぬ。ゐがふる郷は越後なる高田にて侍るなる。ふるさとにありしとき。母は長き病着（イたつき）にて。世になき人となりしころ。早損。水損何く

れとなく。ゐろき祥のみ打ちつゞきたる世をあぢきなく思ひぬる父い。歎きゐ堪へずや
ありけん。遂ゐゐらいをたづさへて。なき人の菩提の爲。廻國ゐとて出でしより。ゆくへ定
めぬ草まくら。旅ねいかなし鍋かけの。鍋ひとつだゐなき宿ゐ。病み臥しゝたりしゐが親
を。あいれまれたるおん身のたまもの。しかゝなりとて見せしかば。父い驚き。且感じ
て。かくまで慈悲ある人い稀なり。おん顔むせを見おぼえて。めくりあふ日のありもせば。
此よろこびを申せよと。かへをゝもいいれたり。その日よりして給いりし藥を用ひた
りけれ共。定業のがれがたくや有りけん。いく日もあらで。親い身まかり。ゐらいゝしらぬ
あちこちの人手ゐゐたり渡されて。里のあそびゐなりゐたり。そじめかの鍋かけゐて。お
ん身ゐあひしい。十四のときゐて。本の名をそよといへり。あぢきなき世ゐなからへて。そ
や十八ゐなり侍り。こよひい父の命日なれば。身あがりといふことをして。客をむかへや
こもりゐのこゝろざかりのそなへ物。廻向をしいる折もをり。思ひかけなく。恩ある君ゐ。
めぐりあひしいなき親の。こゝろざしゐて侍るめりと。いひつゝよゝと泣きゐけり。郷右
衛門い聞く毎ゐ。感歎せやといふことなく。わがうへさへゐ名のりしらしつ。そがまゝゐ
立ちわかれしとや。かくて件の郷右衛門い。文化のそじめより定府ゐなりて。江戸の邸ゐ

をり。おなじき二年丙寅の大火のころ。清花い年季関ちて。そが親品なる河崎屋平八と
いふものゝ宿所ゐゐたり。かの平八い乳母奉公の口入とかいふことを世ゐたりゐすな
るものゐて。郷右衛門が仕へまつる邸中ゐも。已前よりいて入をるよしあれば。この手
より清花が消息を居け来て。年季の関ちたるよしを告けられ。ながれの里をいでしかど。
なほうき草の根を絶えて。よるべの岸も侍らやなんど。いとゞあいれゐ聞えしかば。うち
も措かれや。訊ひ慰めしい。只一とたびの事ゐして。そのゝちいかゐなりけん。よくも知
らやと聞えたり。そがあひかたのあそびならねば疑いれじとの用心なるべし
そも〳〵この一條い。文化十三年丙子の秋。閏八月廿五日かの藩の醫師櫻井立安といひ
しもの。老君の夜詰ゐ侍りて。しか〳〵と申しゝゐ。さるをちをも捨て給いねば。その孝信
を感嘆のあまり。近習の人々ゐこゝろ得させて。次の日山本郷右衛門を遠侍まで召しの
ぼして。透見をしつゝそのよしを問ひたゝさし給ひしかば。郷右衛門いおそる〳〵有り
つるまゝゐまうしゝとや。その折の聞書のことさら奇談なるべしとて。わが父ゐ見せ給
ひしを。おのれそひうけて。をさめおきゐき。當時家嚴の贊歌あり。冊子のしりゐ書かれた
り。可否をばしらや。贊ゐ云

離火宅墜火坑　鍋掛猶如熱閻場　一潮恩一汐信　圓鰕此苦海慈航

北海老やつるまもるまたり鍋掛のふたゝびあひぬをくゝれし身ゝ

本書ゝ。只その意をうけて。反ばゞながら文を易へたり。贊ゝちなみまもしるをのみ。嗚呼。風流の藪澤まも。かゝる忠信孝女あり。いと憐むべきものまなん

琴嶺識

文政八年乙酉八朔

○根わけの後の母子草（足編頗以三傳奇筆意一。雖レ然言則皆實事也）

文政四年辛巳の春二月晦日の黄昏ごろ。元飯田町の中坂まゆきたふれたるおうな（老女）ありとて。これを觀るもの堵の如し。この日。自身番屋まつとひゐたる當番の町役人等。定番人を遣して。その體たらくを見せけるまも。旅行ものとおぼしくて。無下まも老髏（オイサウズ）ひたるが。長途まも疲れ。足痛みて一歩も運ばしがたしといふなり。これまよりて。町かゝえのものまも春貧して。やがて番屋まも扶け入れつゝ。事のやうを尋ぬるれば。答へていゝく。婆々ゝ奥州白川の城下中の町なる宮大工十藏が後家まして。名をしげと呼ばるゝもの。今茲ゝ七十一歳まなりぬ。良人十藏が世を去りて後。十三ヶ年已前文化六年の春。わが子源藏といふもの逐電して。ゆくへもしらせぞ。人傳まも聞ば。江戸まありといひまき。家まゝなき人の前妻（モトクヅ）の子どもゝあれど。勇魚取うみまあらねば孝ならぞ。日毎の口舌いぶせければ。世まある甲斐もなき身なり。いかでわが子の在處をたづねて。あゝばやと思ひさためしゝ。九ヶ年已前の事なりき。かくて文化十年の春のころ。みちのくより。あくがれ来て。江戸まる留まること半年ばかり。四里四方の外。近郷まで月毎日毎またづねしかども。夢まだもあふよしのなければ。さてゝ江戸まゝあらざるならんと。やうやくまも思ひかへして。いよ〳〵廻國の志念を堅うし。東山西國にへばさらなり。南海。北陸おちもなく。凡六十六箇國の靈山靈地を巡禮して。過去まゝなき人の菩提の爲。現在まゝ命のうちまるが子まも逸りあゝしめ給へと。念ぞる外まわざもなく。乞食してゆく旅なれば。人の情まあふ日ゝ稀まて。露まる宿り風まる梳り。あるときゝあり磯のなみ風まる吹きぞさまれて。其終夜夢もむぞば。又或ときゝ深山路の雪まる降りとぢられて。つく竹枝の節も居かず。百折千磨の艱苦を歴たれど。是までゝ一とたびも病みまづらひしことゝなく。旅ねをること九年まる及べり。今ゝ既まる巡り盡して。廻國をべきかたもなければ。ふたゝび江戸をこゝろざして。岐岨路をくだり。甲斐が峯をうち逸り。よんべゝ兩郷（フメゴ）の渡りとかいふ。川邊のあなたなる里まる宿とりつ。さてけふ江戸まる來つるなり。かゝりし程まる。あの御坂（ミサカ）のほとりまて。俄まる足の痛み出でゝ。一歩

も運ばしがたければ。思ひを倒れ侍りきといふ

按ずるに。ふたこの渡りに。江戸を距ること西のかた四里許にあり。この地は甲州街道にあらぢ。大山道なり。かゝれば甲斐より相模路を巡りて。江戸へ来つる成るべし

町役人等よしを聞きて。心地にいかにとたづぬるに。足の疾るのみにして。こゝちはつねにかはらぢと答ふ。江戸にしる人ありやと問へば。いな知る人とては侍らざれど。八町堀なる松平越中守さまに。國屋敷にておはしまさなり。（さとび言に。故郷の領主を國屋敷と唱ふ）かしこへ送らせ給へといふ。これにより先その腰につけたりし風爐敷包を解かして見るに。九ケ年已前ふる里をたち出づるとき。十藏しげ等が菩提所なる。何がし寺（寺の名は忘れたり）より書きてあたへし通り手形とかいふ證文一通あり。濕風壓埃（レフキホコリ）に汚れけん。紙中は茶をもて染めたる如く。いとふるびたりけれども。その印章は疑ふべくもあらぢ。この他錢八百文と。布の敝襤（ボロ）のみありけり。そのいふよしと寺手形と。既に吻合するをもて。番屋の奥の間に臥さしめて。藥をあたへ。且つ夕餉をたうべさせなどする程に。日は暮れて。酉の初刻も過ぎたるころ。武家の中間とおぼしき男。自身番面におとなひて。やつかれは嚮に主用の使にたちて。こゝの中坂を過りしとき。ゆきたふれたる老女を見たり。こゝろにかゝるよしもあれば。つ

いちに問はまほしかりしかど。火急の使なるをもて。時の後れんことのをしくて。思ひながらに打ちすぎにき。今そのかへるさなるにより。中坂にて人に問ひしに。番屋へ扶け入られて。こゝにありとぞいはれたる。そのおうなを見せ給へといふ。このときしげはまどろみたるを。町役人等呼び覺まして。そなたのゆかりの人にやあらん。見まほしとて。只今来にたり。たいめんせよかしといふ程に。しげは忽ち起き直りて。それわが子源藏ならぢ。やよそなたは源藏か。源藏にあらぢやと。せはしく問ひつゝ跪よるを。町役人等推しとゞめて。きのみせきてい事もわからぢ。心をしづめて問へといふ。そのとき件の中間は。もし火をさし向けて。とさまかうさまうち見つゝ。わが母に似たれども。年あまた經し事なるに。いたく老衰したるをもて。定かにはいひがたしといふ。町役人等これを聞きて。しかりとも渠みづから奥州白川中の町宮大工十藏が後家。名はしげと告げたりしことの由の分明なるに。をさなき時に別れても。親の名までを忘れはせじ。忘れやたつると詰められて。さん候。その名に違ひなけれども。世には又同名異人のなきにしも候はぢ。又いつはりて利をむかるものしもなしとすべからぢ。身につけたりしそが中に。證據となるべき物などの候はぢやと問ひかへされて。町役人等諾なひつゝ。かの寺手形をひらきて

見すれば。見つゝ小膝をたたと打ちて。ゴろくも疑ひつるものかな。ゴが母ゴ相違候ハぞといふを。おげハ聞きあへぞ。おからばそなたハ源藏か。源藏ゴこそ候なれと。名のれば おげハ跪まつハりて。抱きつきつゝ涙ぐみ。やよ源藏よ。和郎ゴ逢ひたい〳〵と思ふばかりゴ。九ケ年このかた。日本國中うち巡り。いくそばくその艱難苦勞も願ひかなふて。うつせみの息のうちなる今宵いま遭ひ見ることの歡しさよ。やよ源藏よ。顔を見せよ。そなたハをさなかりし時。左の目ぶちゴ腫物いで來し。その折ゴ。眼の中へ針二本まで打たせし事あり。その針のあと。今もあらん。こちらをむきて見せぞやと口說たてつゝ。又把りおめて。涙ハ雨とふりそゝぐ。その歡ハなか〳〵ゴ。譬ふるゴ物なかるべし。天地をがみ。町役人等をひとり〳〵ゴふしをかむ。慈母の衰歡無量の恩愛。今さら勝ゴ銘じけん。源藏もむふり落つる涙を袖ゴ掘きかぬれば。人のみな泣かぬハなかりけり。此とき おげが有りさまハ。和漢巨筆の稗官なりとも。寫しとらん事易かるべからず。又俳優の上手なるも。よくまねんこと難かるべしと。後ゴぞ人の評しける。かくて源藏ゼ町役人等ゴうちむかひて。思ひかけなく。母親ゴ名のりあひ候ひしハ。御町内のみかげゴよれば。よろこび言葉ゴ盡しがたし。やつかれハ十二歳のときより。親ゼらからゴ引きゴかれ。ふる里白川ゴ程

遠からぬ其村ゴて。人となりしが。十八歳のとき。故ありて親ゴも告げぞ。その地を去りて。江戸ゴ足をとゞめしより。今茲ハ三十歳ゴなりぬ。手かきもの讀むこともおらねば。中間奉公おつるのみ。この春ハ下谷なる戸田和泉守殿ゴをり。けふしも守ハいさゝけながら慈あらせ給ふゴより。翌の日の當御番を同僚がたゴたのませ給ふ御狀使ひをうけ給ハりて。其處へとていそぐ黃昏とき。こゝの中坂を過りし折。倒れし母をわが母ぜとそしらぜながらもかいま見しハ。得かたかるべき幸なりき。その時。母の足いたみて。彼處ゴ倒れ臥さゝりせば。よしや途ゴてゆきあふとも。面わをれせしことなれば。迭ゴおるよしなからんを。事みな不思議ゴ候とて。感涙を流しつゝ。よろこびを述べしかば。町役人等うち聞きて。しからば今宵ハ此處ゴ。老母を留めおきたりとも。けしうハあらぬ事ながら。母御のこゝろを推しむかるゴ。和殿をこなち遣るべくもあらぜ。引きとらんといふ宿あらば。町内より駕籠を出だして。只今送り遣すべしといふゴ。源藏歡びて。下谷久右衛門町なる番組宿屋。越後屋何がしといふものハ。やつかれが親品なり。この處まで送らし給ハゞいよ〳〵幸ならんといふ。そも〳〵この源藏ハ。世ゴいふ宿屋ものゴして。渡り中間なりといへども。物のいひざまさかしげゴて。身の皮もきたなげならぜ。尚己の時むかりな

る松坂縞の布子を着て。胴かねしたる脇挿を帯びたり。扨しか〳〵としげゝ告ぐるゝ。引きぢらされし敝襤褸(ボロキレ)などを。いとをしくや思ひけん。やよ源藏よ物とり遣をな。包め〳〵といひしかど。源藏ゝ恥ぢらひてや。敝襤褸をば包みかねたれば。町役人等ゝさこそと猜(スイ)して。定番人ゝ手傳ゝせ。物おちもなく包まして。かの寺手形と錢八百を。源藏ゝ渡しけり。その辭し去らんとせしときゝ。既ゝ齡のかたぶきたる。或ゝ子共を旅ゝあらせて。親のあれを知りたりける。町役人等一兩輩。又源藏を招きよせていふまでゝあらねども。九ケ年心力を錯されし。母御の辛苦を思ひくみて。孝養をな怠り給ひそ。渡り中間ならずとも。さまで歴がたき世の中ならんや。大都會の忝さゝ。小商をしたりとも。只一ともしらの母親を養ふよすがなからずやゝ。勉め給へと諭せしかば。源藏ゝ感謝ゝ堪へぬ。しかこゝろ得て候なり。故あることゝゝいひながら。十三ケ年ふる里へ。おとづれもせぬ。ゝが母を見ゝをれしまでゝなりゝたる。面目もなく候といらへて。やがて母親を扶けて。駕籠ゝ乘しゝ。その身ゝ間近かくつきそふて。下谷をさして出でゆきけり。かくて夾中の比おひゝ。その駕籠のものかへり來て。かの越後屋何がしがよろこびの口狀を。町役人等ゝ傳へしとぞ

予ゝ間近きゝたりゝて。これらの事のありとしも。絶えてしるよしなかりしゝ。そのあけの朝。河越屋政八といふもの。柴の戸ゝ音づれて。緊要の一條を告げまゐらせんとて。詣來(マウ)しなり。例の虚病をおこさぬゝ。たいめんを允し給へといふ。こゝろ得かたく思ひながら書齋より出でゝ。よしを問ふゝ。政八がいゝく。きのふいとめづらかゝも。あゝれなる事の候ひき。その故ゝ云々と。前條を舉けて說くこと一遍。やつかれ今茲ゝ年番ゝて。しかもきのふゝ當番なりき。これゝより從婆々しげゝ素生を問ひしも。又源藏ゝ問對せしも。大ゝたゝやつがれのみ。かゝればこのくだりゝ號きて。かくつまびらかなるよしを誰か亦爾ゝ告ぐべき。又おきなゝらぬして誰かよく後ゝ傳へん。願ふゝ贊して給ひねといふ。予感嘆のあまり。敢ていなまぬ。去ばしりち案じて

面壁ゝあらで九年の旅ごろも。子を思ふ外ゝ一物もなし

又おなじこゝろを

死なてあひぬ片山の手の飯田町ゝ。ふせる旅人あゝれ親と子

このふた歌をたゝきくゝ書きつけてとらせしかば。政八ゝ受けよろこびて。いとまごひしてまかり出でゝけり。是より後も。日ゝ月ゝをほとし年ゝ。事のしげくていまだ筆ゝゝ

載せざりしを。けふのまとゐの料として。聞きつるまゝにしるすのみ

文政乙酉秋八月朔賀

潢南先生誕辰良節。無披講於兎園社友諸君子席末

玄同陳人解撰

○蓮葉虛空に翻るの異

我君領内三州渥美郡鷲田村にて。蓮葉を乾しおきたりしに。故なく虛空に翻り。且白鶴一隻陟降せしによりて。村人等が新文の寫

當村御百姓三右衛門磯八と申す者。菱池にて六月十一日蓮葉を取り。村方字毛野と申す處へ干し置き候處翌十二日朝四時比より。壹葉貳葉づゝ虛空へ上り。其日晴天にて。風もなく候處。晝九時比に相成。蓮葉凡百五六十葉。一同に上り。尤中には落ち候も有之候へ共。多分虛空へ上り。二三寸迄乙相見え候へ共。其末は不相見。其中より白鶴壹羽下り來り。輪を懸け虛空へ上り。小鳥位迄は相見え。末乙一向相見え不申候。又程なく。東方より白鶴三羽來り。先の如く同所にて。是亦輪を懸。貳羽乙東方へ飛去り。壹羽乙虛空へ上り申候。餘り不思議之義に奉存候に付。此段御注進申上候以上

鷲田村組頭　藤兵衛印

同斷　彦六印

庄屋　助六印

文政八酉七月六日

木村甚助様

富田東作様

塚本平左衛門様

予此奇事を以て出羽の門人佐藤惟德に語る。惟德云。我國も亦一奇事あり。凡べて人の死する時。十に七八たましひ出でゝ。或乙故人を尋ね。又は親戚を問ひき。何もなくして死を。その來る時。只黙して座するのみ。是と語らんとするに。更に答なし。又死後にして出づるも。亦これありといへども。多くは是生前の事なり。生前これを魄（カシラヒ）といひ。死後是を幽靈といふ。是又致知格物の至らざる所なり。予何の故をしらぬ。敢問。何の謂ぞや。雖然。人により性により。幽靈と魄とにあふ人あり。不逢の人ありと。惟德語りき。予亦未この二事

に於て。敢て說あることなし。姑く疑を存して。以て後の君子を待と云ふ

○藪に香の物の世話

尾州公御領分尾張名古屋を過ぎ。琵琶の市といふ處。毎朝青物市立ち。名古屋の町へ出づる橋あり。琵琶橋と云ふ。是より少し行きて。津島海道土手を右へ壹丁半程に。蓬手の森。反魂香の森あり。貳ケ處ともに名所なり。此處を左りへ下りて。角に藪あり。此數の中に。妙心山正法寺といふ曹洞宗の禪院あり。熱田明神の幽跡の寺と云ふ。此藪の中にあり。此處に四石入の瓶あり。然るに。此瓶地中に埋り。此中に瓜茄子二つ三つづゝ前の川にて洗ひ。彼瓶に入れて通る。瓜茄子荷ふもの。直に通る時は。荷重くして上らず。依りて彼商人に。所のもの此明神の望み給ふ由を告げて。前の川にて洗はせ。瓶へなげ入れさせて通を。荷はかろくなりぬ。鹽を荷ふものもかくの如し。手によりて瓜茄子多く。鹽の少き時も有りといへども。鹽かげんいつも替ることなし。誠に奇怪なるべしと云ふ。世の諺に。藪に。香の物と。是より云ひ初めたり。扨此香の物は。毎年六月四日。此瓶の口を明け。五日の朝熱田大明神の神膳に具へて。五日の朝御膳過きて。尾州公へも獻じ。尾州公より江戸將軍家へ獻上のよしなり。此香の物の在所は。海道郡蟬須賀村と云ふ。香の物の瓜茄子の多少によらず。鹽壹斗有之。瓜茄子千斗有りても。瓜茄子百貳百位に。鹽五合三合にても。其風味鹽かげんは。少しも替らず。是亦奇事といふべし

文政八乙酉九月朔　　中井乾齋認

解云。この藪の香の物の事は。享和中。予目擊して。蓑笠雨談に誌したり。この說と頗異なり。宜しく參考すべし

○慶雲　彗星

吾友外岡北海。ひと日予を訪ひ來りていへらく。おのれさきの日。ゆくりなく慶雲を見ることを得たり。そのよしいさゝかをるしたりとて。予に示されし筆記に。去る八月五日午の一刻ばかりに。小石川傳通院の境内を通りかゝりしに。稻荷の祠前華表の前に。北丘二三人集まりて。大空を打ちながめゐたり。已近よりて何事のありて。空をばながめ居るぞと問へば。北丘の云ふ。あれ見給へ。五色の雲の棚引なり。昔もの語にのみ聞きつるを。今見ることの有りがたさよ。今少し早くおいさば。色こき所を見給はんものを。さりながら又も色こくなり侍らんかなど。とり〳〵いへばおのれ何をいふとあやしみつゝ。木の間より伺ひ見れば。げに北丘のいふ如く。よのつねならぬ一村の白雲。日輪の傍に。長さ十丈

あまり。廣さ四五丈もあらんぞらんとおぼしきが。薄く棚引きたるを。日光に映じて。たちまち紅をときて流せるがごとく。其麗しきこといはんかたなし。然るに。その紅雲の裏より。紫黄青緑など。えもいはぬ麗しき色并起りて。譬ばゞ鮑貝の彩を麗しくなしたらん如くにて。見るが内に淡く濃く。出沒變化なすことかぎりもなく。目ざましなどいふも中々おろかなり。穴うるはし。穴うつくしと。我しらぎよび出でられ。あはれかゝる折。相知る人もがな。呼ひとゝめて。倶にめづべきものをとをしまれけり。抑。此雲何地行くらん。いでその終る所まで見とゝけむやと。打ちまもりをりしに。纔二刻斗におのづからうせくなりもて行きて。そてには只一村の白雲となりて。其所をも去らぜ。消え失せにけり。彼此丘に此雲をしめ何方より来りしぞと問へば。此丘の云。此雲外より出でこしにはあらざるべし。已が見つけし時も即こゝにありたりといへり。いかにも珍敷ことなれば。必外にても此雲を見し人あらんと思ひて。後人々に問ひものすれど。さることありしといふ人にはつになかりしとて。日本後紀などを引用せり。しかれども。予をもてこれを見るときは。我國に慶雲あらはるゝことは。文武天皇大寶四年五月。西接上慶雲見云々。改元爲慶雲元年と。史に見えたるぞ始なるべき。これより後もしば〳〵なり。北魏成帝興光元年二月。有雲五色所謂景雲太平之應なり。また吾邦。稱徳天皇天平神護二年八月。改元神護慶雲。詔に甚奇久異爾麗伎雲七色交天立登とも見えたり。北海子も又五彩の雲をもて慶雲とせり。しかはあれど。漢書天文志及び。延喜式治部省祥瑞の條にいへるものを按ぜるに。若煙非煙。若雲非雲。これによる時は。五色のいろどりある雲は。けだし慶雲にあらざるに似たり。又この比。人その夜ごとに。彗星のあらはるゝよしいひもて傳へ。それ凶年のさがにやなどいへり。按ぜるに。彗星の名始めて春秋に見えたり。しかれどもその狀をいはず。其狀を記したるは。甘氏が星經などや始ならん。其後相承けて妖星とし。これが應をいへるもの漢儒に至りて。尤甚しといふべし。苟くも年をへたりて。これが應をもとめば必應ぜざる者なからんや。牽強といひつべし。今その一二をいはゞ。漢土の事は。歴史中歴々雲。しかれども五代史司天考に云。蓋聖人不絶天於人。亦不以天參人。絶天於人。則天道廢。以天□人。則人事惑。故常存而不究也といへり。知言といふべし。荷田氏も又云。蓋古来天變地妖を以て。禍の前兆とせるは。人君を恐れしめん爲なり。凡人恐るゝ所なければ。其行ふ所矩を踰ゆるに至る。縱令は臣は君を恐れ。子は父を恐れ。弟は兄を恐れ。婦は夫を恐る。その恐るゝ所ある故に。行ふ所矩を踰えぞ。若矩を踰ゆることあれば。縱令は御家人以上は。

國主に至るまでも。上よりこれを刑せられ。祠官。僧尼に寺社奉行これを刑し。農民に勘定奉行これを刑し。商家に町奉行これを刑せ。倍臣及私地の農商も。各その本主。領主よりこれを刑し懲せが故に。率土の濱。悉く法を犯せものなし。唯天子に至りては。恐るゝ所なく。矩を踰え。法を犯しても。纔にこれを諫むる者あるに止まる。然れば無道に陷り易し。故に妖孽を以て。これを恐れしめ。德を修めしむ。大戊の桑穀。高宗の雊雉以下皆然り。其章云。天下不德なる時に。天變地妖頻に臻る。又云。其星見るゝときに。兵喪あり。其星見るゝときに。水旱ありなどいふ類多端なり。其實を論ぜに。天に自天。人に自人。人の不德天に拘ることなく。天の異常また人に及ぶことなし。古書に天と稱せる者に。皆物の自然にして。人力の爲すこと能にざる所を。天に托して。これをいふのみ。書の辭典に。惟時亮天功。大禹謨に。天降之咎。詩の大保に。天保定爾。節南山に。昊天降此鞠訩などいふ。以下六經に。天と稱せるもの。みな然りといへり。見ん人其これをおもひねかし

文政八年秋九月朔

山崎美成識

戊月兎園

○鐘馗

輪池

天におのつから天。人におのつから人云々 解云。是破道の說。君子の言にあらず。辨あり。それ別にあるべし

鐘馗を辨ぜし書。升菴文集七。脩類草木日知錄。通雅正字通等。皆人の知る所なり。清の趙翼が陔餘叢考に至りて。詳悉せり。その要を取りて。こゝに記せ。六朝古碣に。鐘馗二字あり。是唐人にあらずといへり。北史魏堯暄本。名鐘葵字辟邪（湧幢小品に。鐘を落に作る）おもふに。葵字傳へ訛る。提鬼之說。こゝにおこれりといふ。其餘。宗慤妹名鐘葵（沈括が筆談に。葵を馗に作る）。魏文帝時。揚鐘葵又張袞之孫。白澤本名鐘葵。于勁亦字鐘葵。孝文時頓邱五寿鐘葵（正字通に。馗に作る然れども。喬鐘葵の類。趙皆馗に作りたれば信じがたし）北齊武成時。官右宮鐘葵。後主緯時慕容鐘葵。隋煬時喬鐘葵。隋宗室處綱之父名鐘葵。又別に。殷鐘葵あり。唐の時。王武後有將張鐘葵など。かぞへたてたれども。六朝古碣と。沈括筆談。二鐘馗の外に。みな葵の字を書きたれば。おのづから別なるが如し。さて天中記。唐逸史を引きたる明望の夢に入りし終南山の進士鐘馗の外。唐に張鐘馗といふ有り。龍飾淨土文言。唐張鐘馗殺雞爲祭。忽見一人緋衣驅群雞來叫云。啄々四畔上啄兩目。流血受大痛苦とみゆ。これ王武後が將といへ。おのづから別人にて。賤民とみえたり。されば正しく馗の字を書きたる。六朝以來四人なれども。淨土文のごとき人も。しらざる賤民に。同名有る時に。猶幾人も有るべきなり。然るに。多く鐘馗に。名か字なるを。進士のみ鐘に姓。馗に名なるべし。たゞこれを異なりとも。要するに。六朝に鐘馗あるときく。唐にもじまるにあら

もといひ。張說が畫。鍾馗を□をる表開元より先立ちと有りといひて。鍾馗夢に入る事を疑ふ。又唐逸史世に傳へらざれば。諸儒疑ひて妄誕とす。按ずるに。宋の郭若虛が圖畫見聞志（佩文韻府に引く）に。吳道士畫。鍾馗衣藍衫。鞾一足。眇一目。腰笥巾首而蓬髮以左手捉鬼。以右手扶其鬼。自筆跡遒勁實繪事之絶格也とみえ。正字通に。宋禁中舊有吳道子所畫鍾馗。卷首唐人題云。明皇開元講武驪山還宮上不懌瘧佐夢大鬼。制曰鬼命吳道子畫之などみえたれば。明皇吳道子に畫かせられし事に實なり。又土上老君明皇の夢に入りて。直容の所在を告げしかむ。夢真容勅を碑に建てられしも。開元中の事なれば。邊士の夢に入りし類。推して知るべし

終葵。鍾馗同音通といへども。終葵と名付けしに。椎の義を用ひ。鍾葵と名付けしに。鍾に祭器の義。葵に百菜の長といふ義を用ひしもあるべからず。大鍾を姓となさむ。馗に九逵の義にても有るべし

然るを揭顧散人幽明に通ずる事あたにぞして。たゞ目前の端直をいふにより。夢の跡を破して。鍾馗をも椎の義なりとも。實に然るべきや。予は荷擔をかたしといふ

◎遊女高雄

中す川は中洲川にて則三浪の事なり。假まで も中洲といふをもて知るべし

著作堂の珍藏にみちのくざらしといふ有り。それは陸奥の太守の醫師工藤平助が女の。同藩只野氏に嫁して。仙臺に在りしが筆記なり。その中に。高雄が事跡をあるしたり。世の妄說を正ずるたれり。曰。昔の國主たか尾といふ遊女を。こがねにかへてくるゝを出だし給ひて。御たちまでもめし入れられぞ。中す川にて切りてふらせ給ふと。世の人思へるは。あちぬゝとなり。是はうた上るりにおもしろく事添へて作りなどして。やがて誠のごとく成りしものなり。高雄て。やとり御たちにめしつかはれて。のち老女と成りて。老後跡をたて終はりしは。番士杉原重太夫。又新太夫と代々かはる〳〵名のりて。（禄米六百石）今目付役をつとむる重太夫て。その末なり。只野家近親なる故。ことのよしはあれり。杉原家にても。世の人あらぬことをまことしやかにとなふるはをかしと思ふべけれど。我こそ高尾が末なりと名のらんにも。おもたゝしからねど。おしたまりて聞きながしをるとなり。これをいと珍らしきことゝおもひて。たつねおきけるに。この北。ある人のもとより。その法號葬地等の書付を著作堂の主にしめさんとて。こゝにのを。その記に曰。仙臺の人なるが。し遊女高雄が墓碑をもりてもちたるを。四谷にをめる醫生淺井春昌といふものゝうつしたりとて。島田某の見せたるをあるを

二代目　享保元丙申年

○　淨休院妙讃日晴大姉

三巴の紋十一月廿五日

杉原常之助

逆修　源範清義母

行年七十七歳

干時正德五年二月二十九日

右の碑。仙臺荒町法龍山佛眼寺ニ在り。仙臺の人のいふ。高尾實ハ國侯ニ從ひて。奥州ニいたる。杉原常之助といふハ。義子ニて。名跡をたて給ひたるニいひ傳ふ。享保元年七十八歳ニて天壽を終ふといふ

綱宗朝臣ハ。正德元年六月四日卒去。享年七十六歳。仙臺瑞鳳寺ニ葬る法號雄山全威見性院といふ

○奇夢

いぬる八月廿五日の夜半ニ。日向稱名寺（淨土眞宗ニて。廣國山と號す。余が菩提所あり）といへるニ。盜賊入りたり。このごろハその邊處々ニ賊の入るよし。人々心を付くる折なりしニ。其夜納所の僧義山といふもの。いかゞしけん。子の刻過ぐるまでいねられぬありしニ。丑の時ばかりニぬるともしらぬまとろみし夢ニ。賊四人おし入り。各手ニ白刃を提けて。義山をおし伏せ。刃をつきつけ。住持の居間ニ案内せよと責めらるゝと見ておとろきさめぬ。總身ニ流せし汗をぬくひても。驚くむねハなほおちつかぬ。かゝる時ニハ。用心ニしくことなしとて。火そくしてあなたかなたを搜索のいとまなさニ。此事を記して。けふの兎園ニ充つるニなん

乙酉九月朔

海棠庵誌

○鼠の怪異

今茲（文政乙酉）四月。奥州伊達郡保原といふ所の大經師。松聲堂（俗稱稻井重吉俳名萬年）の物語ニ。おのれ事ハ南部の産ニて。此春親族の方より消息して。世ニめづらしき事をしらせおこしたり。それハ南部盛岡より。凡二十里許おくニ。福岡といふ所ニて。そこニ青木平助といふ舊家あり。其家作のふるき事。五六百年前ニ造りなしたるが。そのまゝニて代々住居來れり。げニ其家今やうの造りざまニあらぬ。いかニも由あるものゝ末ならんとおもいるゝとなり。しかるニ。此春二月の比。あるじ兵助の夢ニ。據の上ニ一塊のほのほ炎々ともゆと見て。驚きさ

めて。ふと仰き見れば。こいそもいかゝぞや。夢ゝ見たるゝつゆ違いむ。おのれが寐たる上の棟ゝ。火燃えゐたりければ。あゝてふためき起き上り。手はやくてしごをものして。手ごろなる器ゝ水を入れ。水をそゝぎかけなどしければ。忽ゝ火いきえて。させる事なし。あるじとゝろく胸いやゝおづまりしかども。いかなることゝて。このあやしみのありけるゝやと思へば。さらゝ心安からねど。かゝる事を家の内のもの一告げしらさば。さこそものゝけたゝりならんといひのゝしりてうるさかるべし。何ゝまれ。今少し試みむやと。ひとりむねゝをさむるものから。その曉までいもねられであかしゝとぞ。かくてあけの朝起き出でゝ。例のごとくうがらうちよりて。朝いひたふべんとをる折。かの宵ゝことありし棟とおぼしき處より。物のたたと落ちたり。思ひもかけぬ事なれば。女ゝらべなどいあれとさゝぎて飛びのきつ。あるじいい心ゝかゝるふしもあれば。さてこそとて。きとそのものを見とむるゝ。いと年ふりて。大きなる鼠のおなじ程なるが。その數九つ。尾と尾とつき合せて。ぢらふだの如くまろくなりつゝ。かたみゝ手あしをもがきて。かけりのがれんとをるなりけり。じかるゝ。その鼠いかゝもがきても。その尾と尾つなかりてゝなれぞ。只ひたをちゝかけ出でんとをるのみゝて。くるゝ〳〵とおなじ所をめぐるのみなれば。人みなおそれおどろく中ゝも。亦興ある事ゝおぼえて。こいけしからぬ物なり。いかゝしてかくまで。同じ鼠の九つよくも揃ひけん。それをらあるゝ。尾と尾のたなれぬに。いかなる故ぞとのゝしりつゝ。とりてなしてゝがしやらんか。うちも殺さんやなどいひどよみて。ゝりきやうのものをもて。兩三人左右より引きゝけんとをるゝ。得たなれぞ。こいおかしき物なりとて。つよく引きたて見れば。あやしむべし。此の鼠の尾と尾のからみあひたる事。あじろをくみたらん如くゝて。つよく物せば。志り尾もぬけんずらんなどいふ人もあれば。そがまゝゝ。置きたるをちかきゝたりの人々聞き傳へつどひきて。扨もめづらしきものを見つるかな。われらゝ得させ給ひとて。竹の先ゝ引きかけて。處々もちあるきて。なほ人ゝ見せたる果て。川へや流しけん。土中ゝや埋みけん。そのゝちゝ又怪しきことの聞えなば。なほ又告げまゐらせんなどいひおこしたりと語りしよし。友人の傳聞ゝまかして。けふの兎園の數ゝ入れ侍るゝなん。

○佛像厨籠の古書

野州西鹿沼村（當時番町敬主膳殿知行所おり）の畑の中ゝ。古堂あり。其後堂ゝ釋迦の木像あり。此みくらをぬきて見る時に。立どころゝ盲目となるといひ傳へて。誰もみくらを拔きて見るものなか

りしに。蒲生伊三郎といへる儒者。その寺へ斷りて。佛像のみくらをぬきて。腹の内へ手を入れさくり見るに。一通の書あり。とり出だしひらき見れば

金　箔　　五百目

爲再建令寄附之者也

元弘元年二月

とありしよし。野州栃木町渡邊某よりの文通に。いひおこしたれば。こゝにあるを

文政乙酉長月朔

藤原少將
公　綱

文寶堂抄出

○窮鬼

文政四年辛巳の夏のころ。番町なる四五百石ばかりの武家の用人。大かたならぬ主用にて。下總のかたほとりなる知行所へ赴くことありけり。江戸をたちて。ゆく〳〵草加の宿のこなたより。一箇(ヒトリ)の法師あへり。見るに年の齡は四十あまりなるべく。面は青く。又黑く。眼深くして。世にいふ鐵壺めきたるが。顔尖りていと痩せたり。身には溷鼠(トナ)染とかいふ袴(ハカマ)の單衣のふりたるを。褄とさみして。頭には白菅の笠を戴き。頂には頭陀袋を掛けたり。

跡につき先にたちてゆく程に。烟草の火などを借られしより。物いふこともなむ〳〵をり。さて和僧は何處より。何所へ赴き給ふにかと問ふに。法師答へて。これは番町なる某の屋敷より。越谷へゆくと申す。用人聞きてふかくあやしみ。そはいはるゝことながら。これはその屋敷の用人なり。こが素より見おらぬ人の。わが屋敷にをることやはある。出家には似げなくも。そら言をいてるゝよと。爪彈をしてあざ笑へば。法師も亦あざ笑ひて。なでふ和どのをあざむくべき。和殿が吾を見おらぬなり。そも〳〵われを何とか見たる。これは世にいふ貧乏神なり。和殿は譜代のものならねば。むかしのことはおらぬなるべし。これは三代已前より。和殿の主の屋敷にをれり。さるにより彼家には病みづらふもの常にたえず。先代兩主は短命なりき。只是のみならず。よろづにつきて幸ひなく。貧窮既に世をかさねて。祿はあれどもなきが如し。かくても家のこびざりしは。先祖の遺德によれるのみ。昔和殿の主家には。おか〳〵の事ありしなり。近ごろは又箇樣々々と。人にはらさぬみそか事を。見つるが如く說き示すに。用人いたく駭き怕れて。嘆息の外いらへも得せず。窮鬼はこれを見かへりて。さのみおそるゝことにはあらず。和殿の主の世に至りて。いよ〳〵貧窮至極おたれど。その數やりやく竭きたれば。われは他所へ移るなり。今よりして

和殿の主人は。ささくさおふる家となりて。世をがさねたる借財なども。皆返をべきよす
がはいで来ん。ゆめよ疑ふべからぞといふゝ。用人心おちゐて。おからは君はいづ方へ遷
らせ給ふゝやと問ふ。窮鬼答へて。されはとよ。ぞが行くところは遠くもあらぞ。和殿が主
の近隣なる何がしの屋敷ゝをらん。その移轉の程。一両日いさゝかのいとまあれば。越谷
ゝたりゝ相識るものを詣はんとて。出で来たれど。翌は彼處ゝ移るなり。見よ〳〵今より
彼屋敷は。よろづの事ゝさちなくなりて。遂ゝ貧窮至極せんこと。和殿の主の今茲まで。頭
を擡ぬ如くゝなりてん。ゆめな洩しそとさゝやきつゝ。こや越谷まで来る程ゝ。あやしき
法師はいつちゆきけん。忽見えぞなりしとぞ。いてれしことのおるしゝや。かくて件の用
人は。知行所へ赴きて。村役人等とかたらふゝ。たび〳〵の借財をれば成り易からじと。あ
やぶみたるゝ事立どころゝとゝのひて。思ひしより物多くかり得てかへりけるとなん。
ての一條は。おなじ年六月の下つかた。蠣崎波響の話說なり。彼用人と親しきもの。波響ゝ
も亦疎からねば。渠より傳へ聞きしといへり。かの武家幷用人の姓名も定かゝて。まさし
き奇談なるよしなれども。世ゝてぞかりの關ゝ任せて。そこらのくたりは具ゝ記さぞ。猶
遠からぬ程なれば。知りたる人もあらんかし

ちなみゝいふ。世ゝ福の神として祭れるは。富貴を禱る爲なれば。貧乏神といふもあるべし。
且福は禍の對。貧は富の偶なるをもて。神史ゝ幸の神あれば。又枉津日の神もあり。佛書ゝ
も吉祥天あれば。又黑暗天もあり。唐山ゝはこれを窮鬼といふ。東坡ゝ送窮の詩あり。歲の
十二月下旬。彼ゝて家の内を掃除して。新年を迎ふるを送窮といふ。この方の煤拂と相同
じ。送窮の事は。荊楚歲時記。五雜俎等ゝみえたり。又耗といひ。眚といへるも。とゝゝいふ
ぴんぼうがみと相同じ。耗は類書ゝ載せたる。唐の逸史ゝ。玄宗の夢ゝみえし。終南
山の鍾馗の靈が劈き啖ひしといふ鬼の名なり。耗は即虛耗の義なり。よりて皇國ゝて。薫
香のゝほひのうをるゝ。耗の字を當てたるなり。耗は破財の鬼なるべし。又眚は牛ゝ似た
る獸ゝて。よく禍をなをといふ。黑眚の祟ありしは。宋元通鑑徽宗紀ゝ見えたり。これ宋の
衰ふる兆なりければ。耗も眚もぴんぼうがみとよみて。その義ゝ稱ふべしと。最ゝ家嚴の
いはれし事あり。近世江戸牛天神の社のほとりゝ。貧乏神の禿倉有りけり。こは何がしと
かいひし御家人の。窮してせんかたなきまゝゝ祭れるなりといひ傳ふ。さるを何ものゝ
あざゝやありけん。其神體を盜みとりて。禿倉のみ殘れりと。四方赤ゝ見えたり。たゞめて
れを祭りしもの。敬して遠ざくる意ならんゝは。容むべきことゝもあらねど。貧乏神を盜

みしに。いかなる心にかありけん。こゝ借金を質におくといふ諧と佳對なり笑ふべし。四方のあからさまにおもひ出でたり。天明のころ。四方山人が。窮鬼の像賛に。おのれやれ富貴になさでおくべきか。貧乏神の數をそむかばとよまれしを。ある人難じてこの歌一首自他なれば。語をなしがたし。おのれやれ云々といへる上の句に。自なり。貧乏神の云々といへる下の句に他にあらぬやといいれしまに。山人もいひどがたくて息狀を出だされたり。さればとて難ぜし人の賢にして。よみ人の拙きにもあらぬ。古人もかゝる謔あり。譬に芭蕉が發句に

梅さくらさぞあか衆かな女かなといへるも。手にをてあにぬにて。こか衆かな。女かなといへば難なし。又其角が發句に

この人數舟なればこそ凉みかなといへるも。手にをてあにぬ。船なればこそ凉みなれといふべしと。家嚴いへり。皆是千慮の一失にて。英雄人を欺くにちかく。これらは家庭の餘聞なるを。筆のついでにしるせるのみ

再いふ鼠をも耗といへり。鼠は何にまれ鹽み損ふものなれば。破財の義を取りて。しかも異名せしなるべし。沈存中が筆談に。慶曆中に（宋仁宗年號）有一術士姓李。多功思嘗木刻一舞鍾馗。高二三尺。右手持鐵簡。以香餅置鍾馗左手中。鼠緣手取食則左手扼鼠。右手運簡斃之。以獻荊王王云々。（見第七卷）この鍾馗のからくりに。鼠を敲ち斃させしも。鼠の事を耗といへば。彼唐逸史中なる虚耗の鬼によりどころあり

予つねに。人の家に至る毎に。こゝろをつけてこれを見るに。その家の盛なるは。陽氣必室に充ち。又衰へたる家は。陰氣必室に充てり。夜分は燈火の明暗にても。その盛衰はしらるゝものなり。およそ人の盛衰は。時運に係るものなれども。主人の心術行狀によらずといふこともなければ。業を勤めて著ることなく。朝とく起きて陽氣を迎へ。埃を帰りて陰氣を送らば。窮鬼も憑ることなかるべし。しかれども。真の貧富を推をときは。あなかち貴賤によるにしあらぬ。道を志るものおのづから貴く。足ることを知れば富めるが如し。かの愚福にして。蠢蠢なるも。たからを積みて散らすことをしらぬ。老いて諫れる子のなきものは。臨終正念こゝろもとなし。もし顔淵原憲が志ありて。且貧しき家には入らんとしつる貧乏神も。鼻をつまみて。必逃げんと。家嚴はをり〳〵いへるなり。さりけれども。巖居水飲浮世に疎く。富貴を見ること糞土の如きは。是人情にあらぬかし。窮達貧富を時に任して。生涯毀譽なく。命長きは。これ天命を保ぬる大福長者といふべきのみ